
クロス×ライン

阪野隆平

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

クロス×ライン

【Nコード】

N1999E

【作者名】

阪野隆平

【あらすじ】

自由を求める『人』ではない『人』を中心に起こる破壊と混沌、そして運命の線が交錯する。少女と男。少年と少女。そして、兵器と怪物……。それぞれの線が重なるとき…事件は動く。

序話 拘束解除（前書き）

初めての小説なので下手でも大目に見てください。

序話 拘束解除

目の前が暗くて見えなかった。

目を閉じているのか、開いているのかも分からない。

目が本来の働きを放棄していたからだ。

…もつといえは何も見えない、辛うじて強い光を感じることができくらいだ。

この場所に押し込められて何年たったのか…、知る術は全くなかった。

毎日が同じ場所での同じことの繰り返し。

腹を割かれて内臓を持つていかれ、血を抜かれ続ける。それでも死ぬことはない。

だって、私は人間じゃないから。

だから、ここにいる人間は何にも感じない。

同族じゃないから。マウスだから。

マウス。

私はマウス。

内臓を持っていかれても血を抜かれてもすぐに元に戻る、とても便利なマウス。

それが事実。

そして、現実。

事実だから泣けてくる。

現実だから痛い。

涙なんてもう枯れているけど。

痛みもずっと感じて慣れてしまったけど。

私は夢を持ち続けていた。

たとえ、どんなときでも。

だから、我慢できた。

けど、私はもう……………。

…………もうどうでもいい。

死んでも構わない。

楽になれるならそれでも……

——死にたくない。やっぱり死にたくない！

夢が、私の夢がまだ叶っていない。だから。だから。だから。だから！……。

「……まだ死んでいなかったか」

……久ぶりに人の声を聴いた。何年ぶりだろう……。

「恐ろしいほどの生命力だな」

勝手なことを……。

「そろそろ、外の空気を吸わせてやってもよいかと」

外の空気？……。ああ、新型爆弾の実験体とかだな。

便利だからな、そういうことに関して、『死なない』ということ
は。

「甘いな、大尉。この生き物は危険だよ。私達のような弱い人間に
とって。この『物』たちがどれほど危険なことか……。」

弱い、か。人間誰もがそうだな。

弱いから一人ではなく皆で仲良く私の内臓を抉り続けるのだな。

弱くてよかったな。人間。

「しかし、このまま実験を続けても意味はない。こいつはもう実験体としては死んだ。それに実験もやりつくした。次は……そうだな、実戦だな」

実戦？実戦だと？

約束を守らない人間の言うことはもう聞かない。

「そうだ。それがいい。実戦で復活するかも知れない。この……」

もう黙れ！

私が何をしたっていうんだ！

私はお前らの言うとおりに任務を忠実に遂行しただけだ。

言うとおりにすれば、私の約束を、夢を叶えてくれるといった！

だから、お前らに従ったんだ！

その結果がこれだ。

実験体だ。

マウスだ。

もうお前らの言うことなんか聞かない。

絶対に聞くものか。

ガチャッ

口を塞いでいた拘束具を外される感覚がした。

久しぶりに声を出せるようになった。

声帯が生きていればの話だが。

「……コードネーム——、聞こえるかい」

ああ、聞こえてるさ。

「声帯が無事で助かったよ。気分はどうだい？」

最悪だ。

「仕事だよ。約八十年ぶり、第一次大戦争以来だね」

八十年も経っていたのか。

ここに閉じ込められてから……どちらにしろ引き受けないさ。

「もちろんこの仕事を完遂すれば君の夢。『自由』を今度こそ与えよう。どこにでも好きなところに行きたまえ」

自由。

それは私が何よりも求めていたもの。私の夢だ。

だが、人間は約束を守らない。信用できない。

「確かにそうだ。人間は皆嘘つきだ。だが、考えても見たまえ。代わりの実験体があれば、少なくとも君は我々の実験体にはならずに済むのではないかね」

……それもそうだ。

約束は守るんだぞ。

私とその代わりの実験体とやらを捕まえてきてやる。

「話が分かって助かる。しかしまずは……その血だらけの身体を洗いたまえ。髪も切ったほうがいいな。仕事の詳しい内容を話すのはその後からでも遅くはない……」

その言葉がいい終わらないうちに閉じ込めていた扉が開いて、暗かった部屋に光が満ちた。

私が何十年かぶりに浴びた光は……閉じた瞼の上からでも涙が出そうな位眩しかった。

「まったく、ああいう『物』は扱いやすくていい」

「しかし、本当によいのでしょうか」

「何がだ」

「引き受けたフリをして、我々を襲うことは……」

「安心したまえ。アレは異常なほど命令を引き受けた後は従順だ。アレらが全部そうだったら、私達は楽でいいのだがね」

「……………」

「さて、仕事だよ大尉。上手くいけば、来年の今頃は私達はこの国の中枢にいるだろう……」

序話 拘束解除（後書き）

これから、もっとうまく書けていけるよう努力していきます。

一話 昼食と会話（前書き）

人物の名前を変更しました。

一話 昼食と会話

西暦2025年、1月30日 昼前

大日本帝国軍帝都第六ブロック基地 食堂

この日の大日本帝国の首都、帝都は池が凍ってしまつくらいの寒さに襲われていた。

雪が降っているテレビの映像がさらに外の寒さを感じさる。

軍の食堂。

天井近くに設置されているテレビを見ながら、もくの ひいちゃん木野柊はうどんを啜っていた。

今、自分がいる場所は天国だな。

柊は正直にそう思った。

大日本帝国帝都第六ブロック基地の中にある、収容最大人数二百人の食堂の中には柊を除いて数人しかいなかった。

食事を取っているのも柊一人だけで他の人間は、新聞を読みながら湯気が出るコーヒーを飲んでいる退職間近の老兵、一人で詰め将棋をやっている太った准尉ぐらいだった。

しかし、一時間もすればここも満席になる。

現在、外の吹雪の中で訓練中の連中が戻ってくると席を取るのに苦勞する。

それなら早めの昼食を食べるほうが席を取るのに楽なのでいいに決まっている。

柊はそう考えていつも早めに昼食をとっているのだ。

それにもうひとつ。自分が所属している隊はお世辞にも忙しいとはいえない、ここでも特に暇な隊だったからだ。

さらにいうなら、弁当を作ってくれるような存在は柊にはいない。

唯一の肉親である妹は兄の弁当を作るよりも睡眠時間と勉強の時間を優先するだろう。

それはそれで結構なのだが、兄としてはやや寂しさを感じずにはられない。

寂しい事を考えていた柊の背中が不意に揺れた。

後ろを振り向くと士官学校で同期だった、柿本誠太郎かきもと せいhtarouがトレイの上に昼食を載せた状態で柊の後ろに立っていた。

「よう、木野。相変わらず冴えねえ顔してるな」

やや乱暴な口調は彼の特徴だ。

外見も黒い軍服を着てなければあまりお近づきにはなりたくない、

荒々しい熊のような顔つきをしている。

軍服を着ているからといって一般人が親しくしてくれる訳でもないが。

一方の柊は大柄な柿本より背は高いが、彼ほどの筋肉はない。

顔も柿本の熊のような顔つきと違って、知的で端正な顔つきだ。

眼鏡を掛ければ、ガリ勉といわれても文句の言えない顔つきでもある。

ここ最近では柿本の隊は忙しく、会う機会がなかった。

事実、二人は約一ヶ月ぶりに言葉を交わしていた。

「訓練、早く終わったのか」

柊は柿本が椅子に座って、落ち着いてから聞いた。

「そうだよ。外は大雪だからな。隊長がこれ以上続けても風邪の犠牲者を増やすだけだって愚痴ってな、早く終わったんだ」

「なるほど。杉村隊長は優しいんだな。どんなときでも怪物に立ち向かわなくちゃいけない身分である『有害指定生物捕獲捕殺専門部隊』の隊長なのに」

「こんなときに暴れる元気のある『生物』もいねえよ。そう祈りたいね、俺は」

「そうだな」

有害指定生物。

約二百年前の西暦1809年、10月にイギリスの森の奥で発見されたのを皮切りに、10年も経たない内に世界各地に存在することが確認された。

その姿は多種多様だが、共通点は捕食対象を人間を含めた全ての生き物に定めていた、ということだ。

恐ろしいことに有害指定生物同士も含めてである。

皮肉にも『生物』の出現で世界中の人間達は力を合わせるため、自分達の争いを中断して『生物』との戦いを始めることになった。

二度の大戦後、世界中の人間は『世界連合』を結成し、『生物』たちの動きは00年以後、影を潜めている。

しかし、一方で沈静化した『生物』の密輸などが問題となっている。

生物は強靱な生命力と再生能力を持っており、各国でも研究が進められているがそれは先進国、しかも世界連合の常任理事国のみである。

それ以外の国は三ヶ国以上の常任理事国の承認を得なければ『生物』の研究は行えない。

しかも、承認を得るには1年以上の月日がかかる。

多くの発展途上国は一步でも先進国に追いつきたいため、『密輸』という危険な橋を渡らざるをえないのだ。

また、密輸の過程で逃げ出した場合の被害は想像以上のものとなる。

それを証明した痛ましい事件もあったがここでは深く追求しない。

「奴らってそんなに凄いのか」

柊が好奇心で聞いた。

生きている様子は士官学校時代にビデオで捕獲捕殺について講習を受けたときの映像の中と、実物は死体でしか見たことがなかったからだ。

生きている実物は見たことがない。

「ああ、ホントな」

暗い声で柿本が言った。

二ヶ月前、彼に会ったとき五回程任務で捕獲と捕殺に携わったことがあると聞いていたからだ。

双方、酒を飲んでいたのでまともな回答を得ようにも得られなかったが。

「もし、あいつらがまともな知識をもっていたら、って思うと冷や

汗かくぜ。大体火を吐く奴なんかに対して飛び道具なんか絶対に役に立たねえよ。逆にこちらが火傷する」

柿本はそういつて身を震わせた。

『生物』が危険といわれる理由は人を捕食する以外にこの特殊な能力がある。

柊が知っているのは水の塊を吐き出して、コンクリートを破壊したとか、超音波で建物や人の鼓膜を潰したとか。

どちらも、人が多い都市に現れればとんでもない被害が発生する。

『生物』のもつ特殊能力はある意味、人が生み出した武器以上の危険があるのだ。

そのため、都市内には絶えず軍の姿が見られる。

だが、欧米やアメリカのオカルト集団の中にはそんな『生物』を神の使いとして崇める人間や逆に地獄の使者として過激な行動に出る集団などがある。

最近では少し変わっている人間や動物を見つけると集団で暴行を振るい、取り返しのつかない事態になることも少なくない。

また、多くの動物愛護団体から『生物』の扱いに対しての抗議文がかなり送られてきてもいた。

『生物』のほとんどが軍に捕殺されているという特番がテレビで放送されたため、抗議の連絡は未だに絶えることが無い（もっと

も、以前から捕殺禁止の要求はあった。理由は後述）。

軍人に言わせてみれば『生物』に動物愛護を説く団体の気が知れない。

彼らも一度、捕獲することの難しさを知ればそんな酔狂なことを言わなくなる。

「お前が羨ましいよ。現場よりそっち（戦術専門）のほうが怪我の確立は少なくて」

湯気が出る大盛りのうどんを柊と同じように啜る柿本は言った。

柊は軍でもエリートである戦術専門軍人だった。

逆に柿本のような軍人を戦場軍人と言う。

この呼称は最初、戦術専門の軍人たちが戦場にいる軍人をバカにした言葉から生まれた。

このことを聞いた戦場にいた軍人達は大規模な反抗運動を起こしたが、当時、戦場にいた司令官が「戦場にいる俺たちのほうが軍人としての格は上だ」という一言から反抗運動は沈静化しそのときの呼び方が現在に定着した、という逸話がある。

「柿本みたいな奴がいなきゃ、俺らみたいな非弱な軍人は一瞬で殺されるがな」

柊は苦笑いしながら言った。

この言葉は嘘ではない。

自分のようなデスクワーク派の軍人は、柿本のような戦場軍人がいなければ『生物』とともに戦って生き残ることはまず不可能だ。

冷め始めたうどんを口に運びながら柊は暗い話題を変えるため、近況を柿本に聞いた。

すると、先ほどまで饒舌だった柿本は突然黙り込んだ。

彼と長い付き合いの柊は直感した。

（何かいいことがあったな）

「新しい彼女でもできたか」

冗談交じりに聞いた。

が、彼の答えは柊が久しぶりに驚く内容だった。

「ついこの間、昇進したんだ」

柿本の声は何気ないように言おうとしながら、言い切れていなかった。

「なんだって？」

柊は驚いて箸を落としかけた。

驚いている状態のまま、柊は話の続きを求めた。

「いつ昇進したんだ？」

柿本の顔を見ると照れくさそう笑っていた。

「ついこの間、密輸送途中の有害生物を捕縛するときに隊長のアシストを上手く出来てな。そのときに隊長から『お前は見込みがあるから』といってな」

照れくさそうにいいながら「まあ、ほんの准尉なんだが」と唇を緩めながら言った。

柊は驚いてもう声も出なかった。

柊の現在の階級は少尉。

柿本の准尉より一つ上である。

しかし、柊の場合は戦術専門の少尉だ。戦術専門の軍人の中では一番、地位が低い。

それでも、士官学校卒業時に少尉というのは最高位だった。

つまり、柊は士官学校時代、戦術科でトップクラスの成績の持ち主だったのだ。

日本帝国の士官学校では卒業の際、戦術学を選んだ兵は普通の兵より高い地位が与えられる。

これは戦術専門の兵は名門出身のものが多かったため（一概にそうと

言えない。現場の軍人でも名門出身の人間は多くいる）で、柊の亡くなった祖父も戦術方面の准将だった。

また、戦術学のほうが、学費が高いことも名門出身のものしか学ぶことのできない理由のひとつでもあった。

昔から使う人間のほうが使われる人間より高い地位にいることは当たり前だ。

だが、柿本の場合、下士官では一番下の伍長から始まり、わずか一年で准尉にまでなったのだ。

そのこと自体は現場での働きによつては珍しいことでもない。

働きも含め、隊長に気に入られれば、士官学校卒業（二十五歳）から五年程で佐官クラスも夢ではない。

しかし、一年間まったく同じ地位であるということに最近、柊は少なからず不満を感じていた。

柿本のほうが一人の戦場の兵としては優秀であるということは士官学校から知っていた。

分野は違うがそれでも一年間、全く成長していない自分の階級と力を発揮出来ない今の現場が、急に恨めしく思えてきた。

「凄いな、柿本。俺なんてまだ少尉だ。一年経つても」

そんな考えを押さえながら、柊の声は沈んでいた。

考えていた以上に心のダメージは深い。

「俺とお前は分野が違っじゃねえか。お前は使う、俺は使われる。俺たちはそういう関係だって、卒業するときいったじゃないか」

そんな様子に柿本も励ますようにいったが最後にこう付け加えた。

「まあ、あの隊の下にいるままだと昇進は難しいかもしれんが」

あの人……。柊の上司の零番隊隊長、もりやま みこと森山命人のことだ。

柊と命人との出会いはある意味運命的なものだった。

そういうと響きがいいが柊に言わせれば、あの時から俺の不遇の始まりだというだろう。

そして、命人の出会いが彼の運命を再び動き出させたと言っても――。

一話 昼食と会話（後書き）

評価してくれると嬉しいです。

二話 回想（前書き）

ちよつと長いかも知れかもしれませんが読んでくれると嬉しいです。

二話 回想

西暦2024年3月13日

暖かくなり始め、春の兆しが見え始める季節。

大日本帝国軍帝都第六ブロック基地のどの隊に配属されるか、一週間後に発表される日でもあった。

発表までは休暇であるため（名目上、この一週間は配属されるまでの準備、ゆつくりと家族と過ごすための休暇である）、それまでの厳しい訓練、勉強の日々から抜け出せての開放感が柊たち、新兵士達にあった。

柊も彼女と今まで訓練と勉強漬けのせいで、一緒に過ごせなかった分を取り戻そうとプレゼントの準備、レストランの予約などには少ない貯金を崩したのだが……。

休日の1日目、3月13日。

この日、いつも彼女と食事をしているレストランより、若干上のランクのレストランを予約した。

正直、安くはなかった。

だが、せめて今まで出来なかったデートの分、全部とはムシが良すぎるかもしれないが…それぐらいの気持ちで大金を出した。

彼女との連絡を朝の九時にとり、七時にレストランで会う約束をした。

この時点までは全くいつもと変わらなかった。

もつとも、それは柊の私見だったが。

七時になると彼女はレストランに現れ、予定通り食事もメインディッシュまで食べ終え、デザートに移ろうとしたとき…彼女はこんなことを言つて柊の心をスタボロにした。

「ごめん、柊君。私達別れよ」

「え、なんで？」

別れられる理由がわからない。

「いい人ってことは分かっているの。けど、もう付き合っていく自信がないの、ごめん……」

意味が分からない。

何故だ。

なかなか、会えなかったことが理由なのはなんとなく察しがついた。

しかし、これから正規の軍人になれば少なくとも士官学校の頃ほど時間がなくなる訳でもない。

そして、柊は最悪の、ある意味、真実に近い言葉をゆっくりと言葉にして吐き出した。

「……新しい彼氏、か」

彼女の答えは無言。

柊はそれを肯定と受け止めた。

目と鼻が痛み出してきた。

さらに彼女は信じられないことを言った。

「お腹の中にね、赤ちゃんが……」

……もう、たくさんだ。

何か言葉を出すと、目から熱い水が出そうだったので必死に我慢した。

それからの会話は『元』彼女の一方的な攻撃だった。

新しい彼氏が自分が一人だったとき優しくしてくれたり――。

新しい彼氏が柊より経済的に豊かなことだったり――。

新しい彼氏が……――。

気がついたときには自分の部屋のベッドの上だった。

家まで戻ってきた記憶がスッポリとない。

（もしや、夢オチ？）

一種の現実逃避だったが、このときの柊の精神状態はそう思わなければやっていられない状態だった。

そして、夢オチではない証拠にすっかり財布が軽くなってた。

て、というか別れるつもりなら食事にOKするなよ！

俺は遊びだったのね！

……少し涙が出てきた。

休日の2日目、14日。

傷心の心の状態を保ったままベッドの上にいたら、いつの間にか夕方だった。

一日無駄に損した気分だった。

休日の3日目、15日。

一昨日のダメージからかなり回復した柊は今まで苦勞をかけてきた妹に、感謝を示そうとプレゼントを贈ることにした。

もつとも、そのプレゼントは元カノに渡そうと思っていたネックレスだったが。

少し、高価すぎる感もあったが……せっかくだ、処分するのも忍びない。

せっかく買ったのだからここで使わなければ、否、ここで贈らねばいつ贈る！の、心意気で帰ってくるのを待っていた。

……妹はその日、帰ってこなかった。

夜中前、テーブルの上にメモがある事に気づいた。

『しばらく、友達の家に泊まります』

日付は昨日、現在の時間は二十三時。

この日、寝た場所はソファだった。

休日の4日目、16日。

この日は無駄な日にしないと心に決め、配属されてからの準備（本来そのための休日だ）に午前中を費やし、午後からは家の中の整理整頓に勤めた。

大量のゴミ袋を見ながら予定通りに充実した日だと心から思えた。

しかし、空しい気分になるのは何故だろう……。

休日の5日目、17日。

この日は士官学校の仲間達と飲むことが決まっていた。

配属される日の三日前である。

友人の一人曰く「前々夜祭」とのことだ。

ここ数日、気分が沈むようなことしかなかった柊にとって、この飲み会があったことは幸いだった。

唯一いけなかったことは酒に強くないくせに飲みすぎたということだ。

普段は無計画に飲まない柊だったが、この日ばかりは飲んでも飲み足りないような気分だったのだ。

夜中前、二次会に参加したあと三次会に行く仲間達と別れた。

仲間の何人かは心配して一緒に帰ろうとしたが柊は断った。

なんとなく吐くかもしれない気分だった。

友人といっても何かを吐くところはあまり見られたくない。

幸いなことに吐きはしなかった、が尿意は覚えた。

しかたなく近くの噴水で有名な公園のトイレに入り用を足して外に出ると、先ほどトイレに入るときには全く気づかなかったが少女

が噴水の前のベンチに座っていた。

今は夜中前だ、なんで女の子が……。

そう思った柊だった。少女が持っている缶のラベルを見て、そんな考えは吹っ飛んだ。

柊がつい先ほど飲んでいたビールと同じラベルだった。

昔から、柊は飲酒とタバコは絶対にしないと決めていた。

飲酒は仲間達との付き合いもあって守れなかったが、タバコは今でもない。

むしろタバコの臭いを不快と感じているほどだ。

そんな柊にとって、飲酒をしている少女をそのままにしておくことは許せないことだった。

酒を飲んでいて気分が大きくなっていたこともそんな行動に移したのかもしれない。

「おい、その君！子供がビールなんか飲むな。大人になってから飲め」

呂律は自分が聞いてもしっかりしており、ちゃんと意味は通じたはずだ。

しかし、少女は聞こえなかったかのように柊が見ている前でビールをもう一口飲んだ。

その様子を見て柊の中の何かが弾けた…ような気がした。

「おい！大人をムシするとひどい目に遭うぞ、コラ！」

巡回中の憲兵（警官の役割の兵士のこと）に聞かれると職務質問されかねない状況だ。

夜中、少女に因縁をつける大人の男性。

それでも、少女は聞こえていないかのようにこちらを向かない。

少女の見た目は中学生、もしかしたら小学生かもしれない。

小柄で肩辺りの長さの毛は所々、最近の流行なのか少し脱色している。

顔は柊のしている方向からは見えなかった。

少女は完全に無視を決め込んでいるらしく、ビールを再び飲んだ。

柊はそんな少女の態度に女も子供もあるかと、少女の座っているベンチまで歩き小さな肩に手をかけてこちらに顔を振り向かせた。

きつと驚いた顔をしているだろう、最近の大人を舐めるなよ。

柊はそう思った。

驚いたのは柊のほうだった。

目は大きく少女の瞳孔はサファイアのような青色だった。

顔立ちは日本人特有の容貌で、瞳孔の色が黒だったら問題なく『大和撫子』という言葉がぴったりの少女だった。

「君は？」

やや上から目線の口調と少女特有の高い声だった。

そして、やや怒っているように感じられた。

女性を怒らすと面倒なことは妹で実体験済みだ。

その声に若干動揺した柊だったが、そっちが悪いのだから動揺する理由はない。

「俺の名前は木野柊。それでも士官学校の戦術科卒のエリートだ」

素面の彼ならこんなことは言わないだろう。

「と、いうことは二日後、第六ブロックのどこかの隊に配属になるんだね」

なぜこんな少女がそんなことを知っているのだろう、と普段の柊なら考えただろうが…残念ながらこのとき、柊は呂律はしっかりしていたがかなり酔っていたので、彼は少しも疑問に思わなかった。

「ああ、そうだ。俺はエリートだから、絶対に一年目で大尉にまで昇進して見せるぜ」

これからの希望にあふれた人生設計を名前も知らない少女に発表する。

「……わかった。それじゃ、二日後の発表を楽しみにしておきたまえ」

「んあ？」

その言葉がいい終わらないうちに激しい風が起こり……柊が気づいたときには人影ひとつ、空き缶ひとつ見当たらなかった。

「山野柊君か。久しぶりに面白い人間だね」

少女は辺りをキョロキョロと見回した挙句、目を回して倒れた柊の様子を見て笑いながら呟いた。

その場所は近くのビルの屋上だった。

再び強い風が吹き……少女の姿はそこからも消えた。

もし、このまま何もなければこの出来事は柊の記憶の中で風化しながら、若い頃に体験した不思議な出来事として残っていただろう。

もちろん、こんな回想をしているのだからこのままで終わるはずがなかった。

二話 回想（後書き）

評価をしていただけると嬉しいです。

三話 回想そして現在（前書き）

今までの話を一つにまとめました。

三話 回想そして現在

西暦2024年3月18日

配属隊発表の日。

柊はあの夜の出来事を不思議だと感じながらも、「酒の飲みすぎ」という考えで決着をつけていた。

それよりもこの日は配属隊の発表の日なのだ。

そんなことをいつまでも引きずっている訳にはいかない。

柊は発表の九時より三十分早く配属先が発表される部屋に着いていた。

何人かは柊よりも早く着いていた。

柊と同じクラスの面子だがあまり話したことはなかった。

共通点はどれも真面目の上にクソがつくという事だ。

柊自身、自分のことは真面目な方だと思っているが彼らほどではないだろう。

合コンに誘われて、「勉強があるから」と断る人間がクソ真面目といわずになんと言おう。

柊はただ遅れるよりは早く着いていたほうが楽だと考え、早めに来たのだが逆効果だった。

沈黙の部屋で発表までの三十分間を過ごすのだ。

緊張しないほうがどうかしている。

十分ほどして、徐々に顔見知りのメンバーが部屋に入ってきた時にはほっとした。

これで無言の空間から開放される。

緊張は相変わらずだが先ほどよりはマシになった。

しばしの雑談（内容は配属される隊のこととはかけ離れたものばかりだった。おそらくわざとだろう）のあと、9時を知らせる鐘が鳴った。

9時の鐘がなり終わる前に入室してきたのは五人の日本帝国軍の軍服を来た人物で、五人とも大尉の地位を示す階級が光っていた。

それぞれの隊の副隊長だ。

帝都第六ブロックに限らず日本帝国の軍隊は大抵が五隊に分かれている。

一番隊は最も人数が多い隊で主に国防、基地の防衛。

二番隊は『生物』の捕獲、捕殺の専門。

三番隊は国防、『生物』両方の現場の作戦立案、および指揮。

四番隊は『生物』の研究、対『生物』の武器開発。

五番隊は担当する地区の憲兵（警察の役割）としての役割を担っている。

「これより、第158期大日本帝国軍帝都軍第六ブロック配属兵発表を行う。呼ばれたものは前にでて紙を受け取れ。この紙は正式にその隊に所属することを証明するものだ。紙の裏に所属することになる隊の本部への地図が書かれている。そこに行き、隊員が全員揃うまで待機」

一番隊の背の高い副隊長が、よく通る太い声で言った。

言い終えたあと隣の開いている椅子に目線を走らせた後に、諦めが入ったような顔をしたのは自分の気のせいかな。

発表が始まった。

発表の仕方はそれぞれの隊の副隊長が自分の隊に配属することになる隊員の名前を、あいいうえお順に発表していく。

呼ばれた兵は前に出て副隊長に紙を渡され目的地に向かうために部屋を出て行く。

「相沢敦、五番隊」

「赤松修平、二番隊」

「天城守、四番隊」

柊はいつ自分が呼ばれるのかと緊張しながらも興奮していた。

柊は三番隊を希望している。

三番隊は作戦立案と現場の指揮で、柊が士官学校で学んだ戦術学の隊である。

さらに、柊は戦術学の成績はトップクラスであった。

希望が通ることはあっても、通らないということはありえなかった。

…そのはずだった。

「柿本清太郎、二番隊」

友人の柿本が呼ばれた。柿本は柊より前の席にいて小さくガッポーズしたのが目に入った。

彼は二番隊希望だったからだ。

「垣根和成、三番隊」

三番隊に垣根が呼ばれた。

あまり好きな奴ではなかったが、これから一緒の隊になるんだ、仲良くしないと、と柊は思った。

いつまで経っても呼ばれないと思ったがまだ『か行』。

まだまだ先だ。

そう考えている内に気づけばもう『ま行』だった。

「目高務、五番隊」——次だ。

「向井宗平、一番隊」——この次に決まっている。

「山」なんて！」

自分の名前の『も』の段を飛ばしている。

何かの間違いだろうが…、まったく昨日から運が悪い……。

心の中でそう毒づいた。

柊の声は副隊長たちの発表を遮るには十分だったため、まだ発表されていない同期たちが不満そうに小さな声で悪態をついていた。

彼らも気が立っているのだ。

「君は？」

四番隊の眼鏡を掛けた副隊長が聞いた。

「自分は木野柊、階級は少尉です」

士官学校では戦術学では一、二を争う成績だったと柊は自負して

いる。

それは今でも変わっていない。

発表を忘れられること自体おかしいのだ。

きつと何かの手違いだ。

「ああ、君はそのまま座ってなさい」

一番隊の副隊長が状況を察したのか、穏やかな声でいった。

「君は最後に発表するから」

まだ呼ばれていない同期たちの間で声が飛び交った。

「静かに！」

二番隊副隊長の鬼のような顔の大声で静かになった。

それから、三分後。

部屋には五人の副隊長と柊以外は誰もいなくなった。

しばらく、気まずい空気が流れる。

「あの！」

柊は堪えきれずにきいた。

「自分は……」

「発表者が来ていない。まあ、予測はしていたが」

諦めの気持ちが混じった声で一番隊副隊長は言葉を濁した。

そして、懷から一枚の紙を取り出し、その紙を柊に渡す。

「その紙の裏の地図をみて、赤い丸の部屋まで行きなさい」

そういうと、柊が質問する間も無く副隊長全員が、風のような速さで部屋を出て行ってしまった。

広い部屋には柊一人だけ残っていた。

何がなんだかまだ、納得も出来ていなかったし、疑問にも思っていた。

俺が何をやったんだよ……。

一週間前から日に一度は柊の心の中で言っていた言葉だ。

そのまま立っているわけにもいかず、紙に書かれている文字に目を通した。

そこにはこう書いてあった。

『木野 柊 殿』

貴殿を零番隊に配属することを命ずる。

隊長 森山 命人』

もう何がなんだか分からなかった。

いきなり聞いたこともない隊にとばされる……。

最初は一体何の冗談かと思った。

その次にはこの状況は冗談などでは決してないという、認めたくないという現実が存在した。

俺が何をしたって言うんだ。

……本当に、最近の俺は運がない、いや呪われているとしか思えない。

この一週間にあった主な出来事は、彼女に振られる、妹にプレゼントは渡せない、見知らぬ少女に逃げられる……。

……何もかもがどうでもよくなってきた。

かといって、このままずっとこうしている訳にもいかない。

重い現実を認め、裏に書かれている地図を頼りにしながらその『零番隊』の部屋へ向かうことにした。

零番隊の部屋への道程は険しかった。

身体的にも精神的にも。

一、地下三階である。エレベータは地下一階までしか繋がっておらず、そこから自分の足で三階まで降りた。途中、空のダンボールが山積みになっていた。

二、ドアまでの道に階段以上の量のダンボール（中身あり）だらけでドアまでの進路をほぼ塞いでいた。このダンボールをどけるのに十分の時間を無駄にした。

三、ドアについている零番隊という看板がダンボール製で文字が油性のボールペンで書かれていた。さらに、紙の看板がついている角度が斜めになっている。

はぁ……。

ここまで来るまでに十回以上のため息をついていた。

いつから、エリートコースを踏み外したのだろうか。

素行はよかった。

成績もトップクラスだ。

人間関係も（異性以外なら）良好だったはずなのに。

悩んでいても仕方ないのでドアノブに手を触れた。

そのとき、バチツという音と共に手に痛みが走った。

反射的に手を引っ込める。

暖かくなってきたこの時期に静電気？

偶然だろうが本当に呪われているとしか思えなくなってきた。

大体、なんで始まる前からこんなに疲れなきゃならないのだ。

「はぁ」

さらにため息カウウントが増えた。

改めてドアノブに触れる。今度は何事もなくノブを捻りドアを押した。

「失礼します」

緊張感のため息と共にどこかへ行ってしまったらしい。

もしくは先ほどの静電気に驚いて逃げ出したか。

自覚できるほどに気が抜けた声だった。

部屋に入っただけの第一印象が「普通」だった。

窓はなく（当たり前だ。地下なのだから）、ロッカー十台が、規

則正しく右側の壁を背にして並んでいた。

十台目のロッカーの奥には着替えのための部屋か、ドアが見えた。

左側には衝立の向こうに本棚と来客用のソファアが一對、その間にテーブルが置いてあった。

最近使われた様子は見られない。目の前には縦に置かれた事務机が左右に四つずつ、合計八つあった。

上には埃以外何もない。

そして――、一番奥の横に置かれた事務机の奥にある椅子が柊に背を向けていた。

黒い軍服を着た椅子の主とともに。

先程、どこかに行ってしまったっていた緊張感がいつの間にか戻ってきたみたいだ。

柊自身、直に隊長に会うのは初めてだったからだ。

たえ望んでいた隊でなかったとしても、努力次第で希望の隊に再配属されるかもしれない。

そんな淡い期待を持って、第一印象である挨拶だけはしっかりしよう。

先程の気の抜けた挨拶はカウントしないことにする。

直立不動の姿勢で軍隊式の自己紹介をする。

「木野柊少尉、本日付で零番隊隊長、森山命人の命により零番隊に配属されました。今後よろしくお願いします」

森山隊長はそんな声に何の反応も示さず声も上げず、身体も電池が切れたラジコンのように動かなかった。

柊は少し不安になってきた。

入室してきたときの挨拶はもっとしつかりしておくべきだったとかもしれないと、柊は後悔し始めた。

何にせよ、自分で撒いた種かもしれないから、謝らなければと声を出した。

「あの、森山隊ちょ「お酒は飲んでもいいかな」」

初めて聞いた隊長の声は高かった。

自分よりも年下のような高い声だ。

だが、疑問に思ったのはその言葉の内容のほうだった。

え、何を言っているのだろう。子供でもないのに何をわざわざ…

……、ん。今の声はどこかで聞いたような……。

柊の脳が過去の記憶の棚をひっくり返すのと同時に椅子は半回転した。

その椅子の主、森山命人の顔を見て柊は呪われているのではなく、

信じてもない神の悪戯ではないかと思った。

その顔は純日本人の顔立ちで、髪は少し脱色して白髪交じりの黒髪。

もつとも特徴的な瞳孔の色はサファイアのような青色。

「な、なんでここに……？」

二日前、公園でビールを飲んで自分が因縁をつけた少女がそこにいた。

少女——森山命人は悪戯が成功した悪ガキのような顔で同じ言葉を繰り返した。

「もう一度いうよ、お酒は飲んでいいかな」

柊は何も言えなかった。という言葉が出てこなかった。

「思ったより普通の反応だね。ボクの考えじゃ、記憶がないかもしれないとも思いましたんだけど。あの時相当お酒飲んでいたみたいだし。けれど、もう一度会えて嬉しいよ。エリート軍人さん」

柊の頭の中はパンク状態だった。

もはや、現実と夢との境が曖昧になってきてはじめている。

脳がしばらく整理の時間を求めている。

「おや、驚きすぎて脳がショートしてしまったようだね。まあ、こ

れも予測していた事だよ。大丈夫、落ち着くまで待っていてあげから」

二分後。

ようやく頭の中で整理が出来、落ち着いた。

その様子を見て、命人は安心したようにいった。

「落ち着いたようだね。まあ、そこに座りなよ」

彼女からみて、右側の事務機の席を指した。

柊からは左側だ。柊は急ぎ足で歩いていき埃を払って椅子に座った。

「さて、きっと、君は色々質問したいだろう。今日の零番隊の活動内容は質問デーでしょう。なんでも質問したまえ。答えることの出来る質問ならいくらでも答えよう」

芝居くさった声で命人は言った。

柊には質問したいことが山ほどあったが最初の質問はまずこれだった。

「あなたは大人なんですか」

柊にとってはもつとも、気になることだった。

子供が軍にいるわけ無いと分かっているでも聞かずにはいられない。

それを聞くと拗ねた子供の顔をして（実際、子供にしか見えなかった）「君もか」と、小さな声で言いながら「そう」と肯定した。

となると次の質問は当然これだった。

「それじゃ歳は」

「君は初対面の女性に対して年齢を聞くのかい」

予想以上にドスの効いた声だった。

「……すみません」

柊も思わず恐縮して謝った。

「いいよ、別」

拗ねたままの表情で座っている椅子でくるくると回転し始めた。

その様子が可愛らしく柊ははつい笑ってしまったが、笑ってしまったあとで後悔した。

また、不機嫌になるのではないかと。

だが、その心配は杞憂だった。

回転をやめた命の顔も笑っていて「気にすることはないよ」といった。

この行動は彼女なりの気遣いだっただけらしい。

「今まで会ってきた人間の九割が最初に君と同じ質問をした。むしろ違う質問をされたほうが困ったね」

と軽い調子でいったあとに「でも、この質問はやっぱり慣れないよ」と付け加えた。

「さて、他の質問は何か？ボクの年齢以外なら出来るだけ答えるつもりだけど」

「それじゃ、この隊は一体何をするんですか。あと、他の隊員は」

終は思った。隊と机が飾りの場合は即刻転属願いを出すつもりだ。

「最初の質問はこの隊の役目は『最後の切り札』なんだよ。准将以上の権限がある人以外、ボクらを動かすことは無理だね。あと政府の大臣かな。細かいことは鳳翔君に聞けば分かるよ」

今日、二度目の驚きで声が出なかった。

准将は軍隊で言えば最初に將軍と呼ばれる地位にある人物だ。

政府の大臣は説明不要であるが……。

その二つ地位どちらかにある人物じゃないとこの隊を動かせないということなのか。

冗談にしては笑えない。

本当だとすればまさしく『最後の切り札』であるが、一体どんなときに出動するのか。

……あと鳳翔って誰だ？

「ああ、鳳翔君はこの隊員で口は悪いけど頭いいんだよ。法律とかルールとかにすごく詳しいんだ。観光地巡りが大好きで最後に連絡くれた場所はアンコールワットだったかな」

柊の心を読んだかのように一方の質問に命人は答えてくれたが、もう一方に関してはまだ答えてくれていない。

柊は我慢できずにすかさず聞いた。

「出動するのはどんな時なんですか」

「この隊じゃないと解決できない事件のとき」

当たり前だ。

「それはどんな時なんですか」

「君はまだ、知る必要はないね」

強くはなかったが、質問させないものを感じた。

「……はい」

柊もおとなしく引き下がった。

彼女もまだ気を許してはいないのだろう。

しばらくして、命人は柊が質問するだろう質問の答えを答えた。

「あと、ここに隊員がいないのはね、みんな軍が嫌いだからだよ」

その答えはさらに疑問を生む。

「軍人じゃないのですか、ここの隊員は」

今までに無い強い口調で柊は言った。

軍人として、「軍が嫌いだから」という理由で基地に常駐しないとは一体どういうことだ。

その質問に、命人の比較的滑らかだった言葉の歯切れが悪くなった。

「一応、名目上はそうんだけど……。皆、それぞれ事情があるんだよ。ほとんどの隊員は有給とって旅しているよ。定期的に連絡くれるし」

柊はもつとこのことについて質問したかったが、命人の顔を見るとこれ以上聞くことは出来なかった。

命人の顔は寂しそうだった。

彼女の目線の先には八つの事務机に向いている。

今はいない隊員たちに思いを馳せているのだろうか。

人の心に疎い柊でもこれ以上突っ込んで質問するのはよくないと思ったので、質問の内容を変えた。

「自分の席はどこでしょうか？」

「今座っている席でいいよ。六甲ろっこうの席なんだよ、そこ」

そういつて、柊は予想以上に命人が小柄なことに気づいた。

だが、小柄といってもやはり体形は女性で出ているところは出て引っ込むところは引っ込んでいるようにみえた。

「柊君」

「は、はい」

「なにを慌てているの……。まあいいや。この隊にはひとつとても大切な決まりがあるんだ。これは君にも守ってもらいたい」

深刻そうな声で命人が言った。一体どんな決まりなのだろう。

「それはね……」

「はい」

ゴクッ

柊は自分が生唾を飲み込む音が聞こえた。

「私に勝てば月末の飲み代は隊員の自腹、隊員の誰かが私に勝てば飲み代を奢るという決まりなんだよ」

とても嬉しそうな顔と声で大々的に発表される決まり。

だが、柊は思った。

なんだ、それ。

「いま、『なんだ、それ』と思ったでしょう。甘いな、君は。これだから、最近の若者は真面目すぎて困る」

年寄り臭い台詞を言いながら、オーバーに天を仰ぐ命人。

なんとなく、何回も命人はこのリアクションをしたような気が柊には感じられた。

「どうやって勝ち負けを決めるんですか」

どうせトラップかオセロとかだろう。

「これだよ」

そういつて取り出したのは小さな深鼠色のカセット。

柊が生まれた頃からある携帯ゲーム機の最新作カセットだった。ジャンルはRPG。

「……それで勝負するんですか」

呆れて声も出せなくなってきた。

「そうだよ。職場に来てやってもいいし、家に帰ってやってもよし。個人的には両方をお勧めするけどね」

「……………」

声も出なかった。あまりにもくだらなすぎて。

軍隊に入ってゲームを強要されるとは想像しなかった。

しかし所詮ゲームだ、大した事はない。

勉強や訓練に比べれば遥かに楽に決まっている。

柊はそう考えた。

だが、命人の、

「ボクは初心者でも全力で立ち向かうよ」

という言葉がやけに引っかった。

所詮ゲームと考えていた柊にとって、その言葉は不吉に感じた。

「奢りだからね。負けたら本当に」

ポカンとした顔の柊の顔を見ながら命人は笑う。

「あとね、ボク達に出動要請は来ないほうがいいんだよ」

その言葉に柊は信じられず、声を上げた。

「そんな！それじゃこの隊の意味は」

命人は呆れた風に言う。

「言ったでしょ、『最後の切り札』。『切り札』を何回も使っちゃいけないんだよ、少しは努力しなくちゃ」

そういつて命人は一度言葉を切る。

再び口を開いたとき、命人の青い瞳には柊の傷ついた顔が目に入った。

「結局のところ、ボクたちが動かないってことは世の中、平和ってことさ」

西暦2025年1月30日、午後五時

帝都第六基地ブロック内の零番隊隊室

大日本帝国帝都第六ブロック基地の地下深くの部屋の中、リズムカルな音が鳴り響いている。

二人の人影が自分の持っている画面を睨み続けていた。

「なかなかやるね」

軽い調子の声で少女の声が部屋に響く。

その声に埋もれながら小さく悪態をつく声が聞こえる。

「けど、詰めが甘いね」

アニメなどでよく聞く、「バッキューン」と何かが倒れる音が聞こえた。

柊は柿本と別れてからまっすぐ零番隊の部屋に戻った。

月最後の前日という、この日は明日、どちらかが飲み代を奢るという重要な日だったからだ。

柊は去年の3月から、現在までの戦績は0対9。

つまり全敗で彼の経済状況は毎月赤字寸前である。

そして、今月の戦いの結末は――、

「今月も勝ったよ」

二人しかいない部屋に少女――命人の声が反響する。

これで柊は10連敗であった。

あの日感じた不吉の予感は大当たりだった。

命人の表情は実に嬉しそうだった。

もう一人の顔は、

「……」

無表情。

「今月もボクが奢られるのか。今月はお鍋が食べたいね。寒いしちようどいいよね」

「……分かりました」

柊の声は全てを諦めたような声だった。

結局、今月も彼に経済的余裕は全くなかった。

そして、いつもならここで無言のまま終わっていた。

今月は違った。

「隊長」

柊は命人のことを「隊長」と呼ぶ。

命人は名前でいい、といったが柊は公私を混ぜる訳にはいかないと、一年間「隊長」と呼んでいる。

「ん、なんだい、木野君」

一方の命人は苗字に「君」とつけて呼ぶ。

柊が「君付けで呼ばず、地位である少尉と呼んでください」と言ったら、「地位で呼ぶのはお偉いさんだけにしている」と一蹴されたことがある。

柊それ以上強く言うことも出来ず、結局うやむやのまま、一年近く過ぎてしまった。

「いつになったら、出勤要請は来るんですか」

「さあね」

「どんなときに来るんですか」

「教えられないね」

この会話はこの一年間何百回と繰り返されてきた。つまりこの一年間、この隊は一度も出勤していないということだ。

沈黙。

いつもはこの空気では話は終わる。だが、今日は珍しく命人が会話を始めた。

「どうしたんだい。いつもの君らしくないね」

「自分は……。早く自分の力を現場で示したいんです……」

いつまでも力の火を燦らせると、火が消えてしまう。

柊は柿本が昇進したことに嫉妬を覚えていた。

もしかしたら、このまま追いつかれてしまい、生涯一少尉かもしれない。

正直、そんなのはいやだ。

「昇進したいんだね」

そんな柊の心を見透かすように命人はいった。

「けど、最初の日によったと思うけど、この隊は……」

それ以上続けることは出来なかった。

何故なら、この一年間、決して鳴らなかった電話が鳴り響いたからだ。

命人は素早く受話器をとる。

その様子を見ていた柊の心は興奮していた。ようやく、自分の力を示せるのだ。

「……はい……分かりました」

ガツチャ

この受話器が置かれる音をどれほど待ちわびたことか。

「事件ですか！」

興奮した様子で柊はいった。

「そっだよ」

「出勤要請ですか」

「…そう」

そういつて命人は「病院に行こう」と続けた。

椅子から立ち上がり準備を始めた。

「被害者に聞き込みですか？」

水を得た魚のような要領で柊は言ったが、命人に「違う」と短く否定された。

「……被害者に会いに行くことは合っているけど聞き込みはしない」

柊は納得いかない。被害者に会いに行くのに聞き込みをしないと
はどういうことだ。

教科書でしか学んでいない柊にはわからなかった。

「会いに行く被害者の名前は、木野椿^{もくのつばき}。君の妹さんだよ」

柊の頭は真っ白になった。頭だけでなく顔の色も。

このとき。平和は消え去っていた。

それは彼が望んだことで。

彼女が望まなかったことで。

そして――。

間話 考察と記憶（前書き）

長い間放置してすみません。

間話 考察と記憶

自由というのは不自由なこと。

どこかの本で読んだことのある一文だ。

全くそのとおりだとボクは思う。自由であって得したことはあまりない。

ああ、そうか。得がないことを自由というのかもしれない。

まったく、困った言葉だ、自由というのは。

人は自由であることを求める。

だが、得がないことを求めようとするなんて滑稽な話だ。

例え、自由が手に入っても隣に誰もいなければ死人と大して変わらないというのに。

だが、

だが、この一年で本当の意味で幸せだった。

彼のような普通の人と一緒に過ごせて……。

平和だった。

ボクに自由はなかったけど平和だった。

……そうか。

人が自由を求めるのは平和を欲しいからか。

平和と自由は同じじゃないけど。

求めるものは同じ。

平和。

ボクが造られた意味。

ボクが最も好きな言葉。

ボクが存在してはいけない言葉。

周りを見た。

動いている人が見当たらない。瓦礫だらけでまともに建っている建物はひとつもない。

二度と見たくない死の景色。

耳を澄ませた。

瓦礫だらけのその下から、これから最期を迎える人間たちの最期の声が聞こえる。

二度と聞きたくない死の声。

臭いを嗅いだ。

周りに漂うのは鉄の匂いと何かが焼ける臭い。

二度と嗅ぎたくない死の臭い。

空を見上げた。

空は血のような赤と闇の黒い雲のコントラストで地上の残酷な光景をさらに際立たせている。

二度と見たくない死の空。

河を見た。

河にはたくさんの何も言わずに浮かぶ人の群れが浮かんでいる。
他の生き物と一緒に。

二度と見たくない死の河。

けれど、

けれど、どんな死体よりも、どんな景色よりも、どんな臭いよりも、どんな色よりも。

一番、

一番、見たくないのは自分の姿。

死の川の水面に浮かぶ今の自分の姿。

死の空の下にいる自分の姿。

死の臭いの中にいる自分の姿。

死の声の中にいる自分の姿。

死の街の中にいる自分の姿。

生きている自分。

死んでいく周りのみんな。

自分とみんなの違い。

そんなのなかったのに。

昨日まで無かったのに。

明日から違いはある。

決定的な違い。

生きているか死んでいるか。

たったそれだけ。

それだけ。

違いはそれだけ。

間話 考察と記憶（後書き）

これからも亀更新ですが読んで頂けると嬉しいです。

四話 黄昏の蛇（前書き）

完全新作です。

四話 黄昏の蛇

西暦2025年、1月30日午後四時
帝都のとある商店街

帝都上級学校生の木野椿もくのつばきの嫌いなものはピーマン、青魚。

その次に自分の兄、木野柊であつた。

兄のいいところをあげよ、と誰かに聞かれれば真っ先に「ナシ」と答えるだろう。

いつも、物足りなさそうな顔をしているくせにいざ、何か起こると慌ててしまう。

こんな優柔不断な男のどこに「いいところ」があるのだろうか。

去年の春くらいに振られたらしいが、振った方、あなたは正しいです。

こんな男に一生ついていくよりは新しい世界へ飛び出したあなたには、きっとバラの咲き誇る人生が送れるでしょう。

あなたに送られるはずだったネックレスは私が丁寧に扱っていた
だいております。

閑話休題。

この時間帯は放課後である。

椿はこのクラブにも入部していないので学校が終わればまっすぐ家に帰る。

今、椿が今歩いている場所はこの辺りでは賑やかな部類の商店街であつた。

商店街といつても建っている店はCDショップに服屋、小物店、さらにコンビニなどバリエーションは豊富だ。

以前は八百屋や肉屋など前世紀的な店が多かつたことも、かなり近代的な雰囲気になつた。

もし、今日が休日であるならば私服を来ていてこの後、友人（多数）と一緒にレストランかカラオケに行く時間帯なのだが……残念ながら今日は平日で制服を着ている。

さらに言うなら今隣にいるのは友人（多数）ではなく友人（一人）で男だ。

まあ、男といつても彼氏ではなくクラスメイトの影村藍だ。かげむらあい

女の子のような名前であるが先述したとおり、正真正銘性別は男性である。

が、女の子のような顔をした男だ。

背は私より低いし、顔は女の私も羨む子顔だ。

顔つきも中性的で、着ている服が男子用のブレザーではなく女子用であつたら間違いなくどこかの事務所に『女の子』としてスカウトされる。

ここまで言えば彼氏として全く問題ないように思える。

外見だけは。

そう、外見だけなら私の好みだった。

「木野さん、どうしたんですか怖い顔して」

「……ちよつとね。考え事」

（人の気も知らずに……。）

今こうして一緒に歩いているだけでも嬉しいのだ。

さらに、それを自覚している。だから、

「影野君はどこに行きたいの」

「えっ、決めてませんけど」

そして、先にも言ったとおり私は優柔不断な兄のような男が大嫌いなのだ。

優柔不断な面さえなければ、ホントに……。

「あんたねえ！」

「す、すみません。えっと、CDショップにいきますか？」

「日本語が変！それに、CDショップはさっき通り過ぎました！」

まったく！

こいつはなんて奴だ。

目的地も決めずに歩いていたのか。

だが、「もう帰る！」と怒って帰るのももつたいない。

友人達の協力で「二人つきり」の半デート状態までもっていくことが出来たのだ。

ここで癪癪を起こして別れてしまったら、それこそ友人達に申し訳が立たない。

いや、それ以上にこれからの藍との接点がなくなってしまうかもしれない。

それは椿にとって、もつとも恐れていることだ。

学校では常にリーダーシップを発揮して周りを引いていくタイプの人間である木野椿と、正反対に学校でも静かであり周囲と交わりを持たない影村藍はまさに『太陽と月』の関係でだった。

『月は太陽がないと輝けない。』

しかし、太陽は輝かせようと考えて、月を輝かせているのではない。

たまたま、そこに月があるから輝くのだ』

幼い頃のどこかで聞いた詩の一節だ。

しかし、自分と藍の関係は『太陽と月』は少し違う。

太陽である自分から見て、藍はとても輝いて見えるのだ。

「あの、どこに行くんですか、木野さん」

遠慮しがちな藍の声が聞こえて我に返った。

「えっ、な、なに」

「いや、そっちは……」

「え、一体何が……」

藍の目線の先にある『モノ』に目線を合わせた。

その先には明らかに学生服の自分たちが近寄ってはいけない区域……、簡単にいうとラブホテルの密集地域であった。

「っ、ば、バカ、早く言いあさいよ」

少し噛んでしまった。地味にとっても恥ずかしい。

「だ、だいたい影野君は少し優柔不断なのよ」

行っただけでもものすごく後悔した。本音ではあつたけど。

ホントはこんなことを言いたいんじゃないのに……。

「それにねえ、影野君は……」

滑り落ち始めたトロツコが急には止まれないように、椿の言葉も急には止めることは出来なかった。

進み始めた時計や運命と同じ様に。

この時も例外ではなく、椿の口はさらに本人の望まぬ言葉を連発しようとした。

だが幸か不幸か、それ以上言葉が出ることはなかった。

藍が自分を見ずに、後ろに視線を定めていた。

その目は椿が今まで見たことのない目だった。

鋭い刃のように鋭かった。

その雰囲気を押されて暴言も止まった。

「……どうしたの、一体？」

不安になり、後ろを恐る恐る振り向いた。

普通の男がいた。これといった特徴もない男性。

しかし、その男は異質であつた。

何が異質かというと、纏っている空気が椿の日常とはかけ離れて
いるように感じられたのだ。

さらに、目の色が異常なほどにギラギラと黄金色に輝いていた。

椿と視線が合う。

男は笑った。

椿たちと視線を合わせた瞬間、男は笑ったのだ。

もみ上げ近くまで、口の端が上がり笑った。

それは人間の顔つきではなく蛇のようだった。

ゴギャリッ

聞き慣れない不快な音が男の身体から鳴り、男の身体が内側から
膨張、破裂した。

血は出ず、ただ身体の腕や脚の部分が胴体に吸い込まれていくよ
うに縮んでいく。

それと反比例するかのように身体は巨大化し、肌の色も肌色から

黒ずんでいった。

笑みの形をしたまま、口の両端が伸びていき、歯が鋭利に尖っていく。

そして———今、目の前には人間の男ではなく、ビルの高さよりも巨大な黒い大蛇がそこに存在した。

先ほどまで人だったとは到底思えない姿。

唯一変わらなかった、ギラギラとした黄金の瞳が黒色との対比でやけに目立つ。

サーベルのような銀色に光る牙が口内に収まりきらず、口の両端から伸びていた。

「ひっ」

情けない声がどこから聞こえた。

その声が自分の声だとわかったのは誰かに腕を引かれる感覚があったからだ。

周りの人たちも男が怪物に変わる瞬間を見たのか、それとも大蛇の姿を見てなのかはわからない。

椿が正確に覚えているのは最初に誰かの悲鳴が発生し、その声が放射線状に広まっていったということだけだ。

人々の悲鳴、悲鳴、悲鳴、悲鳴、悲鳴、悲鳴、悲鳴、悲鳴、悲鳴、

悲鳴、悲鳴、悲鳴……。

「走って！」

悲鳴の中での藍の声がやけに響いて聞こえたように感じた。

自分の腕を引きながら走ろうとする藍の姿。

だが、椿は動かなかった。

動けなかった。

恐怖で身体が動かない。

物語でよくある表現だが、実際本当だった。

身体を縛られ動けない。

動かせない。

「動いて、椿さん！」

その声に我に返った椿は恐怖を無理やり押さえ込み走ろうとした。

だが、動けない足を無理やり動かそうとしたからか、数歩進んで派手に転んだ。

当然、腕を引いていた藍もバランスを崩し同じように転ぶ。

転んだのは久しぶりだった。

小学生のとき、転んで怪我をした。

手のひらと足から血が出て痛くて、とても痛くて――。

そのとき助けてくれたのは――。

「立って、立つんだ木野さん！」

藍が乱暴な口調と大声で叫ぶのは始めて聞いた。

ああ、きつと、これは夢なんだ、夢。

どうせならもつと楽しい夢がいいのに。

楽しい夢が見れるように目を閉じよう……。

椿の頭は完全に現実逃避に走っていた。

椿は倒れこんだまま、溶接された鉛のようにその場から動かなかつた。

口の中でなにやらブツブツ何かを呟いている。

「動いて、立つんだ、動いて立って、木野さん！」

自然と二人の周りの人影はなくなる。

皆、我先にと一歩でも遠くに逃げたのだ。

逃げ遅れてしまった椿と藍は大蛇にとって絶好の獲物だろう。

藍は大蛇を睨みつける。

大蛇の黄金色の瞳に睨みつける藍の姿が映った。

両者の視線の一瞬の交わり。

大蛇が鎌首を上げて二人の人間を、その鈍い銀色に光る牙で串刺しにしようとする。

藍は椿の身体に抱きついた。椿の身体を少しでも守るように。

たとえ、それが何の意味も成さないことだったとしても。

藍は眼を瞑った。

ダンッ

人影ひとつない、ゴースタウンと化した街の中で、その音はやけによく響いた。

その音が響き終わらないうちに耳を塞ぎたくなるような叫び声が聞こえ出した。

大蛇の頭部に丸い穴が開き、そこからヌメヌメした赤い液体――
――血液が溢れ出ていた。

その血が黒い道路に赤黒い血の池を形成していく

藍は音が聞こえた方向を見た。

そこにはビルの上に立つ人影があった。

逆光でよく見えないが腕から何かを出し、構えている。

銃のような形の筒を。

叫び声の音量が少し下がった。

大蛇はその人影を見つけると、藍にも分かる、明らかな殺意を黄金の瞳に宿していた。

頭部からの血はまだ止まっていなかったが、痛みよりも人影に対する殺意が上回ったらしい。

幸運なことに藍と椿の存在は忘れた様子で、隙を見て藍は椿の身体を蛇から離していく。

藍がビルの影に椿の身体を置いたとき、すでに遠くの場所にいる大蛇はその巨体を生かして、人影がいるビルに体当たりしていた。

耐え切れずにビルは崩れ、瓦礫の粉塵が舞った。

普段ならばビルが崩壊する場面にそうそう出くわしたりしないが、藍の心にはこれほどびったりな場面はないように感じた。

人影も巻き込まれたように見えたが、藍はあの人影がこの程度で

やられるとは思えなかった。

案の定、すでに人影は傷ひとつ負わずに道路に立っており、巨大な蛇に対しての戦闘準備が出来ている様子で動かない。

一人の人間が自分よりはるか巨大な怪物と戦う。

そんな漫画のような出来事が藍の目の前で展開されている。

怪物も人も動かない。

藍はどちらか先に動いたほうが負けるような気がした。

そして、先に動いたのは……人影だった。

腕から出ている銃口のような筒を蛇に向ける。

それを待っていたのか、大蛇は口から何か液体のようなものを口から吐き出した。

地面にその液体が付着すると煙が上がった。

——溶解液だ。

藍は確信した。あんな液体に触れば人の身体は簡単に融けてしまふ、それを示すかのように人影がいた場所は煙を上げながらドロドロに融けていた。

人が最初から存在しなかったように。

——負けたのか？

藍はそう思った。

蛇もそう思ったのだろう、動物には絶対に存在しないはずの不気味な笑みを浮かべた。

次の瞬間、笑みを浮かべたままの蛇の首が道路に落ち、残った身体の断面から血を噴水のように撒き散らしていた。

巨大な身体……すでに死体となった重い物体がゆっくりと地面に倒れ、軽い地震のように一帯が少し揺れる。

巨大な骸の横から人影が赤い池を踏みしめながら、ゆっくりと歩いてきた。

先ほどまで筒状になっていた手を刃状に変えている。

藍は理解した。

人影が先に仕掛けようとしたのはフェイクで、本当は相手の隙を突くために、そして懐に入るために先に動いたのだと。

隙を見せた相手の懐に飛び込み、腕を刃に変えて首を斬りおとしたのだと。

人影のシルエットがはつきりしてきた。

人影は大人の男のようでオールバックに髪を固めてサングラスを掛けており、表情はまったく読めない。

コートには返り血なのだろう、赤い液体で黒い生地が染められている。

だが、何より目に付くのはその腕だった。

長袖のコートから長く突き出ているそれは、絶対に人の腕ではなく黒い両刃の剣のような形状に変形していた。

黒い刃に付いている血はコートに付いている返り血以上に目立っていた。

「いままでのコトを見て気を失わないとは、たいした根性のガキだ」

人影が言葉を始めて出した。

深く唸るような声だった。

怪物一匹を倒したのに息切れを起こしている様子はない。

この男のほうが化け物ではないかと疑ってしまふ。

「そっちの女は大丈夫か」

「えっ。あつ、はい。怪我は転んだ時の傷だけですし、大丈夫だと思います」

「……そうか」

そういうと刃状の腕が、映像が逆再生するかのように元の形に戻

っていく。

人の手に戻っても血は付いたままだったが。

男は手のひらに付いている血を、表情が読めないサングラスの奥の瞳で見たまま藍に聞いた。

「お前、名前は？」

「まずそちらが名乗ってください」

藍が男を睨みつけるようにして言うと、初めて表情がわかる声を発した。

苦笑しているような声で、

「根性あるな、お前」

血糊のついた手の平をコートで適当に吹きながら男は名前を言った。

そして短く、

「今は六甲と呼んでくれ」

そう名乗った。

五話 移動（前書き）

これからツキイチのペースで更新していこうと思います。

五話 移動

西暦2025年1月30日、午後五時
帝都第六ブロック基地内の零番隊隊室

柊は妹が『有害指定生物』に襲われたと命人から聞き、どこの病院に搬送されたのか、かなり強い口調で聞いた。

「一体、どこの病院にいるんですか!」

「落ち着きなよ、木野君」

「これが落ち着いて……」

「はい、スー、ハー」

「……スー、ハー」

「うん、うん、いいよ。落ち着いたかい」

「多少は……」

「落ち着いたところで、場所を言おうか。場所は『帝国立第六病院』だよ。車を回すようにいつから……君、運転できるよね」

「出来ますけど。隊長だって……」

「ボクが運転をしたら優秀な憲兵に引っ張られるじゃないか」

「…それもそうですね」

「あっさり、納得されるのも結構傷つくものだよ」

状況とは逆のどこか気の抜けた会話をしつつ、命人は再び受話器を手に取り車の手配をさっさと済ませた。

「さ、早く行こう」

この一年ですっかり見慣れた青い瞳がせかすように言った。

基地の車庫に着き、管理兵から車の鍵を貰った。

鍵を受け取った命人はその鍵を柊に渡す。

管理兵に案内され、見せられた黒い車体の車は一見すると普通の車と見分けはつかなかった。

しかし、軍用の車らしく、ガラスは防弾性という事に柊は気づいた。

「なんで、防弾性なんですか」

「見ただけでわかったのかい。…一応、軍の車両だからね。普通のガラスよりは安全でしょ、色々とね」

そういつと命人は助手席の扉を開けて助手席に乗り込む。

柊も運転席に乗ったときには、命人はすでにシートベルトをつけ

ていた。

柊がシートベルトをつけながら命人は状況を説明する。

「妹さんは電話によると軽傷。擦り傷だけだつて。今は気を失つて寝ているらしいよ。そんな心配そうな顔しなくても大丈夫だつて」

「少なくとも無傷じゃなければ安心できません」

はつきりと柊は言った。

柊は借りた車の鍵にエンジンをかけると、小気味いい音と振動が車内を揺らした。

「妹さんが大切なんだね」

命人が前触れもなく聞いた。

その質問に柊はやや間を置き、答える。

「…… たった一人の肉親ですから」

「…… 両親は……。言いたくなければ言わなくていいよ」

「…… 両親は自分が子供の頃に事故で死にました」

短く柊は言った。

別に悲しむ様子もなく淡々と事実を語る。

「自分が子供の頃、椿を…妹を祖父の家に預けて出かけたときに事故に遭った。祖父からそう聞いて育ちました。自分はまだ子供だったのでその頃は悲しみはしました。けど、もう過ぎたことです」

「そう……それは尚更心配だね」

命人がそういうとポケットから携帯ゲーム機を取り出した。

「ここでもやるんですか」

柊は少々呆れてしまった。

こんなわずかな時間も惜しむことなく、ゲームの強さを求める自身の上官の姿に。

「時は金なり、だよ」

命人がそう言ったあと車内はゲームの効果音以外は聞こえなくなつた。

車が基地の門を通り車道に出る。

外はすでに暗くなっていた。

電灯の明かりで昼とは違う明かりに包まれる街中を一台の車が走る。

「『生物』が……」

「ん？」

柊がハンドルを握りながら言葉を紡ぎだした。

沈黙に耐えかねたように。

不安を逸らすかのように。

「『生物』が街中で暴れるって、ここ最近聞いたことありませんでしたよね」

「そうだね。それに街中まで来れるって事は彼、もしくは彼女はかなり上位クラスの『生物』だよ。」

『生物』の上位クラス。

それは喰った人の皮を『被る』ことができる『生物』で、人の皮を被れば人間社会の中に溶け込み簡単に『食料』が手に入る。

周りはエサだらけなのだから。

だが、このことが出来る『生物』はある程度の『理性』を持つ、上位クラスの『生物』のみだ。

それ以下のクラスの『生物』はなりふり構わず、本能に従い死ぬまで人を喰い続ける。

『理性』があるかないか。

これが上位と下位の決定的違いだった。

「理性ある『生物』がなんで街中に？すぐに殺されることがわかってるはずですよ」

もしかして、死にたかったのだろうか。

ある種の鼠は大量に増えすぎると集団で海に飛び込むというのを聞いたことがある。

命人の答えは、

「……………」

彼女もわからないというような沈黙。

唯一聞こえるのは非現実の世界の効果音だけだった。

その時、対向車線の車のライトが二人の車内を照らした。

柵たちの乗る車の中を照らした車の中では二人の男が話している。

「これで計画は上手くいくはずだ」

「しかし、あのような手段で零番隊を動かすというのは……………かなり乱暴だったのでは」

「他にいい方法があるかね。むしろ、あの程度の被害で零番隊の出勤要請が来たこと自体、私は驚いているのだよ」

「……………確かに私も驚きました」

「まあ、これであの役立たずの処理も滞りなく進めば何も言うことは無いのだが……さすがにそう上手くはいかないだろう。いや、あの役立たずが予想以上の働きをしたとなると、それはそれで我々の計画は破綻だよ」

「そんな可能性があるでしょうか。あいつにはもう……」

「確かに、完全な状態とは言えないが、そのことが逆に予想外の力を引き出すことにも繋がることがあるのだよ、大尉」

彼らの会話は当然柊たちには聞こえなかった。

病院に着くと大勢の人でフロアが埋まっていた。

決して狭い訳ではなく人が多すぎるのだ。

「『生物』が街中で暴れるといつもこうだよ」

命人が訳知り顔にいった。

「どういふことですか」

「『生物』の中には病原菌を発生する奴もいるって事だよ。消毒をしに来たんだろーね。健康は大切だから」

命人の言葉の内容で、柊の頭にヒットする事柄があった。

「【事例一『生物』空輸密輸事件】ですか」

「その通り」

【事例一『生物』空輸密輸事件】とは二十年前に起こった事件で、その名の通り初めての空輸密輸事件のことである。

この事件は空輸密輸途中、急に暴れだした生物が輸送機から外に出て、通過途中の下の街に着地した衝撃で『生物』が死亡、死体から病原菌が発生。

街一帯の住人全員がその病原菌によって感染死するという、『生物』密輸史上最悪の被害を出した事件であった。

これ以後、『生物』が死ぬと病原菌が発生するという噂が蔓延し、捕殺を避けるという一般人の主な理由だった。

実際、全ての『生物』が死んだときに病原菌が発生するわけではなく、この事件で死亡した『生物』の能力がたまたま病原菌を発生させるというものだったため、死亡した直後、この能力が暴走したのが原因だ。

「うん、二十年前、その事件のときに行った病院もこんな感じだった」

二十年前といえばまだ、柊が五歳の頃だ。

その頃からすでに目の前にいる小柄な少女は軍に身を置いていたのか。

柊は耐え切れず初対面のとときと同じ事を聞いた。

「一体何歳なんですか、隊長」

「教えない」

答えは前と同じく短かった。

「それよりも、ここに来た理由、忘れているわけじゃないよね」

「もちろんです」

妹である椿の安否の確認である。

命人は軽傷だといったが、実際に自分の目で妹の怪我の状態を確認しないと安心できない。

そして、先ほどの会話で気になることが二つできた。

もし今回死んだ『生物』が二十年前の『生物』と同じ能力だとしたら……。

「今回、死亡した『生物』の能力は？」

「溶解液を吐き出す奴だったらしい。珍しい能力じゃないよ」

危険であることには違いないはずだが。

そう柊は思ったが何も言わずもうひとつ、気になっていることを聞く。

「死んでも病原菌は…」

「発生しなかった。六甲が確認したから。まず、間違いないよ」

そのことを聞いて安心したが気になる名前が出てきた。

「六甲って、確か……」

どこかで聞いたような名前だったが思い出す前に、命人が答える。

「今君の使っている机の持ち主で零番隊の副隊長だよ」

これまでの会話から、もしかしたらという推論を組み立てた。

「その人が今回の『生物』を倒したんですか」

一人の『人間』で『生物』を倒したとなるとそれはもはや『人間』ではない。

『生物』と同じ『化物』である。

「そうだよ。もちろん一人だね。無茶するタイプなんだよ、結構ね」

青い瞳が少し笑った。

柊は「そういう問題じゃない」と思ったがもう何も聞かず、直接本人に聞いて真偽を確かめようと考えた。

そんな柊の考えを知ってか知らずか、命人は言葉を続ける。

「連絡をくれたのも彼。『生物』が現れたときにたまたま、近くにいたらしくてね。彼がいなかったら被害はもつと出ていたかもしれないよ。会ったらお礼、言わなくちゃね」

久しぶりに旧知の仲の友人と出会えるのが嬉しいのか、命人の声は弾んでいた。

五話 移動（後書き）

気長に待っていただけると幸いです

六話 一同（前書き）

ツキイチと言っていました。が早く出来たのでアップします。

六話 一同

西暦2025年1月30日、午後六時十五分
帝都第六病院 病室

目を開けるとそこは白い天井が見えた。

消毒液特有の臭いがしたのでここは病院だとわかった。

（なんで病院なんかいるんだろ）

ぼんやりとした頭で椿は思考する。

最後の記憶は藍の叫び声だったような……。

そこまで考えて思い出した。

（そうだ。私、確か化け物に襲われてそこで気を……）

「気がついたか」

聞き慣れない男の声が聞こえた。

声の聞こえた方向に目をやる。

そこには髪はオールバック、サングラスに無精髭を生やし、黒いロングコートを着込んだ、良く言えば渋い、悪く言えば怪しい男が

壁にもたれた体勢で立っていた。

「あなた誰？」

「きたがみ すすむ
北上将」

無表情な顔でいう。

「名前を聞いてるんじゃない。何者なのかって聞いているの」

「自分では少なくとも君の『命の恩人』のつもりだけだな」

彼にしては珍しく冗談めかしにいった。

もちろん初対面の椿にはわからないだろうが。

「命の恩人？」

「そう、命の恩人」

この怪しい男があゝの蛇の化け物から自分を救ってくれたのなら、一緒だった藍は無事なのだろうか。

「一緒にいたガキが心配か」

「そ、そんなことないっ」

「わかりやすい反応で助かるな」

北上は面白がるように言った。

顔は相変わらずの無表情だが。

「あのガキは無事だ。少なくとも、現実逃避の果てに気を失ったお前よりは根性があったみたいだが」

北上にしてみればその言葉は冗談だった。

だが、椿はそうは受け取らず侮辱されたように感じた。

「悪かったわね！根性なしで！」

「人間の女というものは基本的に根性なしだから気にするな」

椿は興奮して気づけなかったが、北上の声には少しの動揺が含まれていた。

彼自身も椿がこれほど怒るとは思わなかったのだ。

「人間の女って、自分が人間じゃないように言っな！」

「俺は……」

「どうした、椿！」

軍服姿の兄、木野柊が物凄い勢いで病室に入ってきた。

スライド式のドアは開くことの出来る限界まで開けられている。

「ひ、柊。どうして」

いきなり兄が部屋には現れたので椿は驚いた。

柊の黒い軍服姿は北上の黒いコートと合わせて、白い病室にいやでも目立った。

「さっきそこで看護師の人に聞いた」

少しずれた回答をする。

「……ところで、あんたは？」

北上の姿が始めて目に入ったようで尋ねた。

ちょうど北上の姿は入り口から死角になっていたので柊は気づかなかったのだ。

「北上将」

「名前を聞いてるんじゃない。どういう身分かを聞いているんだ」

先ほどの椿と同じ内容の会話をしながら、柊は胡散臭い男に決して気を許さないように睨んだ。

北上の方はそんな様子の柊の姿を見て軽く肩をすくめる。

その状況の中、病室に新たな入室者が現れた。

「六甲、ここにいたんだ」

能天気な少女特有の高い声が下方から声が聞こえた。

「久しぶりだな、長門」

北上は先ほどまでのぶつきらぼうな声とは違い、親しげな声で命人の言葉に返答した。

命人のことを理由はわからないが『長門』と呼んだ。

「それで呼ぶのはやめて」

「ならお前も『六甲』と呼ぶのはやめてくれ」

「じゃあ、なんて呼べばいい？」

「今は北上将と名乗っているのでそれで」

「……言にくいからやっぱ『六甲』で」

「なんだそれ」

「言にくいよ、今の名前も。せめて山田太郎とか田中次郎とかさ」

「明らかに偽名じゃないか」

「バレなきゃいいんですよ」

「バレるぞ、それは」

「そう？」

「ああ」

「……あの」

放っておいたら日が暮れてしまいそうな（実際にはもう日が暮れているが）会話に水を差すことを悪いと思いつつも、柊は勇気を振り絞って声を出した。

二人の視線が柊に集中する。

ついでに椿も柊の方向を見ているため、実質三人分の視線が個室の病室の一箇所に集中した。

居心地の悪さを感じつつも柊は言葉を続けた。

「あの、一体彼は何者なんですか」

「北上将さんらしいよ、今は」

「今は、ってどういうことですか」

「だから、最初の言葉と会話を聞いていなかったの。彼が六甲だよ
やや呆れた感じで命人は柊の顔を見た。

「……本当ですか」

柊は『驚いた顔の成人男性』のお手本のような顔で北上将のほうを見た。

北上の方はそんな二人をイモリとヤモリの違いほどの無表情の變化で笑っていた。

「六甲？彼が六甲なんですか」

「そうだよ、木野君。彼が零番隊副隊長の六甲だよ」

「先ほどの『長門』というのは？」

「コードネーム、ようはあだ名だ」

北上：六甲は先ほどまでと同じ無表情に戻ってあっさりといった。

表面上の変化は命人以外は気づかなかったが。

「なんでそんな必要があるの」

ベッドの上にいる椿が自分の存在を示すかのように質問した。

部外者である椿にも命人は別段隠す様子もなく、あっさり質問に答える。

「習慣かな。昔、ボクたちの隊も結構物騒な任務が多かったからね」

「物騒って……椿。そんな、ところで働いているって……」

椿は「違う、違う」と首を振りながらも、妹に自分のこの意思が伝わることはないということが、経験からなんとなくわかった。

彼女は兄の言うことだけは決して素直に聞かないのだ。

命人がそんな二人の様子を読み取ったのか、安心させるように言
った。

「ここ数年はそんなことは無いけどね。」

「…あの、すみません。あなた誰ですか」

初対面の相手にとってかなり失礼な返答だったが、命人のほうは
気にすることもなく、

「一応、木野柊君の隊の上司、森山命人だよ」

「軍の上司って、ちっちゃい女の子でもなれるんですか」

「ボクはこう見えても子供の年齢は超えているよ」

「それじゃあ、いくつ…」

「さてさて、と」

年齢の話しに入りかけたときに命人はそういつて会話を打ち切っ
た。

そして、北上の近くまで行き彼の手を引いた。

「なんだ、長門」

訝しげに北上が言う。

顔は相変わらずの無表情だが、眉間の皺の数が若干増えた。

「兄弟水入らずになるのにボクたちはお邪魔でしょ」

「……そうだな」

眉間の数が一瞬にして減った北上がそう言い、病室から出て行くとして、

「あ、あの」「あの」

柊と椿の声が重なった。

「椿。お先に」

柊と椿の声が重なり、兄が妹に先を譲る。

「わかった。えっと、北上さん」

「なんだ」

「影村：藍君はどこにいるんですか」

藍の名前を言うとき、椿の顔は赤くなっていたが誰も気づかなかった。

「隣の病室だ。今日明日は大事をとって入院するそうだ」

「怪我は」

「していない。あくまで大事だそうだ。他には？」

「…ありません」

「次は自分だな。北上さん」

「また俺か…。なんだ」

「ありがとうございます。妹を助けてくれて」

「……………礼には及ばん」

沈黙の後、短い返答をし命人と一緒に病室から出て行った。

七話 勧誘

子供が一つ死んだ。

私の身体から生まれた子供が死んだ。

殺した奴は許さない。

だけど、子供が一つ死ぬことが、私が自由になる最初の一步。

悲しい。

けど、悲しくない。

代わりにあいつが私の代わりになるから。

嬉しい。嬉しい。嬉しい。嬉しい。嬉しい。嬉しい。嬉しい。……
……悲しい。

どっちなんだろう私の本当の気持ちは。

子供が一つ永遠に会えなくなって悲しいのに

嬉しい。

私ひとりだけが自由になれるから。

悲しい。

私の子供と永遠に別れて。

どっちが私の本当の心？

誰か……教えて。

#

西暦2025年1月30日、午後六時半
帝都第六病院 ロビー

「で、長門。適当なことをいってあの二人の人間から離れたのほど
ういうことだ」

「まあね。日本に六甲が居てくれたことが不幸中の幸いだよ」

二人は待合用の椅子に隣同士に座っていた。

目の前の景色には相変わらず人であふれており、六甲の視界は人の熱によって白く曇った黒いレンズ越しの世界を映していた。

レンズを拭くためにサングラスを顔から外す。

その瞳は命人と同じ青い瞳だった。

「偶然だ。俺はアメリカから逃げてきた獲物を捕まえるためにわざわざ日本に戻ってきてたんだよ」

「獲物って今日倒した奴？」

「違う。詳しくはいえんがあんな奴よりでかい獲物だ」

「それはまたご苦労様。けど、」

「協力する気は無いぞ。あのガキに手伝ってもらえ」

六甲は即答した。

拭き終えたサングラスを再び装着する。

「何でだい」

「俺は人間が嫌いだ。お前は人間に甘すぎるんだよ」

「六甲こそもっと人間を好きになったらどうだい。いい人もいっぱいいるよ」

「悪い奴も、だろ」

この言葉は六甲だけに限らず、今ここにはいない、零番隊の隊員全員が一回は発している言葉だ。

零番隊のほぼ全員、命人以外は人間という生き物を『有害指定生物』並に毛嫌いしている。

だから、零番隊は命人以外のメンバーが常にあの部屋にいることはない。

例えば人の姿が見えなくても存在を感じるため、基地内にいること自体が、彼らには耐えられないのだ。

人を嫌いになる理由は命人も理解している。

それに、それは彼女にも当てはまっている。

やや諦めが入りつつも命人は北上——六甲に協力してもらいたかった。

「……笹林中将って知ってる」

「忘れるわけねえだろ、あのクソジジイのことは。それよりもあんなのが中将に出世してたのか。世の中あんな人間が国を動かすようになったら末期だな」

六甲は酷いことを言い並べ、中将への評価を吐き捨てる。

同時に眉間の皺の数が増えた。

「で、そいつが任務を回してきたのか、零番隊に」

「うん、というか今回のこの知らせも彼から教えられてね。驚いたよ。隊の部屋には今もテレビがないんだよ。今度上層部に頼んでみようかな」

「相変わらずだな…で、どんな内容なんだ」

「マジか、それ」

「マジだよ。本当に困るよね」

アハハと命人は笑った。

「笑い事じゃねえだろ！なんでよりによってあそこからあいつが逃げ出すんだ。最も厳重に管理されていたはずだろう、あいつは！」

六甲にしては珍しく語気を荒げた。

声は低く唸る獣のようだったので決して大きくはなかったが、それでも迫力は人一倍だった。

「あいつ呼ばわりはダメだよ。ボクらの仲間なんだから」

「あんな奴は仲間でも何でもねえだろ。あいつがあんなことしなければ……」

「もう過ぎた話だよ。とにかく、ボクは中将の命令どおり彼女を捕まえる。それが任務だからね」

「明らかに畏だろ。これはお前を……」

「畏ってわかっていれば対策も出来るでしょ」

あつさりと答える命人に、

「……」

六甲は何も言わなかった。

「それを六甲、君に任せたいんだよ。今どこにいるかわからない皆に、日本に戻ってくるように伝えて欲しいんだ。ボクに何かあったときのためにね。後、言う必要はないけど気づかれずにね」

その意味が、「この任務で自分が死ぬかもしれない」といった二ユアンスが大量に含んでいることはありありと感じた。

「……本気か」

「冗談で言うように思える？この状況で」

長い沈黙。時計の分針が八周回ってから返答した。

「…わかった。協力しよう」

「ありがとう。そうだ一つ聞こうと思ってたんだ」

思い出したように命人が六甲にある一つの疑問を尋ねる。

「なんだ」

「『生物』を倒した後にやってきた軍の人に伝えた言い訳は？」

「『通りすがりの生体兵器です』」

「納得してもらえた？」

「いいや。だから正直に『零番隊副隊長、六甲』と言っておいた」

「それじゃあ、笹林中将には六甲の存在は知られているから、国外にいるだろう皆には伝えることは難しいね」

「あの時、無理にでも通りすがりの『生態兵器A』を貫き通しておべきだったかな」

「いや、それは無理があるよ」

「『核^{コア}』の反応は？」

「実のところずっと反応が止まないんだよね。一度、っていうかボクはあの子を研究所送りにした張本人だからね。六甲と違ってボクの『核』は彼女を敵と認識しているみたいだ」

自虐気味に命人は続けた。

「皮肉なことにボク的心思とは関係ないみたいだよ。『核』は敵をしつかりと見極めている、正しくね」

一方の六甲は天井を見ていた。サンガラスの隙間から見える瞳は閉じていた。

「この反応はボクの『核』のバグかな」

「あり得ないな」

六甲は即答した。

そして彼の表情が動く。

いつもの無表情から戦う時の冷酷に敵を潰すときの無表情に。

「俺もあいつを潰すのに一役買う」

「汚れる役はボク一人で充分だよ」

あくまで笑みを失わない命人の顔を見ながら六甲は言う。

「長門」

しかし、そんな六甲の声に気づかないかのように命人は言葉を続けた。

「それよりも、彼を呼んでこなきゃね」

「…まさかあの人間か」

信じられないというニュアンスがその言葉の中に多量に含まれていた。

むしろそれだけで構成されているとっていいぐらいに。

「だめ？」

だが、命人の言葉には否定する要素は何一つなく、六甲は内心では毒づきながらも認めるしかなかった。

「いや、むしろ最良だろう。俺らの本能にそれほど有効な手段はない」

「だよな」

命人は笑顔でその返答に答えた。

そして、命人は椅子から立ち上がり、出て行きた病室のほうに歩

き始めた。

「迎えに行くのか」

「うん、ここで待ってて」

「ああ」

命人の軽い足取りの後姿を見ながら六甲は軽くため息をついた。

北上と命人が出て行った後の病室では沈黙が続いていた。

柊と椿は何かを言いかけようとする度に何をいえばいいのかわからなくなってしまうのだ。

この沈黙を先に破ったのは柊だった。

「あ、あのさ」

「なに？」

「えっと、…影村君とは…一体…」

そんな質問だった。

我ながら何を聞いているのかと柊は自分自身に呆れた。

「学校の友達、別に変な関係じゃないよ」

椿はその質問に対して即答する。

「変な関係とは」

「えっ、そ、そりゃあ変な関係とは変な関係よ」

明らかに動揺した様子だった。

柊は図らずとも畳み掛けるように聞いた。

「そんな関係なのか」

「だから違うつていつてるじゃん」

「精神学の本で読んだことがあるぞ。即答するときほど相手の本音に近いつてな」

「どこの本よ、それ。この前、古本屋に処分した本？」

「昔図書館で読んだ古い本だ」

「そんな古いカビの生えた本なら間違ってる可能性のほうが高いわね。本に書いてあることを鵜呑みにするからね、あんたは」

「なんだと！」

「そんなんだから彼女に振られるのよこの『教科書人間』！」

「なっ、なんだとお」

同じ言葉を二回も言ったことさえ、柊は気づかなかった。

兄妹の喧嘩というのは大概、兄の負けになることが多い。

男の兄弟の場合は殴り合うことも出来るが、性別の壁というものがあるとその壁を崩して殴ることもそうそう出来ないものだ。

もちろん、この二人の兄妹喧嘩も例外ではない。

「何がわかるんだよ、俺の何が」

「わかるわけないでしょ。バツカじゃないの」

「ば、バカだと…」

「だってそうじゃない。元カノに振られた時だって散々理屈をこねて納得したんでしょ？頭の中で、仕方なかったんだって」

「……」

「ほら、何も言い返せないじゃん」

「……もう帰る」

「なに、逃げんの？バカ柊」

「仕事があるからな」

そういつて柊は病室を出た。

足音が妙に大きかった。

スライド式のドアが勢いよく閉まって再び静寂が訪れた。

椿は再び一人だけになった。

「少しくらい男なんだから言い返したらどうなのよ。バカ柊」

そう呟いた。

病室に向かっていていた命人が見たのは暗い空気を背負った自分の部下の姿だった。

「あれ、どうしたの、木野君。ぶん殴りあいの喧嘩して負けたような顔して」

「…当たらずも遠からずですよ、隊長」

命人は鎌をかけたのだが……どうやら凶星だったようだ。

「まあ、兄弟げんかは出来るって言うのは良い事だよ」

「どこが良い事なんですか」

負ける方に見ればたまったことではない。

「だって、上にしても下にしても兄弟はいなかったら兄弟喧嘩できないんだよ。腹を割って喧嘩できるっていうのはとても良い事だとボクは思うな。特に若い内は」

命人はそう言い、右の手の平を青い瞳で見つめた。

その行為がどういう意味なのかは終には見当が付かなかったが、命人のその雰囲気に出すことを躊躇した。

そして、なんとなく思ったことを口に出した。

「…兄弟がいたんですか」

「うん、弟ね。もう死んじゃったけど」

またも、言葉の地雷だったようだ。

「……すみません」

「それ以上暗くなる必要ないよ。別にもう気にしてないし」

軽いことのように命人は笑った。

芯の抜けた炭酸飲料のような笑いだった。

「それよりも、君にとっては朗報かな」

「なにがですか」

「任務だよ。零番隊、久々の任務」

命人の顔は変わらない笑顔だったが、炭酸が抜けて温くなってしまったかのような感じの口調だった。

だが、今の柊にとってはそんなことは二の次だった。

「本当ですか」

柊にしてみればこの一年でこの上ない言葉だった。

「それじゃ、あの電話は出勤要請の電話だったんですか」

「ああ、言い忘れてたね。あれは笹林中将からの電話だったんだよ」

笹林中将とは『生物』研究で多大な功績をもつ、將軍一のインテリと言われている人物だ。

その人物から直々に出勤要請がくるとはこの隊の存在がますますわからなくなってくるが、柊にとってこの時そんなことはどうでも良かった。

ようやく自分の力を思う存分使うことが出来るのだから。

「それじゃ、自分は車を回してきますね」

「ああ、たぶんロビーに六甲が座ってると思うから、ついでに呼んどいて」

「わかりました」

柊は子供のように元気な返事をした。

そして子供のように走っていった。

命人はそんな彼の後ろ姿を見ながら目を閉じた。

これから起こることに対してどうか彼が傷つかずに済みますようにと、信じてもない神様に祈った。

命人の言ったとおり、北上将はサングラスをかけて待合用の椅子に座ったまま寝ていた。

すぐに起きるだろうかと柊は不安に思ったが、とりあえず声を掛けてみることにした。

「北上さん」

「なんだ」

一言掛けただけで北上は目を覚ました。

「寝てたんですか」

実はずっと起きてたんじゃないかと勘ぐってしまっ。

あくびをした北上は、

「ここ三日ほど、ずっと起きたままだったからな」

と不機嫌そうに言った。

柊は悪いことをしたと感じて、できるだけ爽やかにこれからのことを伝えた。

「任務です。自分が車を回してくるので病院の玄関で待っていてくれますか」

どうでもいいというように首を回しながら、不機嫌な口調そのままに北上は聞いた。

「長門は」

「隊長のことですか。すぐにこっちに向かってくると思いますけど」

柊も変わらず爽やかに答える。

首を回し終え北上は相変わらず不機嫌そうに言った。

「長門と一緒に玄関で待つからお前は先に車を回して来い」

「わかりました」

最後まで柊は爽やかな口調で言い、駐車場に通じているエレベーターまで走っていった。

北上はその姿を見ずに天井を見ていた。

何も考えずただ、ぼうつと見つめていただけ。

何もない白い天井を。

八話 情報屋

帝都内某所。

建物の中で部屋の主が深々と椅子に体を埋めていた。

この部屋は広く置いてある調度品も一つ何十万するものばかりで、この人物の地位の高さがわかる。

部屋の主は静かに帝都の夜景を見ていた。

そして、口元を歪ませる。

なにを考えて表情を崩すのかは自身以外、知りようがなかった。

不意に部屋に電話のベルが鳴った。

先ほどまでの笑みがすぐに不機嫌な顔になる。

騒音を消すかの如く、すぐさま受話器をとった。

『笹林中将。大元帥から連絡が』

「なんと？」

『『あまり、調子に乗るな』と』

「…わかったこう伝えてくれ。『肝に銘じます』と」

「承知しました」

電話越しからもわかる無感情な声で答えた秘書は、こちらが受話器を置くまでは何も言わずただ電話を切るのを待った。

受話器を完全に置いた後、笹林中将は、「くそっ」と悪態をついた。

一本の高級な葉巻を取り出しマッチで火をつける。一本の高級な葉巻を潰した後、再び受話器をとりある場所に連絡を入れた。

「ああ、私だよ」

『なんでしょうか。笹林中将』

相変わらず使えなさそうな声をする男だと笹林は思ったが口にはしなかった。

それよりも、本題である情報管理の甘さを警告しなければならぬ。

「君の隊の情報管理はどうなっているのだね」

『それは一体……』

動揺した声が受話器越しに聞こえる。

「今、大元帥から連絡が入っていたことを確認した。どうやら我々の計画について何か知ってい

るらしい」

笹林はひどく押し殺した声で使えない部下に言葉を続ける。

『そ、そんな馬鹿な…』

これまで以上に動揺した様子で相手が声も身体も震えているのがわかった。

笹林はそんな哀れな部下に情け容赦なく言葉のナイフを刺し続ける。

「それはこっちの台詞だよ。大元帥が搦んでいるのはどちらかの計画かはわからんが…少なくとも計画は延期にしたまえ。君がもう少し有能であればこのようなことにならずに済んだのだよ。この愚か者が」

『し、しかし、すでに零番隊は動き始めました。一体どうすれば…』

本当に使えん奴め。

そう思ったが口には出さなかった。

口に出してたとしてもこの事態が好転することはないとわかっていたからだ。

代わりに、

「竹田中佐」

全く使えない部下の名前を言った。

『は、はい笹林中将』

「君も一応、第六ブロックの四番隊長を務めているのだろう。ならば、少しは強引にでも事を運びたまえ」

『しかし、もう準備は…』

「いいかね、中佐。この計画は誰か軍の高官に一人でも知られたら終わりなのだよ。それこそ

『ジ・エンド』の標的にされる。私も君もね」

ジ・エンド。

軍専用の暗殺部隊で半ば、都市伝説と化しているが確かに実際に存在。

笹林も彼らの姿は見た事がないが見た事がなくとも相手、主に軍の高官達の無残な最期の姿はいやでも脳裏に写る。

自分もそのような者達の轍は踏みたくはない。

どもりながら愚かな部下の言葉は続く。

しかし、

『わ、わかりました。すぐに…えっ』

言葉が途切れた。

どうやら小声で誰かと話しているらしい。

「どうしたのかね」

あまり時間を浪費したく笹林は不機嫌な顔を強めていく。

再び言葉を続けた部下は心なしか少し明るかった。

『……………いえ、大丈夫です、中将。それよりもこの状況を打開する策がありました』

「ほう、どうするつもりかね、大元帥にも睨まれているこの状況で何か打開策でも」

冷静な声で返したが内心では期待を持って聞いた。

『今、私の部下がですね。ある情報屋からその大元帥は来月の一日、つまり明後日に『帝都第六病院』にて手術をするとのことですよ』

「…それは本当かね」

情報屋と聞いた時点で眉唾であったが、大元帥がしばらく政務を休養するということは聞いたことがあった。

このことは軍内部でも一握りの高官しか知らず、もちろん一般人に伝わっているわけではない。

この情報屋の存在は極めて問題であるが、今は状況が状況だった

ので黙認した。

『ええ、事前入院のため明日のいや、今日にでも病院に入るとか』

一応聞いてみることは聞いてみた。

「…ガセ、という可能性は？」

『限りなくゼロです。試しに我が隊の非公開の弾薬数と薬品種類、量を正確に答えましたので』

「なるほど…それでどうやってその情報屋はその情報を手に入れたのかね」

『非公開だそうです。それに私の裏の世界に詳しい友人にきてみました所、かなり名前の通っている情報屋だそうで、ますますガセネタということ』

お前の裏の友達が能無しでなければな、と思ったがこれもやはり何も言わなかった。

しかしこれでもしかしたら気づかれることなく、あの『計画』を完遂できることが出来るかもしれない。

大元帥さえいなければ恐れることは何もない。

「そうか、その情報屋はなんという名前かね。私も確認しよう」

『わかりました。……えっと、『盤上の駒』という名前です』

「わかった。後で私自身が連絡を入れてみよう」

『それでは番号は……』

帝都の夜はさらに深く、闇に覆われていく。

八話 情報屋（後書き）

これからもペースは不規則ですが更新していければと思っています。

九話 紳士と赤鬼（前書き）

今回はつまらないかもしれません。

九話 紳士と赤鬼

西暦2025年1月30日、午後六時四十分

帝都第六病院 地下駐車場

柊は車を回すために地下の駐車場の中を走っていた。

地下なので走る足音がやたらと余計に響く。

すると、一台の車が地上の方から来る音が聞こえたので、安全のため歩くことにした。

高級そうな黒色をした車だった。

ガラスは運転席以外は黒く染められており誰が乗っているかわからなかったが、おそらく政府か軍の高官が乗っているのだろう。

今の柊は軍服を着ている。

だから、黙って去るといっのはなんだか後味が悪かった。

車に誰が乗っているにせよ顔を見て、敬礼なり何なりしようと思
い立ち止まった。

降りてきたのはスーツを着た六十代前ほどの紳士だった。

顔は深い顔立ちに白髪交じりの髪で金縁の眼鏡を掛けていおり、

その顔は軍の最高指揮官である大元帥、山本源太郎であった。

柊は驚いたという感情を飛び越えてほとんど気絶しかけた。

ぎりぎりの所で意識を失わず、落ち着こうとして深呼吸を繰り返す。

逆にその行動が心拍数を上げることに繋がったが。

とにかく冷静に考えて、どのような行動がこの状況で最善なのかを考えた。

このような状況は全く予想もしていなかったということもあるが、どんなに頭を冷やそうとしてもいい方法が思い浮かばなかった。

結局、最善かどうかは疑問ではあったが、その場で敬礼をし、その状態のまま一切動かなかった。

この時点で車を回すことはすっかり忘れていた。

「お前、そこで何している」

案の定、護衛の軍人に怪しまれて声を掛けられた。

顔を少し動かしてみると二メートルはありそうな巨人がそこにいた。

正直、今まで一番大きな人間と思っていた柿本よりも巨大だった。

「自分は見えての通りの軍人で木野柊少尉であります！そこにいらっ

しやるのは大元帥殿かとお思いまして、このような場所から大変失礼ではあると思いますが敬礼をしている次第でございます！」

「貴様、ここに大元帥殿がいると何故わかった」

柊の長い台詞を華麗に無視して巨人は厳つい顔そのまま尋ねた。

「はい！全く予測していませんでした。私がここにいるのは怪我をした妹の見舞いのためであります！」

「どこの隊所属だ？」

「はいっ。帝都第六ブロック基地零番隊所属、木野柊少尉であります」

「零番隊だと？」

あ、知っているかな。やっぱり有名なんだな。

そんな柊の予想は顔面にめり込んだ拳と共に砕かれた。

柊の軽い身体はあっさりと地面に叩きつけられる。

「貴様、ふざけるのもいい加減にしろよ」

冷たい口調とは逆に顔は赤鬼の如く真っ赤である。

辛うじて言葉を理解できた柊だったが、脳はかなり揺れており思考回路も一時ショートしていた。

赤鬼の言葉は続く。

「何故ここに大元帥殿がいるとわかった。正直に言えよ。さもなければ」

赤鬼は懷から棍棒ではなく拳銃を取り出した。

脳が揺れている時もこの状況は本能で理解した。

マジでやばい。

「本当なんですよつ。自分は零番隊っていう」

「それ以上ふざけたことを抜かすと殺すぞ！」

その声は地下の駐車場まで響いた。

「どうしたのですか、下田君」

涼やかな中にも威厳を感じさせる年配の声が耳に響いた。

「大元帥」

赤鬼が大元帥に向かってすばやい動作で敬礼を行った。

当然拳銃は懷に閉まってた。

そんな赤鬼こと下田の様子を見て再び、

「一体どうしたのですか、下田君。何か不備でも」

「この男が零番隊所属とふざけたことを言いましたのでこれから拷問にかけてでも、何者かを突き止める所存です」

もしも、大元帥も知らなければ多分命はないだろうな。

まだ振動が続いている頭でばんやりと柵は思った。

大元帥の答えは、

「零番隊？ああ、あの」

よかった！

知っていてくれた当たり前だけど。

命の生存に感謝しつつ、大元帥にも感謝した。

「森山命人が隊長の隊だったね」

「はい、その通りです」

「なるほど、君が…」

「あの、大元帥殿。零番隊というのは本当に」

存在を忘れかけられていた赤鬼が恐る恐る尋ねた。

「ああ、本当に実在する部隊だよ。最も知っている人間も少なければ、やることも特殊な部隊だからね。君が知らないのも無理はない」

大元帥は下田に向かってこう続けた。

「君の職務態度が優秀ということは重々承知しているよ、下田君。だが、彼の言っていたことは全て事実だ。彼に謝罪しなさい」

「……わかりました」

下田は不服そうにしながらも大元帥の言葉に従い「申し訳ありませんでした」と比較的大声で謝罪した。

柊も一応「こちらこそ」と頭を下げた。

大元帥はというとそんな二人の様子を見ながら満足そうに何度も頷く仕種をしていた。

「さて、下田君。蟠りも綺麗になくなったことだしそろそろ行こうか」

大元帥の目線の先には数人の護衛官が直立不動の姿勢を保ったまま待っている姿だった。

柊は正直に不気味だなと感じた。

「すみません、大元帥殿」

「いいのだよ。若い者は最初の出会いが大切なことから」

下田の肩を軽くポンポンと叩き、歩き出そうとして「ああ、そうそう」と再び立ち止まった。

「君の名前は？」

「木野柊です」

「木野君か。森山隊長のことをよろしく頼んだよ」

笑顔で大元帥に頼まれた。

「は、はい」

「それじゃあ、また会うことも会っだろう」

「あ、あのっ」

「なんだい、木野君」

「あの、ですね。何故病院に」

「それは…」

下田が口を開こうとして、大元帥が手で静止した。

「検査病院だよ。出来れば黙っておいて欲しいね」

「わかりました。決して口外しません」

「助かるよ。それでは本当にさようなら」

「はっ」

柊はビシッと完璧な敬礼して、あらゆる意味で偉大な人物の背中を見送った。

その背中が完全に見えなくなるまで。

大元帥の姿が見えなくなってから、

「そっぴゃ、俺は何しにここに来たんだっけ」

時計は七時をとくに過ぎていた。

#

『はい、こちら『盤上の駒』です』

「一つ情報を確認したいのだが」

『その前に名前を』

「…佐々木一志だ」

『嘘はいけません、笹林中将殿。我々の世界は『ギブ&テイク』が基本ですから嘘は命取りとなります。私のような優しい情報屋はそうはいませんのでこれから

気をつけてください』

「……わかった。大元帥が来月の始めに入院するというのは本当な

のか」

『はい、本当です』

「わかった、それだけでいい。値段はいくらだ」

『一千万です。その前に笹林中将殿』

「なんだ」

『あなたが何故、大元帥の行動を気にするのかその情報が欲しいのですが』

「断る」

『こちらも商売ですから。』あなたが何故、大元帥の行動を気にするのか』。これを聞き出さなければ裏の世界の罰を受けます』

「脅迫かね。軍の高官に喧嘩を売るつもりか」

『……一年前』

「なんだ？」

『やんごとなきお方がお一人、不幸な飛行機の墜落事故でお亡くなりになりました』

「……………」

『その方は前日、私の情報をお買いになったのですが……これがまあ、見返りの情報をくれませんでした。だから……』

「貴様だったのか、市山大臣を殺したのは」

『これが『情報屋』なんですよ。ついでにいいますと……ここで電話を切るのはあなたのためにはなりません』

「わかった、言おう」

『繰り返しますが嘘はいけません。私の情報網は膨大ですから。嘘か真かぐらいは半日もかからずに調べ上げます。何故確認することが出来るのに聞くのかと言いますと、ぶっちゃけた話、面倒なので本人の口から聞いたほうがいいんです。たとえ建前上でも』

「嘘はいわん。が……この情報、誰かに売るつもりは？」

『さらに一千万』

「……信じていいんだな」

『裏の世界の人間はなんだかんだ言って、義理堅いのが多いですから』

「わかった」

「まいどあり」

暗い部屋の中。

受話器を置く音がした後、椅子が軋む音が聞こえた。

「まったく、とんでもない計画を作るな、人間っていうのは。私も一応そうだが」

そう呟きながら、明らかな含み笑いが闇の中から響く。

「けど、ここで消えるようじゃあ面白くないな。残念なことに私は傍観者だからな、君の危機を救うことは出来ないんだよ、長門さん」

そう独り言を呟いたあとで受話器が鳴り響いた。

（全く、情報っていうのは人間がいる限りなくならない）

『盤上の駒』という情報屋はそう思い声を出さずに笑い、受話器をとる。

「はい、こちら『盤上の駒』です」

十話 戦闘のち離脱（前書き）

長い間更新できなくてすみません。パソコンの調子が悪かったりしたので更新できませんでした。

お詫びかどつかはわかりませんが今回はかなり長いです。

十話 戦闘のち離脱

「まあ、気持ちはわからなくもないけどね」

助手席に座る命人が呆れたような、怒っているような口振りで話していた。

「すみません……」

後部座席に座る柊は頬にシップを貼っている。

「別に、怒っているわけじゃないんだけどね。まあ、おかげで非常に時間を無駄にしたとは思っているよ」

「長門、運転中は出来れば静かにしてくれ。気が散る」

運転席でハンドルを握っている北上が迷惑そうに言った。

「ごめん、六甲」

「わかったなら、黙ってる」

北上の最後の言葉の後、今日何度目かの沈黙が車内に訪れた。

帝都のネオン街はいつでも明るい。

昼の頃の明かりのほうが弱く感じてしまっほどもに。

また、車の量も全く減る気配が全くなかった。

いや、これからもっと増えてくるだろう。

むしろ、これからが本番であつた。

遠くに見える帝都タワーの赤い色が四角い長方形のビルの中、やけに目立つこの街で、つい数時間前に血なまぐさい戦いがあつたことなど誰も知らず人々はただ、平和を貪っていた。

「平和、ですねえ」

柊の独り言が沈黙していた車内によく響く。

「平和なことと自由なことって同義だと思つ？」

「えっ？」

命人が突然意味のわからない質問をした。

柊は聞き返し、北上は出会ってから何度目かの眉間に皺寄せ聞く。

「どつという意味だ」

「言葉どおりの意味。平和＝自由って聞いているんだよ」

命人の顔は後ろの席にいる柊にはよく見えなかった。

運転席の北上もそうだったが。

その声はただ、柊の耳に聴覚情報として脳に伝わる。

その意味を解析するが、

「よく、わかりません」

「そう、それでもいいんだよ。何の意味もない質問だから」

命人はそういつて軽く笑った。

「けど、興味ない？」

「どうしてだ」

北上が聞いた。

「だって、人ってさ。昔っから、自由を得るために立ち上がったじゃないか」

「欧米諸国の革命ですね」

教科書どおりの答えをする柊。

「そうそれ。けど、それで結果平和だった頃があったと思う？」

「……………」

命人の言葉に何も返せない男二人。

「どこかで無理がきて崩れちゃうよね。なんかそれって……空しく

ない？」

「長門、今はそんな話はやめてくれ。今の俺らには関係ないだろう」
北上が苛立った口調で言った。

柊もそんな会話を断ち切るように、そして、さっきから気になっていたことを質問した。

「そうですよ、だいたい今自分達はどこに向かってるんですか」

「うーん、この方向だと……台場方面だね」

「台場、ですか」

帝都湾に浮かぶ八つの人工島は『台場』と通称呼ばれている。

本来、『生物』迎撃用の砲台だったが、現在ではほとんどの台場には砲台の代わりに軍用の倉庫が建っている。

倉庫の他には『生物』研究の施設が数多く存在した。

また、『台場』へ行くには唯一の橋である『台場大橋』を渡るしかない。

これは『生物』が研究施設が逃げ出したときに被害を台場にだけさせるための措置である。

さらに海中には爆薬が敷き詰められておりこれも『生物』対策だ。

残念なことに空からの『生物』にはまだ決定的な対策はできていなかったが。

「どうして台場に？」

「勘」

「勘って」

柊が呆れた口調になるのも仕方ない。

「結構当たるんだよ、ボクの勘は」

自信満々に命人は断言した。

「信じられせんよ」

「信じる」

短く北上が言った。

そういわれると柊も何もいえなくなってしまう。

結局、『台場大橋』を渡り終えるまで沈黙が続いた。

『台場大橋』の警備は厳重だが、少佐である命人の権限で難なく通過することが出来た。

しばらくして台場の倉庫外の手前で車は止まった。

「ここだよ」

「わかった」

言っが早いが北上は素早くエンジンを切り車から降りた。

助手席に座っていた命人も同じく素早い動作で降りる。

唯一違ったのは柊で、いきなり降りた二人についていけず、もたつきながら降りた。

「どうしてここで降りるんですか」

「勘ではここに『生物』がいるからだよ。『何でわかったんですか』という問いの答えは

『勘』」

その『勘』とやらがもの凄く胡散臭く聞こえたが、なんでかわからないがとても説得力があるような気がした。

「任務内容はね、『有害指定生物の一団の活動が確認されたので、零番隊はすぐさまこの一団を鎮圧せよ』なんだよ」

命人が何も聞いていなかった任務内容について話し始めた。

「他の隊と連携をとらなくてもいいんですか」

普通、『生物』の捕獲、捕殺に関らず二番隊、三番隊は連携して事件にあたることが多い。

「大丈夫だよ。二番隊の役目は私一人で充分だし、三番隊の役目は君がいるんじゃないか木野少尉」

「自分ですか」

「作戦立案なら君はトップの成績なんですよ」

「そうですか…」

「それじゃあいうよ。敵は一匹のボスがいて十匹以内の子分がいる。どうすればいい？」

「親分を引きずり出して叩けばいいです。そうすれば統率が取れなくなつて子分達は本来の力を充分発揮できなくなります」

「そうだよ。けど、このボスが面倒なことに頭がいいんだよ。つまり、子分何人かを戦わせておいて疲れた相手を…」

首を切るジェスチャーをする命人。

「さて、どうすればいいでしょ」

しばらく、柊は思索し、

「子分だけを確実に倒したほうがいいと思います」

と答えた。

「そのころは？」

「ボスが出てきて逃げ出してもゲームオーバーにはなりません」

「オーケー。いいよ。それいこう」

命人は満足そうに笑った。

「君と六甲は後方をお願い」

「いや、待ってくださいよ。一人で何十匹の『生物』と戦うつもりですか」

たった一人の人間が怪物に挑む。信じられなかった。

「そうだけど」

あっさりという命人。

「そうだけど、じゃないです！絶対死にますよ。今から戻ってでも対『生物』用の装備を持ってきます。こう見えても自分は軍人です」

「いいよ、面倒だし。君は体力無いでしょ」

本当に面倒くさそうにいい、そのあとに続いた言葉に柊は人間としての運動神経のなさを後悔した。

悔しそうに、

「…そうですね」

「安心しなよ。やばくなったら君の言ったとおり逃げるから、さ」

命人は右目を軽く閉じウィンクした。

「本当にやばくなったら六甲が助けてくれるだろうし」

会話に参加せず二人の会話を黙って聞いてた北上が軽く頷いた。
すごく不機嫌そうに見えた。

「それじゃ、二人は倉庫の屋根の上にでもいてね。それじゃ」

その声が最後まで聞こえた後強い風が吹き、また目を閉じた柊が
目を開けると、彼女との初対面のときと同じように姿はすでになか
った。

「人間ですか、隊長って」

失礼と思いながらも聞かずに入られなかった。

北上の答えは、

「違う」

短さの中にもはっきりと断言する力が感じられた。

「えっ」

「行くぞ」

柊が聞き返す間も無く、人だけ倉庫に向かって歩き始めた北上のあとを慌てて追いかけた。

『核』が反応する方向に走っていくとそこは広い空き地だった。

暗い中でも命人の視力には全く問題はなく、倉庫の壁やガラクタがはつきりと見えている。

「ふう」

柊と別れた後からずっと走っていたので一息ついた。

命人が呼吸を整えると急に強い風が吹いた。

命人はこの風を自然のものとは思わず、敵の襲来と認識した。

（昔と変わらない）

風が吹き止むとそこには五人の人影がいた。

それぞれおもいおみの格好、スーツやラフな服を身に纏っていた。

全員の共通点である金色の瞳で命人を見つめている。

「君たちのリーダーは？」

親しげに聞いた命人だが答えは返ってこない。

（やっぱだめか）

命人は思った。

（あの子のことだから、ボクが疲れたところを襲ってくるはず。だから、ここは相手の思惑通り戦ってやろう）

目を閉じ肉体を『戦闘状態』にする。

回復機能、身体機能が飛躍的に向上する代わりに三十分しか持たないが、この場での戦いには充分だった。

（いくぞ）

瞳を開けるとそこには人ではなく、巨大な蛇が五匹存在していた。

彼らの足元には服の残骸が風によって揺れている。

命人は身体能力が向上している脚で上空に飛ぶ。

闇夜の冷たい風を身体全体で感じる。

空中にいる獲物は格好の標的だ。

機械のような動きで蛇の口から何か液のようなものが飛び出した。

しかし、その空間にはもう命人の姿はなかった。

次の瞬間、真ん中にいた蛇の頭が炸裂した。

頭を構成していた様々な器官と大量の血液がコンクリートの上に撒き散らされた。

柊はあれから北上の背中を追いかけて、倉庫の上にいた。

そして、命人が戦い始めた場面にちょうど間に合ったのだ。

「なんですか、今のあれ」
柊は驚いた声で聞いた。

ここの倉庫の屋根からは戦いの状況がよく見えていた。

暗いのでよくは見えないはずだが、車の中にあつた装備のなかに暗視ゴーグルがあつたので、それを眼鏡と同じように装着してその瞬間を見ていたのだが…。

今の不可思議な出来事は理解できなかった。

「単純なことだ。空中に飛んだのは敵の配置をよく見るためと、自分自身を囷にして敵の目を引き付けるためだ」

「それはわかります。けど、なんで急に頭が炸裂したんですか」

「…『波動手砲』だ」

「はい？」

耳慣れない単語が出てきた。

「とにかく、長門はそれを使って自身の身体をあの状態から後方に移動させかつ、敵を一匹仕留めたという訳だ」

なんとなく原理は理解できた。

だが、その動きは、

「人間じゃないみたいですよ」

「何度も言わせるな。俺らは人間じゃない」

北上は「何度も言わせるな」と付け加えた。

（面倒だな）

命人は敵の液を避けながら思った。

一匹倒すことに成功した。

が、まだ、四匹いる。

さらに増える可能性もあった。

周りを見てみると液が飛び散った辺りはドロドロに溶けていた。

どうやら彼らの吐き出す液は溶解液らしい。

（六甲が倒した奴と同じタイプ…いや、これは寧ろ…）

走って避けながら自分の考えをまとめる。

（これは…もしかして）

急に動きを止める。

大蛇たちは仲間がいきなり倒されたので積極的な攻撃はせず、命人の出方を伺っていた。

その獲物である命人の右手は人のものから大きく変貌していた。

鈍く光る銀色の長い爪を持つ手に。

命人はこの状態を『爪^{エツジ}』と呼んでいる。

最も扱いやすい形態だ。

逆に言えば扱いやす過ぎて決定打にはなりにくいという形態ではあった。

この状態からさっきの『波動手砲』を放つことができるので決して弱くはなかったが。

（ちょっと、体力使うけど。あれを使うか）

そう考え、右手の状態が元の人の手に戻した。

それを絶好の機会と考えたのか、せかつちな一匹が牙で命人を串刺しにしようと動いた。

そして、牙は貫ぬく。

地面だけを。

その状態のまま、牙の主の身体と首が分離し断面部分から血が大量に噴き出した。

グラスパー
『空間支配』。

命人の持つ奥の手で本人には普通の間感だが、自分以外には姿が見えないほどの高速な動きで移動、攻撃する。

先ほど走ったときに強い風が発生したのもこの能力を使ったためだ。

（あと三匹）

そのまま『空間支配』を続行し、二匹目を倒そうと移動する。

が、いきなり爆風が起こり『空間支配』を利用して後方に退いた。

「自爆?!」

少しも考えなかった相手の思わぬ反撃に驚きを隠せずに叫んだ。

その声が相手の驚異的な聴力に聞こえたのか、こちらに二つの巨大な影が向かってきた。

「くっ」

すぐさまその場を移動する命人だが、左の腕に激痛が走り、思わず膝をついた。

左腕を見ると、溶解液が腕に付着していた。

すぐに立ち上がり、上着を脱ぐが軍服の布地は溶けて、同時に肌を溶かしていた。

脱ぐときに皮も一緒に剥がれてさらに激痛が重なる。

人肉と服の生地が一緒に焼けるいやな臭いが嗅覚を刺激した。

（向こうも『空間支配』を使ったのか）

不覚だった。

ここは柵の言葉を借りてゲームオーバーになる前に逃げたほうがいい。

そう判断した瞬間、命人の右手が急にボトリと地面に落ちた。

「がはあっあ！」

自分の声とは思えない声を出して焼けた左手で血塗れの右手を拾う。

その手を誰かの足が踏んだ。

他の二つに比べて、大した痛みではない。

問題はその足が誰の足だということだ。

「久しぶりだねえ、長門」

「こちらこそ。土佐……」

顔立ちはシャープな美女で髪は女性にしては限界までに短かった。

動きやすい作業着を着て、サングラスをかけていた。

何故かはわからないが鉄棒を持っている。

土佐と呼ばれた女性は命人の顔を思いっきり蹴り上げた。

「いい様ねえ、長門お。私のあのときの屈辱、少しは理解してくれ
たかしら」

「……反乱なんて起こさなかったら、研究所に送られることもなかつたじゃないのかい」

血だらけの右手を溶解した左手でしっかりと持ち、立ち上がりながら命人は言った。

足元には赤い池が出来ている。

血を出しすぎたのか、命人の頭はクラクラし始めた。

そもそも普通の人間ならば死んでもおかしくない出血の量だ。

「黙りなさいよ。このポンコツ生体兵器」

嘲る様に土佐が言う。

「ひどいなあ、ポンコツなんて。現役だよ、これでも」

命人は弱々しく笑った。

左手に力が入らなくなってきたのか、両足が震えだした。

その震えを必死に押さえる。

「よくこの状況で生意気な口が叩けるわねえ。ただのバカなのかしら」

土佐の後ろには巨大な蛇が二匹、黄金の瞳で命人の姿を睨みつけていた。

「どうして、早く止めを刺さないんだい」

「いわれなくても刺すわよ」

言うが早いが持っていた鉄棒を命人の腹に突き刺した。

命人は突き刺される勢いに耐え切れずに倒れこむ。

少なくなっていた血液がさらに減り、血の池がさらに広がった。

「拳銃で撃つてもすぐに治っちゃうでしょう？それだと、鉄棒を抜かない限り痛みが走り続けるからねえ。私、天才かしら」

土佐の言つとおり、命人はまともに考えることの出来ない痛みの中にいた。

何も考えることが出来ず、ただ、痛い。

全身が痛い。

足先从全身が震えだす。

声を出そうにも涙が出そうになるので何も言わず、歯を喰いしぱり続けた。

口内の奥から血が溢れ出したのを感じた。

「涙を見せたくないの？可愛いところがあるのねえ」

土佐は笑った。

嫌味を大量に含み笑った。

さすがの命人も睨み付けた。

「それじゃ、その可愛い顔も溶解液で溶かしてあげるわ」

蛇が口を大きく開ける。

溶解液が命人の顔を溶かそうとしたその時、「やめろ!」という言葉が闇の中から聞こえた。

その声に気をとられ、隙を見せた土佐と蛇の二匹の目に強烈な光が差し込んだ。

「閃光弾?!」

閃光弾特有の光と音の中、土佐は叫んだ。

「舐めるなあ!」

右腕を蛇の身体のような鞭状に変化させて、命人の身体を捕らえようとする。

しかし、その腕は目標を捕えなかった。

理由はその腕が地面に落ちたからだ。

命人と同じく血が噴き出し、足元に血の池を同じように作る。

「っ、新手かあ!」

憤怒の表情を作り、周りをぐるぐると見回す。

「目が見えてないのか、土佐」

後ろから男の声——北上の声が聞こえた。

腕は黒い両刃の剣状に変化している。

「貴様あ、六甲かあ」

「ああ、そつだよ。この蛇顔女」

「長門の…下僕があ」

腕の断面を左手で押さえながら、苦々しく土佐は吐き捨てた。

「なんとも言え。どう言ってもこの状態では負け犬の遠吠えだ。お前の可愛い下僕はすでに眠っている。永遠にな」

「殺す！」

土佐が叫び、落ちている右腕を脚で踏みつけ、

「喰らえ！」

その右腕が爆発した。

一瞬で世界が赤い霧の世界に変わり鉄の臭いがさらに強くなる。

「しまった！」

北上が滅多に出さない大声を出し、命人の方向に向かって走る。

この状況でまともな感覚を持つことの出来るのは土佐本人だけだ。

自分の血の臭いであるため、それ以外の血の臭いは命人と大蛇く

らいだろう。

蛇の血の臭いはすぐに嗅ぎ分けれるので、残るのは命人の血の臭いだけだ。

「もらったあ」

そう遠くない距離でそういう土佐の声が聞こえ、

「が、ぐっ」

という声が耳に入った。

「長門！」

北上が叫ぶ。

ここで彼女を失えば、今ここにいない戦友達に顔向けできない。

赤い霧が晴れてくる。

屋外なので空気の流れが速いのだ。

晴れた景色の真ん中に長門は倒れていた。

鉄の棒が腹に突き刺さったままの状態で。

「長門、しっかりしろ。ここで死ぬな！」

命人の身体を北上は揺さぶった。

命人の体はわずかではあるが震えていた。

震えているということは生きているということだ。

土佐の姿が無いことを確認する。

傷が予想以上に深刻だったのだろうか、逃げることを優先したよ
うだ。

北上は両刃剣の状態の腕をいつもの状態に戻した。

北上は心中で安堵したが、問題はここからだ。

「おい！木野、ここに来い！」

「は、はい」

柊の声が遠くから聞こえ、こちらに走ってくる足音が北上の耳に
聞こえてきた。

柊の姿が見えてくると怒鳴った指示する。

「長門の身体をしっかりと押さえろ」

柊は命人の悲惨な状態を見て、意識を失いかけた顔をしたが、北
上はお構いなく指示を続ける。

「俺がこいつを引っこ抜く」

北上が鉄棒を差しながら言った。

「え、け、けど大量に出血してますし、病院に…」

柊の言葉が言い終わらない内に北上は人が変わったかのように叫んだ。

「今はそんなことは関係ねえだろ！さっさと手伝えこのクソ野郎！」

「は、はい！」

皮肉なことに北上のその叫び声で動く勇気が沸いた。

「さっき言ったとおりに、身体をしっかりと押さえろ、こいつが暴れてもな」

「はい！」

命人の状態を見ると遠目から見ていたより、さらに酷かった。

左の腕は目も向けていられないほど焼け爛れており、右腕にいたっては二の腕から先は存在しなかった。

さらに、鉄棒が腹に突き刺さっている。

幸いなことは貫通していない事か。

どう考えても『人間』なら、すでにショック死か出血多量死している状態だった。

「しっかり押さえるよ」

「こ、こうですか」

実際、柊にとってこれが女性の身体に思いっきり触れる初めての機会だった。

そのせいか、力一杯触れることが出来なかった。

なんだか、申し訳ないような気がして。

「恥ずかしがるな！」

「え、いや」

「さっさとしろ！」

「わかりました！」

言われたとおり思いっきり身体を押さえ込んだ。

具体的に説明するとちょうど真ん中に鉄の棒が刺さっているため、最も押さえやすい箇所。

ようは胸と股間の部分である。

柊が申し訳なくなる気持ちは男性ならわかるだろう。

「いいか」

「はい」

もう、どうにでもなれ。

柊の心中の声だ。

鉄棒が徐々に抜け出すイヤな感覚が柊に伝わってきた。

同時に痛みを紛らわすかのように命人が激しく暴れだした。

両脚と片腕をバタつかせる。

柊はさらに強く押さえた。

手の平から伝わる感覚は無視した。

ズボツと言う音と共に液体のヌチャという音が妙に生々しく聞こえた。

無事とはいけなが、鉄棒はとりあえず抜けた。

急に疲れが押し寄せてきたような気がして、柊は腰が抜けてしまった。

北上は抜いた鉄棒を放り捨てすぐに命人の軍服をシャツごと引き裂いた。

常時なら絶対に見てはいけないものだ。

出来れば、非常時でも。

命人の下着が露わになった時点で目を閉じるべきだったが、それすらも叶わないほど体力を消耗しており…結果的に全てを見ることがなくなってしまった。

次に北上は自分の上着を脱ぎ、下に着ているシャツをさらに脱ぎそれを破った。

その様子を見て柊も服を脱ごうとするが力が上手く入らなかった。

「じつとしておけ」

柊の方を見ずに言った。

北上の声は、叫ぶ前のぶっきらぼうな口調に戻っていた。

破いたシャツを器用に命人の傷口に巻きながら、

「世話をこれ以上かけさせるな」

「すみません」

「何度も謝るな」

「はい」

柊の顔は誰から見ても虚ろな表情だった。

包帯代わりのシャツを巻き終わり、北上は自分の上着を命人の身体に着せて、いわゆる『お姫様抱っこ』という形で命人を持ち上げ

た。

残っている脚で柁の身体を蹴る。

「いくぞ」

「はい」

足元をふらつかせながら、なんとか柁は立ち上がった。

「迷惑かけて…」

「謝るなっただろうが」

北上は最後まで言わせなかった。

そのまま黙って歩く。

「今何時だ」

「えっと、十時前です」

「……基地には戻らんほうがいいな」

「あ、あの！」

どもりながら柁は口を開いた。

「どうした。急に大きな声出して」

「あいつは……なんですか」

あいつとは土佐のことだろうと認識して答える。

「…俺らの同胞だよ」

「同胞って一体何の？」

「兵器だよ。『生体兵器』だ」

十話 戦闘のち離脱（後書き）

次は早めに更新したいと思います。

十一話 真実と決意（前書き）

二日連続更新…！って溜まっていたのを一気に出してただけなんですよけどね。

十一話 真実と決意

『生体兵器』

それは約八十年前の『生物』と人との大戦で始めて実践使用された、人が開発した兵器の中でも最悪の部類に入る兵器。

それは使用すると被害が大きくなるということではなく、純粹にそれを作る過程が非人道的なものであるからだ。

『生体兵器』の材料は人間を含めた生き物であること。

そして、それが『生きている』状態のものに限るということ。

柊は北上から『生体兵器』という言葉聞いて思ったことはそんなことだった。

「『生体兵器』ですか」

北上から聞かされた言葉に柊は到底信じる事が出来なかった。

何故なら、

「だって、『生体兵器』は大戦終結後に全部、解体されたはずですよ」

その非人道的な製造法と人権の問題が戦後に問題化し、軍閥政治

から民主政治に移行していく過程で国民から『生体兵器』のこれ以上の製造を中止するよう、1987年、現段階で存在する『生体兵器』を全て解体することが決定していたのだ。

この背景には、『生体兵器』が人間同士の争いに使用され始めたことも起因している。

「何十億もつぎ込んだ計画を全部潰す馬鹿はいないだろ。裏でこっそり生かしてたんだよ。俺らみたいにな」

「そんな！」

「これが世界の真実だよ。木野柊」

北上は笑った。悲しそうに笑う。

肩に乗せられた命人の身体がわずかに震えた。

「起きたか、長門」

「ああ、すまないね、六甲」

弱々しい声が命人の身体から聞こえた。

あの怪我から息を吹き返したことから、彼女が『人』ではないということ嫌でも理解しなければならなかった。

「今、こいつに俺らの身の上を話していた所だ」

「……そう」

悲しそうに短く答えた。

「ごめんね、木野君。ボクはずっと嘘をついてたんだ。この事件が終わってからでも、君を他の隊に転属させようと思う」

もし、この台詞が今日の五時前、電話がなる前に言っていたなら柊は二つ返事で承諾しただろう。

今は違う。

「お断ります。少なくともこの事件の犯人である、あの女を捕まえるまでは、自分は隊長についていきます」

ハッキリと言い切った。

「無理するな、人間」

北上が情けを感じない口調で容赦なく切り捨てる。

「お前は普通に生きればいい。今からでも遅くはない。俺らと違ってな」

北上の言葉は文字通り、重く感じられる言葉だった。

彼は一体何年この世界を見てきたのだろう。

何人の死を見てきたのだろう。

そう感じずに入られない言葉だった。

だが、

「自分も…あなた達と一緒に戦いたいんです」

柊の言葉も北上と変わらない強さがあつた。

北上は苛立ちながらも柊を諭し続ける。

「もう充分だよ。土佐の戦いを見て、目が見えてないって気づいたお前が閃光弾を投げてくれなけりや、長門を救うことが出来なかったんだ。もうそれだけでお前は充分やった。人間のお前はな」

北上にとって、人間をここまで褒めたのは初めてだった。

言われた本人の柊も驚いるが、本人の北上も驚いている。

自分がここまで人間を褒める日が来るとは思わなかった。

最近、人と接点を持たなかったからだろうか、今日の自分はいっ
になく饒舌のような気がする。

「六甲」

北上の肩から声が聞こえた。

「喋るな。傷口が痛むぞ」

「大丈夫、それよりありがとう、助けてくれて。あの時土佐の攻撃
から庇ってくれなかったら多分、連れ去られていたよ」

「いや、俺は何もしていないが」

「そうなの？だったら」

不審に思い、柊のほうを見たが、

「自分も何もしていません」

当たり前前が返ってきた。

「…まあいいや」

命人は考えるのをやめて睡眠に入ることにした。

今は何も考えず、肉体の回復に専念しなければと考えて、

「ああ、そうそう、木野君」

言い忘れていたことを伝えた。

「はい」

「ありがとうね。君が閃光段を投げて土佐の隙を作ってくれて」

「…いいえ」

「もう一度言っよ、ありがとう」

そういつて、彼女は青い瞳を閉じて眠りに入った。

「……珍しいこともあるもんだ」

驚いた様子で北上が言った。

「どういうことですか」

意味がわからない柊は聞いた。

柊は今気づいたが、二人ともいつの間にか歩くのをやめて、その場に立ったままだった。

「こいつが二回も『ありがとう』をいうなんてと思ってな」

「そんなに珍しいことなんですか」

いまいち、ピンとこない。

「ああ、初めて聞いた」

北上は再び歩き始めた。慌ててついて行く柊。

車に着くまでは二人とも終始無言だった。

車が止まっている場所に着き、おもむろに北上は声を出した。

「北上さん」

「許す」

「えっ」

柊はもう一度、一緒に戦うことを許可してもらおうと言おうとしたのだが、先に了承の言葉が出た。

ついさっきまで絶対に許さなかったという風だったのに…この切り替えし一体なんだ。

「なんで」

「なんで、ってこいつが許可したからだよ」

「こいつ、って隊長が？いつ？」

「さっき、ありがとう、って言っただろ。こいつにとってそれは背中を預けるって意味なんだよ。一々、説明する俺の身にもなれ、馬鹿野郎が」

命人のほうを見ながら北上が解説した。

驚いた顔の柊を見ながら解説は続く。

「長門が人間に背中を預けるなんて言葉は始めて聞いた。こいつがお前を認めたんだ。間違いはないだろう。嬉しくないのか？」

「いや、嬉しいですけど…」

最後まで言わず、北上がさらに言葉を続ける。

「これからの予定を話す。もう後戻りは出来んぞ」

そう最後に脅した。目の前の人間を睨みつけながら。

「…覚悟はできています」

柊はそう返した。目の前の『生体兵器』を睨み返ししながら。

北上は後部座席に命人を丁寧に寝かせるため、車のドアを残っている片腕で器用に開けた。

命人身体を寝かせて、これからの予定を北上は言い出した。

暗いのでよく分らないが、月明かりのおかげでサングラスの向こうは命人と同じ青い瞳のようだった。

「長門が次に目を覚ますまで、俺らに出来ることは情報を集めることだ」

「情報ですか」

意外であつた。柊としては一刻も早く基地に戻るべきだと思つたのだが。

「基地にはなんで戻つてはいけないんですか。装備も充実していると思うんですが」

完全な治療もそこで出来ると思って柊は言ったが、

「馬鹿野郎」

北上の一言で沈黙した。

「そんなことすれば敵に場所を知らせることになる」

「敵って、軍内部にいるんですか」

「考えても見ろ。土佐はどこから逃げ出したと思う」

「知りませんよ、あいつのことなんか。名前だって知らなかったんですよ」

「……そついやそつだったな、すまん」

一度言葉を切り、懷からタバコを取り出した。

「吸っていいか」という動作をし、柊も頷いた。

タバコを口に含みながらライターで火を付けた。

その動きが実に様になっていた。

煙を吐き冬の風に煙は埋もれていった。

「土佐はな」

空を見上げながら北上は語りだした。

「俺ら、長門と一緒にの時期に造られた『生体兵器』なんだよ」

「一緒に時期に作られた『生体兵器』？」

「そう、かれこれもう百年ぐらい前かね。俺らが作られたのは」

タバコの煙を吐き出すために中断しながらの説明だったが、耳に心地よく響いた。これも長年生きてきたからなせる技なのか。

「『生態兵器』は生きた人間に、未知の金属、『生命金属』ライフメタルを身体の中に組み込んで完成するものだ。もちろん組み込むときは生きている状態だ。命の危険なんてものは当たり前で、肉体との拒絶反応が一番危険だな。俺らみたいに、すんなりと拒絶反応もなく完成したほうが珍しいんだからな。『兵器』になると死に難くなるし、何より年をとらない」

一度言葉を切りタバコの煙を吐く。

「本来、俺らは『生物』から人間を守るために開発されたものだ。生物は何故かはまだ研究中だ

が、『生命金属』に対してのみ、ダメージから回復しにくいということが分かっていた。だが、この金属は銃弾に加工することが難しかった。金属なのに水銀みたいに常温だと水のようになる。しかし、その特性を生かして完成したのが俺らなんだ。組み込むって事は血液に『金属』を流し込むことだ。耐え切れれば晴れて『生体兵器』の仲間入りだ」

一息入れて続ける。

「さらに『兵器』になると、色んな身体能力が人間とは段違いに上昇する。怪我が治る時間だっ

て、病気になってもすぐに治る。病原菌が身体に入っただとしても、すぐにその病原菌に対抗するワクチンが身体の中で開発される。それだけじゃない。さつき、長門と、見ていたか知らないが俺の戦いを見たとおり、肉体の一部を変形させて、戦闘を行うことも出来る。っていうか、そのための『兵器』なんだけどな。さつきの『波動手砲』は『金属』を含んだ血液を圧縮して打ち込んだやつだ。『金属』は一度身体に馴染むと、半永久的に生成され続けるからできることだな」

再び言葉を切った。そして、再開する。

「そして、この変形するときを使うのも、肉体に組み込まれた『生命金属』だ。この金属がどこにあるのか、どこで開発されたのか、今存在するのか…全て謎だ。知りたくもないがな。俺が知っているのは百年前、最初の日本製の『生体兵器』が作られたときは百人くらの孤児を研究所に連れてきて実験を行った結果、生き残ったのは十人だけだった。つまり、大和、武蔵、信濃、雲竜、雪風、筑波、鞍馬、俺、そして土佐だ」

「あの、あと一人は？」

確か十人いると言っていたはずだ。

十秒ほど経ってから北上が搾り出すようにその名前を言った。

「…陸奥だ」

そして、こう続けた。

「あいつのことは土佐並みに話したくないんだ。長門以外のやつは

基本的に嫌いなんだが…陸奥のことは話したくない。それだけだ」

北上は珍しく言葉を濁した。

次に北上は土佐のことについて話し始めた。

土佐は理由はわからないが、大戦終結直前に政治的に要職のあった人物達に対して攻撃を行った。

その責を問われ、絶対に逃げ出せない（北上曰く『監獄』）、『帝国台場研究所』から逃亡したのだという。

北上はこのこと自体がおかしいという。

「だってそうだろう」

二本目のタバコを吸いながら軽い調子で言った。

「人間に『飼われる』俺らが自力で逃げ出せるわけないって」

「そんな言い方は」

「事実そうだ。俺らは人間って生き物を基本的に嫌っているが傷つけることは出来ないんだよ。人に命令されれば別だが」

そう言われて、柎はある一つの推論が頭に浮かんだ。

「それじゃあ、土佐も」

「多分な。だが俺らはそんなことはしない。命令されても俺らには

否定することの出来る頭があるからな。だから、」

そこで煙を吐き出し続ける。

「だから、例え土佐がそういう命令を受けてそういう行動をとったとしても、それはあいつが自分の頭が悪かったって事になるんだよ。俺らから見ればね」

土佐の説明をそう締めくくった。

しばらく、無言だった二人は月をなんとなく見つめた。

特に綺麗という訳でもなかった。

むしろ、綺麗というなら海岸の向こうにあるビル群のほうが輝いて見えた。

「今日はもう寝ろ」

北上が言った。

「車の中で、ですか」

「ああ。街中をこの車で動くが目立つ。これからの詳しいことは明日起きて話そう。それまでお前は寝とけ」

「北上さんは？」

「見張りだ。十分寝れば充分だし、それはさつき済ましたからな」

病院で寝ていたことを言っているらしい。

「…本当に大丈夫なんですか」

「ああ、だからもう今日は寝ろ」

これには従う他なく助手席に座り、少々椅子を倒すことで今日のベットを完成させた。

すると、後ろで規則正しい寝息が聞こえる。

命人の。

彼女も辛いのだろうか。

弟さんが死んだといっていた。弟さんは戦争で死んだのだろうか。

それで孤児になったところを『生体兵器』にされたのだろうか。

もしそうだとすれば……。

柊は決めた。

自分の任務は自分の隊長をこれ以上誰にも傷つけさせないという

ことに。

誰に誓う訳でもなくそう決めた。

十一話 真実と決意（後書き）

明日も更新しようと思います。

十二話 それぞれの思惑（前書き）

連続更新！第一部完といった感じの話です。けどまた、更新が止まるかもしれません。

十二話 それぞれの思惑

倉庫街からそれほど遠くない場所に血の臭いを纏った人影があった。

人影の名前は『土佐』。

ついこの間まで研究所の実験体として身体を解体し続けていたが、『長門』を捕えることが出来れば、自分は自由になれるという約束の元に行動を起こし、実行に移ったが失敗した。

予想外の存在によって、絶好の機会を失ってしまったのだ。

長門は八十年前、自分のことをあっさりと捕らえたのに……何故私は上手くいかない？

失敗作。

「違う！」

いつの間にか声を出していた。

自分は失敗作じゃない。

その証拠に自分は人間の命令には忠実に従った。

今も従い続けている。

だから、自分のほうが優秀なんだ。

あいつのほうこそが失敗作なんだ！

そう考えていたが、六甲までいるとなると自分ひとりではどうにもならない。

あの男の動きは今でも現役で、八十年のブランクのある自分とは比べものならないことは明らかだった。

たとえ車の場所がわかったとしても、攻めることの出来ない理由はそれだ。

今攻めても返り討ちに遭うことは確実。

ここは、相手が隙を見せるときまでは動かないという作戦に切り替えた。

「ちつくしょう」

上手くいかない状況を呪い、左腕で倉庫の壁を殴った。

コンクリートの壁にヒビがはいる。

右腕は爆弾代わりに使ったため、完全に失っていた。

右腕の傷口は完全に塞がっていたので治癒する能力は衰えていな

いらしいが、しばらくは隻腕で行動しなければならない。

戦闘力は確実に低下する。

「あいつらめえ、ふざけやがって」

奥歯が碎ける寸前まで噛み締める。

左の拳から一滴の血が滴る。

しかし、今の彼女の怒りは長門や六甲、ましてや閃光弾を投げた人間でもなかった。

あともう少しで長門を捕らえることの出来るといときに現れた、謎の巨体。

そいつのせいでチャンスを失ってしまったのだ。

あいつは一体なんだ？

あんな奴は見たことない。

それとも長門自身だったのか？

もし、そうだとすればまんまと嵌められたって訳だ。

「ちくしょうが！」

孤独に土佐は叫んだ。

#

「——なるほど。あなたは助けが欲しい。だが、それを誰にも悟られずかつ、迅速に、という訳ですね」

電話の向こうの相手は肯定した。

「わかりました。あなたとは昔からの顔なじみですからね。承ります。ところで…」

情報屋『盤上の駒』が自分から語りかける相手は少ない。

電話の向こうの相手はその数少ない相手の一人と言うわけだ。

「今の状況は大変よくない、という訳ですね」

無言を肯定と受け取る。

「一体なにをしているんです、今あなたは」

相手は『極秘任務』と答えはそっけない。

こうなってしまうと、テコでも口を開かないので時間の無駄だ。

すぐにまとめの話に移る。

「それではいつものとおり直接、私に現金を持ってきてください。
受取人は……」

言葉が続けている最中に依頼人はこう言った。

『自分は手が離せない。』

代わりに代理を立てるからお前も代理を立ててくれないか』と。

情報屋の仕事ではないが、もう引き受けてしまっているこの状況で断ることは出来ない。

仕方なく、「わかりました」と言うことしか出来ない。

内心、してやられた、と思ったが後の祭りだ。

「では、待ち合わせ場所は——」

#

広い部屋の中、笹林中将は今の状況を憂いた。

作戦は失敗した。

絶好の機会であったはずなのに。

所詮はクズに任せたのが間違いだったようだ。

受話器をとる。

連絡する先は使えない部下だ。

「私だ、笹林だ。至急に――」

#

「わかりました。將軍。では」

竹田第六ブロック四番隊隊長は受話器を置き、部下に命令する。

「それでは大尉。先ほどの將軍の指示通り、行動に移ってくれ」

「わかりました。隊長」

暗い車内の中、二人の軍人の会話が終わる。

#

夜は更けて、日が昇り、新たな日を刻む。

そして、

睦月最後の日の幕が上がる。

十二話 それぞれの思惑（後書き）

感想、評価がほしい今日この頃です。

十三話 朝（前書き）

再び間をおいてすみません。実生活も一段落つき、小説の執筆スピードも限界まで早めていこうと思います。

十三話 朝

西暦2025年1月31日、午前五時。

柊が起きて最初に嗅いだのは鉄の臭いだった。

その強烈な生の臭いのおかげで一瞬で目が覚める。

目を開けると明るくなった空の様子だった。

窓を叩く音が聞こえる。

「起きたか」

窓を開けると、北上将がそこにいた。

「近くにシャワーを見つけた。冷たいだろうが、せめてその身体中に付いた血の臭いを落とせ」

昨日、寝る前の惨事を思い出し、後部座席にいる人物を確認した。

森山命人はまだ眠っている。

女性の寝顔を見るのは妹を除けば初めてだったが、このような形では見たくなかったと柊は思った。

左腕の焼け爛れた部分は幾分かマシになったようで、切断された右腕もどうやら本人が寝ている間に北上が無理やり縫合し接合しかけていた。

「マシになつたろう」

北上が後ろから声をかけた。

「はい」

「ついでにバイクも見つけた。それでワイシャツでもなんでもいい。服を買って来い」

「けど、橋を渡らなくちゃ…」

台場との間には陸と唯一繋がっている『台場大橋』がある。

ここを通らないと帝都のどこにも行くことが出来ない。

「お前、周りをしっかり見ろ」

「えっ」

そう言われて見てみると海を挟んだはるか向こうに自分達がいるはずの台場が見えた。

そして、今自分たちがいる場所は帝都海岸の倉庫街だった。

近年、再開発が始まっているらしく水道や電気が通るようになってきたと、以前ニュースで紹介していたことを思い出す。

「えっ。な、なんで」

柊は驚いて上手く声が出ず、どもりながら聞いた。

「簡単なことだ。俺が運んだ」

北上が別になんでもない風にあっさりと言った。

「運んだってどうやって」

「…冗談だ。本当は知り合いに頼んで一時的に橋の警備を緩めてもらった。その間に通ったんだ」

「いや、それでも凄いですよ。その知り合いの人って誰なんですか」

台場大橋の警備は台場が自体が軍の監視下にあるため、非常に厳しい。

マスコミなどは台場の維持費などが多額であることを揶揄し、「海に浮かぶ皿」と呼んでいる。

「後で話す。まず、その倉庫のシャワーで身体を洗ってからバイクに乗って服と朝飯を買って来い。金は渡す」

比較的綺麗な倉庫の中はそこらのアパートよりも広く、整備されていた。

北上曰く、この場所もある人物に紹介された場所の一つらしい。

シャワーの冷たい水を身体全体に浴びた後、身体を拭きながら柊

は昨日の夕方からの休む間もなかったこの事件を頭の中で整理した。

（まず、椿が大蛇の『生物』に襲われた。

その『生物』が土佐の仲間だったんだろっな。

だが、なんで街中で暴れたんだ？

……簡単じゃないか。

零番隊を動かすためだ。

動かして、理由はわからないが隊長を捕まえるためだ。

捕らえる理由は……今はわからない。

逆に捕まえた後でゆっくり聞けばいい。

となるとこの事件は計画的なものになる。

それじゃあ、土佐を逃がしたのは奴を管理し、零番隊に依頼した
笹林中将になる。

けれど、大元帥に知られたら……いや、その問題はいらない。

大元帥はしばらく検査入院と言っていた。

その間に事を済ませる気だったんだ。

しかし、なんで中将はこんな危険なことを？

……それこそ直接聞かなければ)

そこまで考えて、柊は自分が昨日までの自分は地位にこだわっていたこと思い出した。

くだらないことだ。

今にして思えば平和なほうが良いに決まっているじゃないか。

あの部屋でゲームのレベル上げをしているほうがどんなよかったか。

こんな引くことが出来ない状況になってようやく理解できた自分を激しく罵った。

北上が「俺の予備の服」と言って渡してくれた服を着て、車が停車している場所に向かうと、朝の空気の代わりにタバコの空気を吸っている北上がいた。

北上は空を見上げながら「血の臭いはしてないよな」と、聞かれた。

「大丈夫です」

こんな状況だ。

せめて元気よくと思い大きめの声で答えた。

その声の大きさが北上にはうるさかったのか、顔をしかめた。

しかし、北上は別にそんなことを怒る風でもなく言う。

「とりあえずこれを食べ」

手渡されたのは色が黒く固いチョコレートだった。

「糖分は大切だ。頭の働き、体力も保てる。虫歯になりやすいことを除けば最高の食品だ」

「はあ」

そんなことしか言えなかったが、とりあえず受け取っておくことにした。

本当の朝飯は服のついでに買って来るのだから。

「あと、これも」

チョコレートと一緒にバイクの鍵も渡された。

「エンジンとか大丈夫だったんですか」

よくよく思えば、そこら辺から拾ってきたバイクだ。危険はないのだろうか。

答えは、

「車から燃料を貰ったから安心しろ。見つけたと言っても、『奴』から貸してもらった物だ」

「……それって本当に大丈夫なんですか」

見ず知らずの人物から貸してもらった物に乗ることは、北上が安心だといっても不安を覚えずにいけない。

「信じる」

有無を言わさぬ、北上の言葉。

反抗する隙もないその言葉に、

「…わかりました」

と柊は答えるしかなかった。

しかし、せめて一つだけ聞きたいことがあった。

「試運転とかしてるんですか」

「していない」

北上即答。

「……」

「多分大丈夫だ」

『多分大丈夫』なバイクは普通の原付だった。

傷も汚れもなく新品同然のように見えた。

見た目はとりあえず問題は無さそうだったので一応、安心して服を買いに行くことができる。

「今は午前六時前だ。八時までには戻って来い。八時半から移動だからな。まっすぐ行けば道路に出る」

北上はそう言う新しいタバコを懷から取り出し吹かし始めた。

柊もこれ以上北上と会話しても意味はないと判断して、バイクに鍵を挿し、うるさいエンジン音を出しながら道路に出て行った。

「行つたぞ」

そう言うつと、後部座席で寝ていた命人は腹筋だけを動かして北上と視線を合わせた。互

いに同じ青い色の瞳に互いの顔が映る。二人とも疲れた顔をしていた。

疲れた顔の少女の口が動いく。

「お腹減った」

「今買いに行かせた。もう少し待て」

「さっき、チョコレートをあげたじゃないか、あれは？」

実のところ、すでに起きていた命人はそう尋ねた。

尋ねられた北上は困った顔をしながらこう言った。

「あれで最後だ……そんな泣きそうな顔をするな」

「だって」

「だってじゃない。それより、傷は」

切断された右腕は、北上が無理矢理縫合（糸と針を使って縫った）している。

溶解液で焼け爛れた左腕は、後は残っていたがもう痛みはなかった。

肌の色も黒っぽい色から薄くなってきており、今はほとんど肌色になっていた。

腹の傷も表面上は治っていた。

中身はまだ治癒が完全に終わっていないため、痛みはしたが動かなければ問題なかった。

「だいぶ治ったよ。右手はまだ感覚ないけど」

縫合されている部分を見ながら悲しそうに言った。

「今日の夜になる頃には感覚も戻るだろう」

北上は励ますように言った。

「そうだといいいけどね」

命人はやや不安そうに答えた。

「今は休め。中身が治らないと飯も食えないぞ」

「それじゃ、見張りよろしく」

そういつて彼女は再び寝入った、ように見えたが再び起き上がった。

「……一つ忘れてた」

「なんだ」

余りにも深刻な口調だったので、北上も思わず真剣な口調で聞いた。

「ゲームの充電」

呆れたないように北上は頭を痛めながら、

「……また今度にしろ」

律儀に答えた。

十四話 切れた糸

西暦2025年1月31日、午前六時前。

帝都は日本の中心である。それ故、ここで揃わないものは無いとまで言われている。

柊もこのときはそんな帝都に感謝した。

早朝から開店していた全国チェーン店でワイシャツと朝食を買い、柊はレジに向かおうとした。

この様子だと約束の時間、八時までには充分間に合うはずだ。

そのとき、この時間には似つかわしくない人影を見た。

小学生か下手をすればもっと下の少女が買い物をしていたのだ。腕に持っている籠が床を引きずっている。

（子供がこんな時間になんで？）

柊はなんとなく心配になり憲兵の気持ちで、レジの列から抜け、少女の背中に声をかけた。

「君、こんな時間になんでこんな所にいるんだ」

できるだけ優しい口調で言っただけだが、目の前の少女は驚いたように背中を震わせ、柊のほうをゆっくりとした動きで振り返った。

少女の顔は子供らしく、大きな瞳だったが前髪が長く片目しか見えない。

一瞬虐待とも考えたが、服は清潔そうなのでその可能性は低いと考えた。

もちろんその可能性を捨てたわけではないが。

それに最近は何にかと誘拐事件が多いため、怯えた反応は仕方ないかもしれない。

「すまない。自分は」

そこまで言い、今はできるだけ身分を隠して行動しなければならぬということを出した。

いつ、どこで笹林中将の情報網に引っかかるかもしれない。

とつさに思いついた偽名と言いついでこの場をしのぐことにした。

「：自分は森北冬木という、今は職務外中の憲兵なんだが。ご両親に頼まれたのかな。それとも」

「あの、」

柊の言葉を遮り、少女がおずおずといった感じで子供らしい高い声で言った。

「私、成人です」

「えっ」

「すみません。そうとは気づかないで。失礼なことをしました。和歌さん」

「いえ、慣れてますから。気にしないでください」

買い物済ませた後、お詫びとして、柊は店から近くの喫茶店でコーヒーを奢ることにした。

時間は充分あったし、あらかじめ一時間前を知らせる携帯のアラームも準備していた。

一時間もあれば、倉庫街に戻る時間は充分あった。

その後、少女は身分証明書を見せて成人であることを明らかにした。

一方的に勘違いしたのは柊だったが彼女自身、間違われることはもはや日課だからと、気にした様子ではなかった。

それでもやはり悪いことをしたと、せめてコーヒー一杯でもという流れで今の状況に至る。

柊自身、命人たちの元に一刻も早く戻らないといけなかったが、あのままこの女性と別れてしまうと個人的に後味が悪いと感じてい

た。

どうやら向こうも同じ気持ちらしく、こちらの無理な誘いを了承してくれた。

小間空和歌と名乗った少女（に見える女性）は柊に聞いた。

「森北さんはなんでこんな朝に早く？」

「自分は…今日大切な仕事があるので新しいワイシャツを買おうと思ひまして。けど、昨日は帰ってくるのが遅くて、買えなかったのです」

我ながら無理のある嘘だ。そう思ったが過ぎたこと。幸い、おかしいと思われた様子もなく会話は続く。

「ところで、そちらは？」

「私ですか」

片方の瞳の色が困ったように見えた。もちろん、もう片方の瞳は見えなかったが。

「一緒に住んでいる人がコーヒーがないと生きていけない、インスタントでも何でもいいから買ってきてくれ、って言われて」

「自分で買いに行ったらいいじゃないですか」

女性を朝からパシリ扱いするとは人間性を疑いたくなる。今の自分の立場もよく考えれば同じようなものだが、それとこれとは別だ。

「でも、いい人ですよ。とっても」

和歌は可愛らしく笑いながら言った。

ちょうど、コーヒーが運ばれてテーブルに置かれる。

柊はそのまま飲まず、少し砂糖を加えた。昔から、少量の砂糖が入っていないとコーヒーは飲めないからだ。

一方の和歌はそのまま一口飲んだ。

子供がコーヒーをそのまま飲むことは厳しいと思うので、やはりこの女性は大人なんだな、と変なところで納得した。

「コーヒーには何も入れないんですか」

「はい。一緒に住んでいる人が『コーヒーは何も入れないからコーヒーなんだ』とか言って、その影響で」

「自分は砂糖を入れないと飲めないんですけどね」

「私は入れるとすれば牛乳を少し入れますよ」

二人ともそれから一言も喋らず、黙々とコーヒーを飲んだ。

本来なら気まずい空気になるところだが、不思議とそうはならなかった。

これは柊が思ったことなので、和歌のほうもそう思っているとは

限らないが。

コーヒーを飲み終わり勘定を払うときになった。

最初、柊が全額払おうとしたがそれでは悪いと和歌が言って割り勘になった。

別れ際、店を出てすぐに和歌が言った。

「また、会えるといいですね」

「そうですね」

柊がそう答え別れた。

そんな二人はこの日に再会することになる。

「買ってきましたよ、先生」

「ありがとう。そろそろ、禁断症状が始まりかけていたところだよ。ずいぶん遅かったけど、何かあったのかい」

「いい人と会って、一緒にコーヒーを飲みました」

「いい人と一緒にコーヒーを飲んだ？」

「ええ、森北冬木さんという方と。憲兵さんらしいです」

「……へえ」

「どうしたんですか」

「いや、なんともわかりやすい…いやなんでもない。これを一杯飲んだら、仕事に戻るよ」

「わかりました、先生」

和歌はその部屋のドアを閉めて出て行った。

機械音が低く唸る部屋にはパソコンが十台も置いてあった。

その全てが起動している。

そんな異様といえる空間の中心に一人の男が椅子に座り、買ってきてもらったばかりのインスタントコーヒーを飲みながら呟く。

「こういう偶然があるから、この仕事はやめられない」

和歌から先生と呼ばれていた『盤上の駒』はそう呟きながら声を出さずに笑った。

西暦2025年1月31日、午前七時五五分。

急げば充分、八時までには待ち合わせの場所に着く時間だった。

それでも柊は急いでバイクのエンジンをふかした。

移動するのはできるだけ早い時間がいいに決まっている。

いつ、どこで笹林中将の情報網に引っかかるとも考えられるからだ。

だから、今の状況もある意味予想していた。

つけられている――。

和歌と別れた後、十分ほどして後ろの黒い車がいつまでもついてきていた。

試しに道路から少し外れてもついてきたことからみて、十中八九、自分を――正確には到着した先にいる命人たちが目的なのだろう。

それならば、できるだけ約束の時間の八時を過ぎるまでは倉庫から離れた方が、少なくとも命人たちは安全であるはずだ。

八時を過ぎれば彼女達は自分も知らない場所に移動するのだから。時間稼ぎなどは軍事訓練でもしたことがなかったが、今はやるし

かなかった。

後ろの連中の勘が優秀でないことを祈りながら、記憶の地図を広げ時間が早く過ぎるのを待った。

西暦2025年1月31日、午前八時前。

北上は運転席に座りながら、車の時計をチラッと見た。

そろそろ移動を始めなければならない時間。

しかし、いつまで待っても来るべきはずの人間は来ない。

「どこで油を売っているんだ」

自然とイライラとした口調になってしまふ。

後部座席で身体を横にしている命人が声をかけた。

「まだ来ないのかい」

「ああ。何かあったのかも知れんな」

イラついた口調で答える北上はガムを噛んでいた。

イラついている原因はタバコがなくなったからかもしれない。

そんな北上の様子を見ながら、命人は聞いた。

「移動、するの」

「当たり前だ。何かあったのだとしたら、それこそ俺たちは安全な場所に移らなくちゃいけない」

「彼を見捨てて？」

「……」

命人の言葉には別に北上を責める色は含まれていない。

しかし、北上は自分が責められている感じがした。

「ボクたちって何のために生まれてきたんだっけ。六甲」

「……」

命人は言葉を続ける。

「人を……人を救うために生まれてきたんだよね。なのに今のボクたちは自分の身を守るように生きている」

「……だから？」

北上、六甲の口調は先ほどまでとは別のイラツきの声になっていた。

「ボクは自分の心、感情を優先して今動きたい。彼の身に何かが起

こっているのなら私は彼を救うために動きたい」

「ふざけるな」

北上は即答した。

強い何かの感情を押さえつけるかのように唸る声だった。

しかし、それにも構わず命人は続けた。

「ボクはもうあのときのような真似はしたくない。この数十年ずっと逃げてきた。戦うとあのことを思い出すから。だけど、あの時のように誰かを見捨てる事で得られる平穏なんて、結局、偽りなんだ。だから、ボクは自分のために動いてくれる人を絶対に見捨てない」

言うが早いが命人は車のドアを開けて飛び出していった。

まだ、多少ぎこちなかったがそれでも動くことには問題はなさそうに見える。

北上はそんな命人の様子を追わずに、ただ見ていた。

止めても無駄だとわかっていたから。

自分に出来ることは後ろに控えて、いざというときに助けるだけで充分だとわかっていたからだ。

十五話 生殺し

西暦2025年1月31日、午前八時十五分

軍直轄のビルの一室

「よし、そいつはそのままつける。ついでにあそこも押さえておけ。上手くいけば長門も押さえる事が出来るかもしれない。そのときはつけている奴を事故に見せかけて殺せ…安心しろすぐに釈放できるよ。うに取り計らう…わかったな」

この任務が始まり、初めて喜んだ口調で話す竹田の顔は文字通りの『歓喜』がにじみ出ていた。

懷から葉巻を取り出し一服する。

軍人らしからぬ太った体型を一杯に膨らませ、口から濃い煙をはき出した。

そして、歓喜の笑みを再び浮かべ、部下の方に椅子ごと顔を向ける。

「見たかね、大尉。すべて順調だよ。私もこれで中將に処罰されんで済む」

「よかったです。お役に立てて」

大尉が恭しく頭を下げると竹田の顔は途端に不機嫌な類のものに変わった。

「お役に立てて？何を言っているのかね、君は。この計画はすべて私が立てたものだ。褒められる覚えはあっても、褒める覚えはないね。特に君のように年下で階級もしたの人間とは」

最後のほうは怒鳴りつけるような声になり「出て行け」と言っただけでその声は続いた。

大尉は出て行くとき下を俯いたまま、無表情のまま出て行った。

その大尉の後姿を見てフンツと鼻を鳴らした。

もしも、この計画がすべて上手くいったときには、自分ではなく大尉の方を笹林は重用するだろう。

そうならば今まで築いてきた地位は、脆くも崩れ去ることになる。

そんなことにしてなるものか。

この地位は私だけのものだ。

それに、この計画が失敗した場合は全ての責任をあの大尉に取らせればいい。

そうすれば自分の地位は傷つかない。

この愚かな男は自分も連帯責任を取らされることには知恵が回らないらしい。

そんなことを考えていた時、部屋に電話の音が鳴り響いた。竹田はすぐに手に取る。

「誰だ」

「私だ」

笹林中将その人だった。

竹田は慌てて取り繕う。

「中将でしたか。申し訳ございま…」

「御託はいい。状況はどうなっている」

笹林の声は不機嫌ではなかったが、それで重苦しかった。

竹田も機嫌を損ねないよう、慎重に答える。

「はっ。すべて予定通りに動いております」

その答えを聞き、笹林は一言「そうか」と呟く。

それを聞き、安心したのかやや重苦しい口調ではなくなった。

それでも計画の内容の進み具合を伝えておく。

「あの場所の確保は出来た。あとはあの役立たずを待機させておけ」

「しかし、中将。あんなもの、本当に役に立つのでしょうか。私にはとても」

竹田は不安だった。

あんな不安定な兵器に頼ることなく長門を捕らえる方法はいくらでもあるはずだ。

それなのにあんな役立たずを使おうとする笹林の考えが読めなかったのだ。

しかし、笹林は一言、容赦なく一喝した。

「自分で考える脳のない奴は黙っておけ」

「……」

言葉に詰まった竹田だったが、笹林は気にする風もなく続けた。

「とにかく、お前は私のいうとおりに動けばよいのだ。無駄な口をこれ以上挟むな」

「わかりました」

そうして、笹林からの電話は切れた。

西暦2025年1月31日、午前八時半
帝都第六病院 病室

椿は朝起きてからずっと考えていた。

昨日の兄との喧嘩は、どこで、どちらが引くべきだったのか、

と。

兄の顔を前にすれば、間違いなく兄に決まっていると憎まれ口を叩くが、いざ一人で考えてみると、やはり自分があの時言い過ぎたことは間違いなかった。

自分がイヤな事は相手にもやるな、と昔学校の先生に言われたことを思い出し、次に兄と会ったときは謝ろうと決めた。

しかし、それでも少しは『本当』に怒って欲しかった。

昨日の喧嘩のような怒り方ではなく、『本当』の怒りの感情を見せた事がないのだ。

昨日の喧嘩もどこか『型』があるような違和感を感じたのだ。

まるで機械や決まり事のような受け応えだったなような感じがした。

本気で怒らないのは自分に対する優しさか。

しかし、優しいからこそ、愛しているからこそ本気で怒って欲しいと考えるのは我侭なのだろうか。

突然、ドアをノックする音が鳴った。

慌てて今の考えを打ち消し、普段どおりに振舞うと心を落ち着かせた後に「どうぞ」と答えた。

「失礼します」

入ってきたのは影村藍だった。

「影村君。どうしたの」

「昨日の今日だから。大丈夫かなと思って」

そうだった。

自分がこの病院で一夜を過ごすことになった原因の事件。

化け物の暴走事件に巻き込まれたせいで、ここにいるのだ。

「大丈夫ですか、椿さん」

「えっ？あ、ああ大丈夫。ちょっと、思い出してただけ……」

軽い頭痛がした。

昨日の出来事は余りはつきりと覚えていないが、ひどく嫌なものばかりを見たような気がする。

思い出そうとすればするほど頭痛がひどくなりそうだったので、
—その時思考を停止した。

「本当に大丈夫ですか。顔が凄く青いですけど」

「ホント、大丈夫だって。んで、今日はなんでまた病院に来てるの？」

今日は平日のはずだ。学校を休んできたのだろうか。

もしかすると、向こうも私のことを…と考えてしまうが。

そう考えると心臓の音が耳の奥で激しくなり始めた、ような気がした。

「自分も病院に泊まったからですよ。昨日の『生物』は病原菌を持つていなかったとしても、検査とかなくちゃいけないって」

「…まあ、そんな事だろうと思ったわ」

そういわれて、昨日、あの男…北上にいわれた言葉を思い出した。

どうやら、相当疲れているらしい。

「何の事ですか？」

「気にしないで。こつちの話」

不思議がる藍の顔を見ながら椿は一つため息をした。心臓の音も急に静まったようだ。気を取り直して椿は藍にこれからの予定を聞いた。

「それじゃあ、今日はもう帰るの？」

「いえ、とりあえず昼までは一緒にいようと思います」

「えっ」

静まっただけの心臓の鼓動が再び、耳の奥で激しく鳴りは始めた。

「だって、きつと暇でしょう。話す人もいないと。いつも、木野さんはたくさんの人と休み時間喋っているし。自分なんかでよかったら、と思って」

「…そうよね。うん、たしかに暇」

そういつて笑ったが、心臓の鼓動は先ほどのように簡単に静まらなかった。

これらの音の原因は目の前の少年に決まっていることは明白である。

椿自身にも自覚はあったが、どう対処すればいいか、皆目見当がつかなかった。

「やっぱり迷惑ですか」

「ないない、そんなことない。ある訳ないじゃん」

その後でははは、と乾いた笑い声を付け加える。

藍もそれを聞いて安心したのか笑みを浮かべた。

「それじゃ、下に行きましようか。下には売店とかもありますし」

帝都第六病院は政府直属の病院であるため、訪れる人の数はそこらの病院の倍である。

その分病院の広さも倍である。

しかも、広さだけではなく、こういった病院の利点は施設がかなり整っている点が挙げられる。

政府直属であるためか、売店の商品はかなり割高感があったが。

入院している自分が思うのもなんだがこの病院の印象は『全てが倍』だと、椿は思った。

「なんか買ってきますね」

藍がそう言った。

「けど、高いよここの売店。ちらっと見たただけけど。外のコンビニとかで買ってきたほうが安くていいと思うけど」

「どこにコンビニがあるかわからないし、待たせるわけにもいかないから別にいいですよ」

「そ、そう、ありがと」

ぶっきらぼうな答え方をしたのが心臓の音の大きさが先ほどの比ではなく、さらに激しくなっていく。

女の子の為に男の子が動くんなんてことはまさしく恋人のような関係ではないか。

しかも、相手は思い人だ。

嫌なわけではない。

それは自分が望んだものではないのだろうか。

そんなことを考えている間に藍が戻ってきた。両手にはペットボトルが握られていた。

「ごめんなさい。待ちましたか」

「う、ううん、全然」

むしろ早かったような気もするが。

「どっちがいいですか。ウーロン茶と緑茶」

少々ずっこけた、心の中で。

ロマンティックなものを選ばない辺り、彼らしいといえなさそうなるが。

「え、それじゃ、ウーロン茶で」

椿はウーロン茶を受け取り、普通にボトルを開け一口飲んだ。

藍も椿の横に座り、それにならう。

まだ、本格的に病院は開いていないので今、フロアにいるのは暇をもてあます入院患者と忙しく準備する看護師と医者だけだった。

「なんだか」

不意に藍が口を開いて語りだした。

「変な意味で受け取らないで欲しいんですけど…なんだか、デートしてるみたいですね」

椿の心臓の音がこれまでの人生の中で最大の音量を発した、ような気がした。

「え、あ、ああ、そ、そうかもね」

適当に相槌をする。そして、その場の勢いで以前から聞きたかったことを聞いてみた。

「あ、あのさ影村君は好きなのか、いるの？」

その質問に藍は驚いた顔を椿の方に向けた。

「自分は――」

藍の口が質問に答えようとした時、

「すみませんが、」

横から声が割って入った。

二人がそちらの方を向くと病院用の服を着た、白髪の男性が立っていた。

「横、よろしいですか」

一瞬、ポカンとした顔の二人だったが、二人ともほぼ同時に了承する。

椿は完全に藍の答えを聞き逃した形になった。

悔しいなんてものじゃなかった。

この老人に対して恨みを抱いてしまいかねなかった。

「すみませんね。最近、静かになれる時間がなかったものですから」

「別に、構いませんよ」

椿が作り笑顔で応対する。

逆に藍の顔は無表情になっていた。

「忙しくてね。一人で考える時間もなかったのですよ。ですけれど、ようやく、向こうも動き出しそうです」

やや意味不明の会話だ。

言葉は悪いがこの老人は呆けているのではないだろうか。

「ただ、一人が仕事中に忙しさの余り、連絡が取れなくなり、目標も勝手に動いてしまい…どうなることやら」

「そうですか」

次は藍が答えた。

椿の方は我慢ならなかった。

藍との二人きりの会話を邪魔され、その上要領を得ない話を聞かされる。

最悪だ。

椿がそういった無礼を老人に対して言おうとした時、「あ、いたいた」と男の声が後ろから聞こえてきた。

振り向くと、赤ら顔の白衣を着た医者がこちらに向かって走ってきていた。

「どこにいたんですか。探したんですよ」

「ああ、風に誘われてな」

「風がじゃありません。すみませんね。この人ちょっと、病気なんです」

医者が頭を下げ、戻っていった。

呆けていると思われる患者と一緒に。

椿はその怒りをどこに向けていいのかわからず、とりあえずため息で仮発散した。

先ほどの答えを再び聞こうとして、口を開いたが藍の「ところで」という言葉で止まる。

「今何時でしたっけ」

「…九時前だけど」

「そうですか」

そついつと素早く立ち上がった。

「ど、どうしたの」

驚いた顔をする椿の顔に向かって、藍は早口で言う。

「すみません。木野さん。ちょっと、予定を思い出したんでこれで」

「え、けど、影野くん。入院中なんじゃ」

最後まで言い終わらないうちに藍の姿は見えなくなっていた。

十六話 不審

西暦2025年1月31日午前九時十分

帝都のある道路

二時間近く後ろの車に追いかけている柊の精神は限界だった。

ヘルメットの下の額には、汗がすでに無数に浮かんでいる。

向こうもそろそろ不審に思ってもいい頃だが、機械のように追い掛け回すだけだ。

逆に柊のほうの不審に思うくらいに。

しかし、おそらく命人たちは無事、別の場所に移ることが出来ただろう。

たとえ、今自分が捕まったとしても絶対に彼女たちの居場所がわかることはない。

問題はこの追いかけてこがいつまで続くかだ。

精神と共に体力も限界に近かった。

休まず走り続けるせいでもある。

このままだといずれ限界を超えて、本当に倒れてしまうだろう。

それならば――。

柊はイチかバチの賭けにでた。

クラクラする頭を必死に活性化させて、帝都内の地図を頭の中に広げる。

西暦2025年1月31日午前九時十五分

倉庫街

北上は空を見上げていた。

別に何を思うでもなく、彼が時々する行動だ。

もっぱら、タバコやガムがなくなってしまった場合の行動ともいえるが。

彼は思考する。

誰もが正しいのだ。自分が正しいと思えるからこそ行動を実行に移せる。

問題は否定するか受け入れるか。

あいつは俺を否定して自分の感情に身を任せて行動に移した。

それは俺から見れば正しくないことだが、あいつにとって見れば

正しいことなのだ。

わかっている。

だが、どう考えても自分のこの何ともしがたいこの感情に、答えが出ることはないような気がした。

そういった鬱屈した気持ちをどこにもぶつけることが出来ない時に、胸の携帯が振動した。

携帯の液晶画面を見ると昨日の夜中…今日の早朝か？…に電話をかけた相手だった。

「なんだ」

「不機嫌な声ですね。振られたんですか？」

「どうでもいいだろ、そんなことは」

「確かにそうですね。それじゃあ、用件をさっさと言うことにしましょう」

「ああ、そうしてくれ」

「彼の今いる場所がわかった」

「…そうか」

「彼、追われてたんですよ。朝の七時くらいからですかね」

「……」

「君たちに危害が及ばないように自分の身を固にしたらいいですね」

「……」

「今から場所を言うから、頭に入れてくださいね」

「助けに行くとはいってないぞ」

「別に助けに行く行かないかは自由ですよ。この情報をどう扱うかはあなたが決めてください。今回はサービスですから値段は気にならずに。それに頼まれたことは絶対にこちらは守りますので、なくなると困るのは私の方ですので」

「……」

「場所ですね、——」

「これでもう少し、面白くなるはずだ」

受話器を置いた。盤上の駒は薄く笑い、コーヒーを一口飲んだ。

「あの、先生。私たちはどうしたら……」

不安そうな声で聞く和歌に情報屋は笑顔で答える。

「和歌。君もそろそろ、金の準備をしてくれ」

「あの仕事、行つことが出来るんですか」

「出来るように私が動かした。絶対とは言い切れないがね。これで昨日、もう今日かな。行つた準備は無駄ではなくなるよ」

西暦2025年1月31日午前九時二十五分

命人は走っていた。

といつても彼女の全力には程遠く、半分の速度も出ていなかった。

人が多い場所は出来るだけ避け、横道や寂れた住宅街の道など人が少ない場所を使って移動していた。

一人の人間、自分の大切な部下であり、友人を探していた。

別に当てがある訳でもなかった。

北上の言葉が正しいことはわかっている。

それでも、自分は動かずにいらなかったのだ。

この一年間は、自分にとって別に劇的な変化があった訳でもない。

しかし、彼との出会いがあった。

初めて会話した時、酔っているとはいえ面白そうなことを言う男

だと、そんな理由で彼を自分の手元に置いた。

我俣にも程がある、と自分でも自覚して笑ってしまুকらいだ。

結果的に一人の人間の人生を、自覚を持って狂わせてしまったのだから。

今感じる昨日の戦闘による肉体の痛みと彼を巻き込んだという、後悔の心の痛みは当然の天罰だ。

彼がもし、自分の我俣で零番隊に入れさせなければ、少なくとも彼はこの事件に巻き込まれたはずはないのだ。

平和な日常が送れていたはずだ。

走りながら、後悔が次々と襲う。

体の奥からも心の奥からも痛みが襲う。

走りながらここしばらく、流さなかった物が瞳から落ちたような気がした。

それをあえて確認しようとは思わない。

そんなことを確認するよりも彼を見つけて、救い出したい。

命人がそう考えていた時だった。

胸に熱い『何か』を感じた。

たとえばではなく、実際に熱さを感じる。

そして、数秒後それが何を意味するのかを理解して——命人はその方向に向かって走り出した。

西暦2025年1月31日午前九時三十分
ある廃工場の中

柊の地図と過去の情報が正しければ、この工場は数年前に活動を停止していた。

実際そうだったし、情報は間違っていなかった。

だが、これはさすがに予想外だった。

まさか、敵の『生物』たちのアジトだったとは。

一瞬にしてバイクを破壊され、その爆発を受けなかったのはよかったが、逃げる手段を失ってしまったことになる。

冗談でも現実でも笑うことの出来ない話だ。

今、柊は普通に立っているだけ。

しかも、背中を伝う冷や汗の量は半端じゃなかった。

原因は柊に注がれる視線だ。

工場の天井や機材の裏から注がれる視線は全て、金色の瞳を持つ

た人間からであった。

周りに見える影は人だが、中身は確実に人外のものだ。柊に注がれる異常な金色の瞳でわかった。

今の柊はおとなしくするしか寿命を延ばす方法はない。

ロープで締められたりしている訳ではないが、周りの空気が殺気で充満している。

もし、不審な動きをすれば即、死を意味するだろう。

.....。

無言の空間の中、柊の精神はこの時点でかなり削られていた。

一口におとなしくするといっても、体を動かさないということは体力を動かす以上に消費する。

動けるかもしれないが、もし彼らの殺意に火がつけば、ここに一人の死体が出来上がるだろう。

そこまで考えた時、体が揺れた。

精神の限界よりも先に肉体の限界がきたのだ。

一瞬周りの空気が動き、心の中で覚悟した。何も起きなかった。

ここまできて、柊は何故、『生物』たちは攻撃してこないのかと考えた。

アジトを知られたのなら消せばいい。

それくらい簡単なことのはずだ。

それをしないという事は誰かから何らかの命令を受けているという事なのだろうか。

例えばあの土佐とかいう、生体兵器に――。

そこまで考えた時に、工場の奥から足音が聞こえ始めた。

コツ、コツと規則正しい音が徐々に柵のいる場所まで近づいてきていた。

十六話 不審（後書き）

・二ヶ月、更新を停止していたのでこの数日は連続更新と称し、執筆スピードを限界まで早めました…。正直、やばいですね。やっぱり人間、七時間は寝なくちゃ、体が持たないです。一応、まだ学生ですのでこの辺りでちょっと小休止しようと思います。一ヶ月とかではなく二、三日休むだけです。またすぐに戻ってきます。

・お詫びというかなんとというか、ここで、僕が思っている登場人物の声優のイメージは誰なのかを発表したいと思います。

・「声？誰でもいいだろうがっ」とか、「正直、声優とか興味ナッシング!」、「このキャラはこの人の声で読んでもの!」な人はすぐに戻ってください。あくまで『作者』のイメージですから。

・それではいきますね。

・まず、主人公の命人の声は能登麻美子さんです。女性の声優の中では一、二を争うくらい好きな方です。最近によく主人公を演じられているので、その辺りも嬉しいところですね。『地獄少女』はもうはまり役過ぎて怖いですよ（作品も演技も）。

・もう一人の主人公、柊は杉田智和さんです。『ハチミツとクロバー』の真山先輩の頃から、好きな声優さんですね。もう、本当にかっこいい声で『銀魂』を初めて見た時は「先輩じゃないかのか？」と一瞬、耳を疑いました。もちろん、『銀魂』も見れる時は欠かさず見えます。

・次に個人的に一番好きなおっさん、北上は藤原啓治さんです。問答無用で男性声優の中では一番、好きな人です。好きなキャラが多すぎて選べないくらい、この人が演じたキャラに惚れてしまいます。

・次に柊の妹、椿は折笠富美子さんです。『ブリーチ』よりも『あたしンち』の声の方をイメージして書いてますね。

・最後に椿の好きな人、藍は内山昂輝さんです。『キングダムハーツ』で演じている役でハマりました。ゲームの方ももちろん、来年発売する最新作は買う予定です。

・という訳で、声優語りは以上です。次のあとがきも何かを書こう
と思っていますので、楽しみにしていただければいいな、と思います。
では。

十七話 陽光（前書き）

今回は嵐の前の静けさってことで、短めです。

十七話 陽光

西暦2025年1月31日午前九時三十二分

長門は全速力で走っていた。自分の胸が反応を示す場所の方へ。

腹の奥から痛みを感じ始めていたが、無視した。

今はそんなことを言っていられない。

今は身体の痛みを感じる時ではない。

今は心の痛みを感じる時だ。

あの時救えなかった時のことを繰り返してはならないのだ。

そのためには走るしかなかった。

ただ、走って、走って、走って——走り続けた。

先に見え始めた建物に向かってただ、走った。

西暦2025年1月31日午前九時三十五分
ある廃工場の中

工場の奥から現れたのは片腕がなく、狂氣的な怒りの顔をした女性だった。

「やっぱりお前だったのか、土佐」

柊は静かにそう言った。

土佐はその言葉を聞き、怒りと笑顔が半分ずつの形容し難い不気味な顔になった。

土佐の顔を直視した柊は体の奥の芯が冷えたような感じた。

そんな柊の顔を見た土佐が甲高い笑い声を上げた。

そして笑いを抑えながら言った。

「何がやっぱりなんだい？あんな、今の自分の状況がわかってるのかい？」

感情を逆撫するような声だった。

柊も頭に血が上りかけたが、すぐに冷静になって言返す。

「飛んで火に入った虫つてところだろ？」

「よく分かってるじゃないか」

クククと笑いながら土佐はいまだに狂気を宿した瞳で柊を睨みつけて言った。

「まあ、あんたはさらにでかい虫を捕まえるための餌だけだねえ。
：しかし、あんたが間抜けなのか、私の運がいいのか。まあどっちでもいいけど。ただ……」

言い終わらないうちに柊の首を、土佐は残った左腕を使い、掴み締め上げた。

柊の口からは咳と、空気の全てが肺に送り込まれないことによる空気の漏れたような音を搾り出された。

土佐の掴む手の強さが徐々に強くなる。

「待ってるだけじゃつまんないのよねえ。例えばあいつが来た時にはもう、あんたが死んだ後だったらどんな顔するかしら？ 弟の時みたいに泣くのかしら」

問いかけているが、柊のほうは答える余裕はない。

必死になって空気を少しでも多く吸い込もうとするが、全く入ってこなかった。

急に『死』が現実味を帯びてくる。

すると急に首を掴む手が緩くなり、正常に息をすることが出来るようになった。

柊はゴホツと咽た咳をし、土佐を睨んだ。

土佐の顔は笑顔でも怒った顔でもなく、ただ無表情だった。

「けど、もし、あんたを殺したら、私は人を守る『兵器』としては失敗作になるのよねえ……」

土佐はため息を一つ吐き出し、自分に言い聞かせるように静かな声で言った。

左腕を胸に押さえながら、憂うような表情で、光がない瞳は屋根が破れた隙間からの青空を映していた。

柊は自分でもおかしいと感じながら、このときの光景は彼の人生の中でも幻想的な光景として記憶されることになる。

隻腕で残った左腕を胸に押さえながら、盲目の瞳で穴の空いた天井から空を見上げ、陽光を身体中に浴びた女性の姿を。

そんな静かな時間は唐突に終わりを告げた。

奥のほうから、物音が聞こえ始めた。

それも連続で。

柊はあるひとつの可能性に思い至った。

「隊長？」

柊は信じられない顔で呟いた。

自分がいる場所を見つけ出すことは、ガラクタの中からネジひとつを見つけようとするようなものだ。

「待っていたわよ」

幻想的な空気から一転、狂気の空気を再び纏った土佐は心底喜ぶように呟く。

「長門」

そう土佐が言った直後、『生物』の返り血を大量に浴びた命人が現れた。

その血が『生物』だけ出ないことを示すように、彼女の口からも一筋の血が出ていた。

「た、隊長」

柊の悲痛な声を聞いた命人は笑顔でそれに答えた。

口元の血が床に落ちる。

「隊長。なんでここが…？」

「秘密」

そういつて、床に口の中の血を唾をする要領で吐き出した。

「おはよう、土佐。相変わらず、元気そうだね」

命人の声は弱々しかったが凜としており、心は折れていないことを見せ付けていた。

その言葉に土佐は目元をひくつかせる。

「まあね。あんたのせいで腕はこの様だけど別にいいわ。早速、リターンマッチといこうかしら？今のあんたは倒し甲斐がなさそうだけど、命令だからね」

「その前に二つ聞いてもいい？」

「なに？」

命人は息を整えてから質問した。

「一つめ、彼をまず解放してくれる？」

命人は柵のほうを顔で指しながら言った。

「別に構わないわ。もう用済みだし」

「隊長！逃げてください。自分は大丈夫ですから！」

何が大丈夫なのかは自分でもわからなかったが、柵は叫んだ。

彼女を何とかして逃がさなければならない。

自分は…どうなっても構わないから、彼女だけは…。

その言葉は無視された。

命人は質問を続ける。

「二つめ、あなたに命令しているのは誰？」

「答えるとも思う？」

はぐらかすように土佐が言った。

「言ってみただけ。けど、もし笹林中将だったら、君は捨てられるよ。遅かれ早かれ、ね」

「黙りな！」

土佐の顔は怒りの表情が浮かんでいた。

しかし、その顔には不安、恐れを隠そうとする風にも見られた。

「あんたみたいに平和な環境を与えられた奴とは違うのよ、こっちはね！」

「だったら、なんで人のいうことばかり鵜呑みにして、自分で考えようとしらない！」

その強い言葉が命人と土佐、二人の空間に響いた。

「自分で考えればよかったんだ。そして、否定すればよかったんだ。それは何も悪いことじゃない」

「それじゃあ、私達はなんだ。人のために働くのが私達だろう。それが『兵器』だろう。それが私達の存在してもいい理由だろう」

搾り出すように土佐の口から言葉が吐き出される。

その言葉はあまりにも悲しい声だった。

「私達は一生、どう転んでも人間としては生きられないんだよ。あんたが言ってるのは理想だ。それに…」

土佐は言葉を切り、顔を上げた。

「私はあんたほど強くはない…」

その顔は涙で濡れた、悲しい怒りの表情だった。

「それにあんたは私の子供をたくさん殺した」

「…やっぱりね」

工場の入り口近くにまとまって放置されている、巨大な蛇の『生物』。

命人がつい昨日、倒した蛇たちも彼女から生み出されたものだったのだ。

「あの子達はね、私に関する実験の中で生み出された『生物』を兵器として運用することができると言う計画の中で生み出されたものなのよ」

土佐は命人を見据えて言った。

「ねえ、あんたはこれが正しいと思う。…思わないわよね。私も知ってるのよ。長門、あんたのように行動すれば、あんたと一緒にいれば何事もなく平和に過ごせたって事くらい。…けどね、私にとってあんたは眩しすぎるのよ。一緒には行けないだから！」

土佐は戦闘の空気を纏った。

命人もそれに習う。

「隊長…」

「木野君、ちょっと、隠れといって」

命人は柵のほうを向かずに言った。

「ここから先は、戦場だ」

十七話 陽光（後書き）

・どうも、作者です。

・今回は前回の予告どおり、ちょっと語りを入れたいと思います。

・今回はキャラの名前の由来について答えていききたいと思います。
それではレッツゴー！

・まず、主人公の命人。彼女は特に考えもなく考えました。むしろ、『長門』というコードネームの方を先に考えましたね。

・『長門』の由来は日本の戦艦からとりました。同じように、ほとんどの『兵器』には戦艦の名前からのものが多いです。

・もう一人の主人公である柊は、昔から考えていたキャラの名前を考えずにつけました。

・最近、花言葉に興味を持っている作者は、暇つぶしに柊の花言葉について調べてみると『あなたを守る』という意味があるのを知りました。カッチョイイ！ヘタレにはもったいない。

・今回は短めに終わらせときましょう。では。

十八話 恐怖（前書き）

なんとか今年中に修正が終わり、次話更新できました。
今回は作者もちよっと、予想外の急展開です。

十八話 恐怖

そして、戦争が始まった。

二人だけの『兵器』同士の、同じ思いを胸に秘め、いつの間にか違えてしまった者同士の戦争が。

命人の右手は『爪^{エッジ}』の状態になり、土佐は残った左手を、昨夜の戦闘と同じように鞭の状態にした。

土佐の鞭が視認できないほどの速さで動き、空気を切り裂いた。

そこには狙った獲物はなく、その事を確認した瞬間、土佐の胸が爆発した。

「がっはあっ」

「まずは昨日のお返しだよ」

命人の声が天井のほうから聞こえた。

土佐は上を見上げるが廃工場の中は予想以上に暗くまた、複雑に入り組んでいたため、すぐに命人を確認することは難しかった。

ふと、ある違和感を感じた。

胸から血が止めどなく溢れていたが、思ったほど傷は深くなかった。

——手加減しやがった。

本気を出せばコンクリートを粉砕できる威力のはずの攻撃だ。

出血がひどいとはいえ、この程度で済んだということは手を抜いたのだ。

一瞬にして頭に血が上った。

命人にならない、工場の天井近くまで跳んで、柱を掴み、彼女を探した。

——見つけた。

ちょうど自分とは逆の柱の上に立ち、指で空を指した。

屋根の上に出ろ、ということらしい。

そして、命人は素早く屋根の上に姿を消した。

土佐もそれに習い、近くの穴から屋根の上に出た。

まだ、朝が早いので、冷たい風が身を切った。

「なんで、本気でこないんだい」

土佐が叫んだ。

命人も叫んで答える。

「本気さ、今のね」

「へえ」

怒りに身を任せ、突っ込みそうになった。

しかし、今までのパターンから考えて、それが誘いだということに気づいた。

その手にはもう乗るか。

土佐は怒りを抑え、代わりに嘲笑するように言った。

「昨日の方が楽しめたけどねえ、あたしはあ」

「負けているからじゃないのかい」

予想外の言葉だった。

命人には珍しい、あざ笑ったかのような口調だ。

それが相手の手だというのはさっき気づいた。

だが、滅多に見せない彼女、あざ笑った口調が、顔が、全てをぶち壊してやりたいと思った。

持っていないものをたくさん持ち、それ見せびらかされたような
気持ちになり、何も考えず突っ込んだ。

だから気づかなかった。

近づいて初めて気づいた。

命人の手が何を握っているのかを。

それが腹部に突き刺さる。

頭がショートしたかのように混乱と痛みの底に落ち、叩きつけられた。

「これも昨日のお返しだよ」

鉄棒を突き刺した後に聞いた声を加害者の声を最後に、土佐の身体も屋根から滑り落ち、工場内の地面に叩きつけられた。

全身を含め、骨や内臓が碎かれ、破裂した。

もはや土佐の身体は戦闘を続行できる状態ではなくなった。

—— やってしまった。

命人は先ほどまで感じていた高揚感から嘘のような、鬱に襲われていた。

急な吐き気を抑えることが出来ず、何もない腹の奥から血を吐いた。

どうやら、今のわずかな戦闘で回復しかけていた内臓が再び破れたらしい。

吐いた血が屋根を伝い、土佐と同じように地面にへと落ちていった。

肉体の痛みと心の痛みが襲う。

——自分は何をやっているのか。

仲間だった存在をもっとも残酷な方法で倒した。

彼女の心の叫びをついさつき聞いたばかりなのに……。

今までの高揚感。

身体に内蔵された『核^{コア}』によって、戦闘の際には恐怖を忘れ、代わりに高揚感を与える機能……それはかつて戦場で戦っていた際、常に付いてきていたものだった。

自分をもっとも恐れていたものだった。

昨夜の戦闘は自分は不思議と抑えることが出来ていたのに……今は押さえることが出来なかった。

そして、命人の考えはある可能性に思い至る。

まだ、死ぬわけにはいかないという考えが、昨日の戦いにはなかった。

正確に言えば、死んでも別に構わなかった。

今日は違った。

死にたくなかった。

彼と一緒に過ごすためには死ぬわけにはいかなかった。

『核』はその願いを叶えたのだ。

彼女を倒すというやり方で。

つまり、『核』が動かなければ、死んでいた。

手を抜いていれば、負けて死んでいた。

だから、抑えることが出来なかった。

「あ、ああ、ああ……」

自分の中の……『核』の……殺意を止める事が出来なかった。

「あああああああっ！………！」

抑えていた感情を吐き、叫び、吐き、叫び、吐き、叫び、吐き…
…。

それがずっと、忘れようとしていた『記録』を思い出し始めた。

何かが分かれた。

—— 殺ったのは自分だ！

本当ハ殺シ足りナカッタンジャナイノカイ？

—— ここまでする必要はなかったはずだ！

ケド、死ンデイタヨ。

アノママダト。

—— ……。

彼トズットイルタメニハ殺スシカナカッタ。

――……。――

正シクナイノハワカッテイルサ、ソレハばくガ一番ヨク知ッテイルモンネ。

ナンテツタツテ、ばくハ犠牲者一号ナンダカラ。

才姉チャン。

#

柊は戦いが始まると、命人の言うとおり、離れて戦いの様子を見ていた。

戦いが屋根の方に移ってからは、戦闘の状況が全くわからず、上から聞こえる足音を頼りに移動していた。

すると、天井からどちらかの体が落ちてきて、土佐と気づいた時、何も考えず近寄った。

ひどい。

第一印象がそれだった。

鉄棒が身体に突き刺さっている状況はまさに、昨夜の命人だった。

それに加え、胸は血が溢れかえっており、腹の出血と共に地面を濡らしていつていた。

彼女がまさかここまでやるとは想像していなかった。

いきなりゴホツと土佐が咳をした。

同時に腹の傷から一瞬、噴水のように血が吹き出た。

「お、おい」

何かをせねばと柊は声をかけた。

敵である土佐に声をかけた理由はわからなかった。

しかし、このまま見てみぬふりはできなかった。

土佐は何かを伝えようと口を動かすが出るのは赤い血のみで、何も見えない目は天井を向いたままで、身体を動かそうにも動かせる状況ではなくて……。

「聞こえているか、土佐！」

柊は土佐の耳元で大声で聞いた。

返ってくるきたのは口をパクパクと、生きるために少しでも空気を取り込もうとする魚のような反応だった。

「いったいどうすりゃ…」

柊はどんなに考えてもこの状況を覆す事の出来る、名案は思い浮かばないような気がした。

（そうだ。）

柊は天井の上にいる自分の上官のことを思い出した。

命人なら適切な対処が思いつくかもしれない。

土佐は敵でここまでの仕打ちをしたのも仕方ないとしても、彼女の性格なら救うはずだ。

そう考えて、屋根の上に届くように叫んだ。

「隊長！森山隊長！来て下さい！」

その声は届いていた。

聞こえていた。

しかし、聞いていなかった。

命人の耳には届いていなかった。

十八話 恐怖（後書き）

明日も更新できればいいなと思います。

もし出来なければ、来年になるのかな（当たり前だ！）

十九話 絆

命人にとって弟は生きていく上で大切な存在だった。

親の顔を知らず、孤児として育った命人たちは互いに支えあいながら生きてきていた。

孤児院にいた頃の二人はイタズラをして一緒に大人に怒られ、罰として窓拭きをしても笑っていた。

それは命人が『兵器』にされてからも変わらなかった。

弟も同じように『兵器』にされたから。

『兵器』にされた時、命人には新しい名前が与えられた。

長門。

それが与えられた新しい名前だった。

弟にも新しい名前が与えられた。

その名前は――

#

命人からの返事はなかった。

柊は不安に思ったが見に行くことは難しかった。

最後に柊が彼女の姿を確認したのは屋根の上に行く時なので、理屈上、彼女は屋根の上にいることになる。

人間の柊が行くことは難しかった。

しかも、目の前に苦しんでいる土佐がいる。

土佐を助けるということは敵を助けることだ。

敵を助けるなんてことは戦場ではありえないことだ。

しかし、柊はどうしても見捨てることが出来なかった。

間違っていることは当然わかっている。

土佐は敵で昨夜は命人を傷つけた。

許すことはしない。

だが……今の土佐と昨夜の命人。

一体なんの違いがあるというのだろう。

「……………」

柊は無言で土佐、天井にと視線を走らせ…結局、近い方を先に救

うことに決めた。

北上と一緒にやった要領で突き刺さった鉄棒を抜こうと掴んだ。

土佐は柁の行動に気づいたのか、苦しみ喘ぎながらも瞳で聞いた。

どうして助ける？

「なんでかな」

柁も答えに迷いながら、行動に移す前に少し考え、

「苦しんでいる人間を見たら、助けなきゃと思ってさ」

困ったように笑いながらそう言った。

土佐が信じられないような顔をする。

「かなり痛むと思うから、覚悟しろよ」

柁はそう前置きしてから、鉄棒を一気に抜こうと力を入れた。

しかし、抜こうとしても中々抜けなかった。

突き刺さった中で中途半端に滑り、土佐の身体に更なる痛みを与える。

叫び声は出なかった、いや胸が浅いながらも傷を負っていたた

め、叫ぶと更に痛みを増やすだけと考え、無理やり押さえつけたのかもしれない。

柊は土佐の身体を傷つけないように慎重に選び、踏みつけた。

それを利用して一気に棒を引き抜こうとする。

ゆっくりと確実に棒は動き、数分後にズボツという音と粘性の液体が糸を引くような感覚と共に抜けた。

「おい、抜けたぞ」

柊が土佐にも聞こえるように叫んだ。

しかし、土佐は気を失ったのか、反応を示さずぐったりとしていた。

息は荒いながらも行っていたので、死んではないことはわかった。

とりあえず、命人が心配なので土佐のことはひとまず置いておき、屋根の上にあがる方法を探すため、上階の方に向かった。

#

忘れたかった…。

ズツト、忘れヨウトシテイタノ？

忘れかけていた…。

ヒドイネ、実ノ弟ナノニ。

ごめん…けど、土佐をあそこまではする必要はなかったはず…。

殺サナカッタラ、オ姉チャン、死ンデタヨ。

けど、

ケドジャナイヨ、オ姉チャンが死ンダラ、ぼくモ死ヌコトニナルンダカラ。

弟ヲ二回モ殺ス気？

そんなつもりじゃないよ…。

ゴメン、少シ言イ過ギタネ。

えっ？

忘レテイナカタヨ、オ姉チャンハ。

ダツテ、ぼくツテ自分ノコトヲ言ッテルジャン。

ソレツテぼくノコト、忘レテイナイツテコトダヨ。

ダカラ、モウ少シダケ、オ姉チャンニ……。

#

「隊長！」

命人が意識を取り戻した時、初めて聞いたのは柊の大声だった。

頭がクラクラする。

まるでマラソンを終えたランナーのような感じた。

しっかりと目を開けると、柊の心配そうな顔が最初に入り、その顔が安心したような顔になるのもわかった。

「隊長、よかった。ずっと、意識がなかったんですよ」

「ごめん、ずっと…なんだろう」

大切なことのような気がする。

一体なんだろうか。

忘れたのではなく、意図的に忘れさせられたような気がする。

「?どうしたんですか、隊長。夢でも見てたんじゃ」

夢?

「そうかもしれない。ごめんね、心配かけて」

「土佐は隊長が倒したんですよね」

「え?あ、ああ、そうだと...おもつよ」

不思議とすぐにそうだと言えない何かがあるような気がした。

記憶がないのだ。

土佐と戦った記憶が。

「なんか他人事のような言い方ですね」

「そう?」

記憶がないことは命人も不安に思ったが、悩んでもいられなかった。

土佐を倒したということは事実のようだし、何よりも問題は...

「とりあえず、移動しなきゃね」

「移動、ですか」

「ここは敵のアジトなんですよ。『生物』はあらかじめ片付けたし、正確にはアジトとはもう呼べないかもしれないけど。とにかく、いつまでもここにすることは危険だ」

「そうですね。けど、ここで迎え撃つてことは…」

「無理だよ。ボクはまた、内臓が破けちゃったらしくて、また、しばらく動かない方がいいみたい」

「え。じゃあ…」

今、二人がいる場所は屋根の上、二人で同時に降りることは出来ない。

「…どうすれば」

「…ボクに聞かないでよ」

嫌な空気の風が吹いた。

「まったく、心配かけやがって」

不機嫌そうな声が後ろから聞こえた。

二人が振り向くとそこには、

「あ、六甲」

「北上さん!」

北上こと六甲が不機嫌そうな顔をして立っていた。

「どうしてここが」

柊が安心した声で聞いた。

「長門の『核』を頼ってきたんだよ。とにかく、移動するんだろ？
だったら、」

北上が自分の背中を指し、

「柊、お前、俺の背中をしっかりと掴んどけよ」

「えっ、まさか」

柊の頭に不吉な予想が思いつき、額から汗が流れる。

北上が不機嫌そうな顔そのままニヤリと笑った。

「そのまさかだ」

「しっかりと掴んでろよ、柊」

「あ、あの、聞きたいんですけど、これ本当に大丈夫ですよね？」

「たぶん」

「ち、ちよっとっ」

「お前がすっかり掴んでればな。いくぞ！」

「ま、待って——」

その瞬間、柊、命人、そして北上、三人分の身体が空中を浮かんでいた。

柊は北上の背中をしっかりと掴み、その間に命人がいる。

もちろん、重力に逆らう行為であるため、三人まとめて、下へと落ちていくことになる。

全身が落ちていくという、普段なら絶対に味わえない感覚の中、柊の耳には風を思いつきり切る音が入ってきていた。

恐怖やらなんやら、色々な感覚がごちゃ混ぜになる感覚が駆け巡り、そして——。

空気を切る音が終わったと思った次に、柊は全身に痺れのようなものを感じた。

その感覚が無事には言えないが、地面に着いたことを意味すると理解して、安堵の息をつく。

「大丈夫ですか、北上さん」

最大の功労者に声をかける。

「……まったく、馬鹿二人のせいで苦労する」

不機嫌な口調そのままに北上はそう返した。

屋根の上、実質普通のビルの三階以上から飛び降りた北上は特に怪我をしている様子もない。

「六甲はこの程度じゃ死なないよ」

命人はあっさりと柔らかい口調で言った。

「だって、ボクはいつでも信じているからね」

「…まあな」

照れ隠しなのか、返事はぶっきらぼうだ。

「それでも言うておく。ありがとう、六甲」

「……こちらこそ、だ」

北上も笑顔は口元を上げながら、そう返した。

二十話 本能（前書き）

今年最後の更新に滑り込みセーフ！

二十話 本能

「…上手く、立ち回ってくれたようだ」

情報屋、『盤上の駒』はそう呟いた。

六甲が彼の思惑通りに動いてくれた。

これで彼の予定も狂わなくて済んだ。

「さてさて、あとは彼らと接触でいれば万々歳、この事件での私の役目も終わり、と」

ニヤリと笑い、

「もう少し、楽しませてもらいますよ、長門、六甲、そして――」

言葉を切って、もっともこの事件のイレギュラーな存在の名前を呟く。

西暦2025年1月31日午前10時15分
廃工場の外

屋根から飛び降りてからしばらくして、柊が思い出したように言った。

「北上さん、実は言っていないことがあるんです」

「なんだ？」

「土佐が工場の中にいるんです。あいつを…助けてくれませんか」

何故そんなことを言ったのか、柊もわからなかった。

しかし、あのまま見捨てれば、彼女はおそらく、この一連の事件の首謀者たちにひどい仕打ちに遭うだろう。

それがわかっていのに見捨てる訳にはいかなかった。

そんなことを言い出す柊を北上は呆れた声で、

「あほか」

と言った。

「お前、あいつが、敵ってこと…」

「知ってます。けど、けど捨てれませんよ、このまま…放って置きたくないんです」

柊はそう言いきった。

北上はため息をつきながら、命人に聞く。

「どうする、長門？」

命人はしばらく考え込んでから、

「助けよう」

と静かに言った。

「彼女をあんな状態にしたのはボクのせいだ。謝らなくちゃいけない。八十年前のことを含めても」

「…わかったよ」

北上も諦めたのか、そう言い、

「しかし、あいつがまだ敵意を持って攻撃してきたら、容赦なく潰すぞ」

そう念押しした。

北上が土佐を探しに行った後、残った柊と命人は特にやることはなかった。

柊、命人とともに体力が残っていなかったからだ。

特に命人は昨日からの連戦で、傷もしっかりと癒えていない。

口調は落ち着いているものの、顔は蒼ざめているため、万全の状態ではないのは明らかだった。

そのとき、顔を歪めて腹を押さえた。

「大丈夫ですか!？」

「大丈夫だよ…じっとしていればね」

そう言うものの、顔色は相変わらず悪い。

柊は気が気ではなかった。

そもそも、こんなことになったのは自分のせいなのだ。

自分なんかがいなければ、こんなことにはならなかっただろう。

「なんて顔してるの」

命人は柊の顔を覗き込み、きよとした顔で聞いた。

「ボクがこんな状態になったのは自分のせい、とでも？」

凶星だ。

「まったく」

北上と同じような呆れた口調でため息をついた。

「それを言い始めたら、ボクがこんな傷を負わないように上手く戦っていればよかった、て話になるじゃないか」

「けど、自分が…」

「ボクに言わせれば、君の考えは『試合の前に逃げろ。そのほうが

怪我をしなくて済むから』って言ってるようなものだよ。もちろん、今の状況を試合とは思わない。心配してくれるのは嬉しいけど、これは戦いなんだ。戦いの中で怪我することは普通だよ」

「…それでも」

柊は納得できなかった。

自分のせいで傷の治りが遅くなったのは事実だ。

命人はそんな柊の顔を見ながら笑顔で言った。

「昨日の夜、君は言ったじゃないか。ゲームオーバー…まだ、死んでいない。それが戦いの中では大切なんだよ」

柊を励ますように肩を叩き「さて」という言葉と共に立ち上がった。

「そろそろ、行く準備をしなくちゃね」

命人は腹を抑えながらも、それを気にしないような口振りで柊に向かつて言った。

西暦2025年1月31日午前10時二十分
廃工場の中

北上は困惑していた。

工場の中に土佐がいるという話だったが、その土佐がいなかった。
いた形跡はあった。

大量の血痕が彼女の血という事は、あのいけ好かない臭いでわかった。

だが、ここにいないということは奴は回復して逃げた、あるいは…。

そこまで考えが及び、北上は最悪の事態が迫っていることに気づいた。

「まずい…！」

嫌な汗を感じつつ、北上は命人たちの場所まで駆け出した。

西暦2025年1月31日午前十時二十分
廃工場の外

「来たみたいだね」

命人が呟いた。

柊も目を凝らしてみる。

人影のようなものが最初に見え、それが北上とわかるのに時間は

かからなかった。

疑問に思ったのは土佐がいないことだ。

「土佐は…いません、よね？」

「・・・確かにいない。これは・・・」

そこまで命人は言い、

「走って！」

突然、大声で叫ばれ虚を突かれた柊は思わず、聞き返してしまっ
た。

「えっ？」

「とにかく走るんだ！」

その様子から、ただことではないと感じ取れた。

「わ、わかりました。ええーと…」

「工場から離れるんだ！出来るだけ遠くに！」

その言葉がいい終わらないうちに工場のほうから、何かが爆発し
たような大きな音が響き、地面と柊たちの身体が揺れた。

「うわっ！」

柊もこの時点になってようやく、状況が飲み込めた。

全力で駆け出そうとした時、あるひとつの事実が頭をよぎった。

後ろ振り向いた。

やはり、命人が遅れていた。

本能は早く走るように言っている、傷ついた身体が追いつけないのだ。

「隊長！」

北上との距離はまだある。

彼が命人を拾うことも考えたが、万が一、破片の方が彼女に当たれば取り返しの付かないことになる。

柊は走ってきたほうに戻り、何も言わず命人の手を引き、身体を持ち上げた。

「木野君？」

「緊急事態ですので…言うことは後にしてください！」

柊の命人の持ち上げ方は、世に言う『お姫様抱っこ』の持ち上げ方だ。

それは命人にとって二日連続の体験だったが、昨日、北上にもらった時は気を失っていたため、されていたという事実さえ知ら

ない。

命人の顔が少し赤くなっただが、柎の赤さに比べればまだ薄かった。柎にとつてもこれは初めての体験だった。

「うおおおおっ！」

恥ずかしさを隠すためか、はたまた気合を入れるためか、柎は全力で走った。

その柎の姿を見ながら、北上は、

「ばかりが」

そう呟き、二人に破片が当たらないよう大きい破片は自分の手で壊していつていた。

「土佐がいなかった？」

工場の爆発と崩壊はまだ続いていたが、とりあえず安全な場所として、近くの廃ビルの中で休息をとることにした。

北上は工場の中に土佐がいなかったことを告げた。

「そんな。それじゃあ、土佐は……」

「逃げた、あるいは連れて行かれた、か」

命人は目を閉じながら、憂うように呟く。

「俺は連れて行かれたと踏むね。工場の爆破を仕組んだのはおそらく、人間達だろう。上手くいけば俺らをまとめて潰すことが出来る。余計な人間は死ぬだろうし（柊のほうを見て言った）俺らは傷はつくだろうが回収できる」

ふうつとため息をつき、

「間一髪だったな」

「自分の悪運と日頃の行いに感謝しなきゃね」

命人がそんな軽口を言った。

「誰に感謝するんだよ」

「自分にでしょ、神様なんていないんだし」

あはは、と乾いた笑い声を上げる。

「とにかく、だ。これから俺らが何をするかは決まった」

北上が柊をじっと見据える。

「お前の協力が必要だ」

その言葉に柊は驚いた。

「自分が一体、何の役に？」

「後で説明する。少し複雑だから」

西暦2025年1月31日午前十一時

「予定通り、工場は崩壊したようです」

「そうか。それでアレは？」

「予定通り回収しました。そのあとの処置も予定通り行います」

「それでいい」

「…あの。あの男はどうでしょうか、笹林將軍」

「せいぜい、利用してやるさ。私の身代わりとしてね」

「わかりました」

「大尉、気をつける。どこで情報が漏れるかわからんからな」

「はい」

二十話 本能（後書き）

・今日一日で連続で更新しようと思っていたので、かなりきつかったです。

・それでは今年最後の語りを入れようと思います。

・それでは行きましょう！

・六甲こと北上は作者も一番好きなキャラです。おっさんは書いていても楽しいんですよ。

・さて、そんな北上ですが彼の『兵器』としての名前の『六甲』の由来は戦艦ではありません。

・この作品を書く前に戦艦にはまっていた…そのとき山の名前が由来になっていると知りました。

・しかし、そのなかに六甲山からの『六甲』という名前の戦艦がなかったのです！

・ いつか六甲という戦艦を自分の作品で出したい、と思うも自分にミリタリーな小説は無理、と感じていたのです。

・ そのとき、この作品を書くにあたって『兵器』というコンセプトはあったのですがどうしても名前が思いつかなかったのです。

・ これしかねえ、と思い…おっさんの『兵器』の名前を『六甲』にしたというわけです。

・ それでは来年もどんどん更新していこうと思います。

・ では！

二十一話 別れ

西暦2025年1月31日午後一時
あるレストラン

この時間帯は昼休みがちょうど終わり、多くの社会人が再び仕事に勤しむ時間帯だ。

つまり、レストランの厨房では夕方から夜の料理仕込みの時間帯である。

もちろん、この時間帯でもレストランに来る客はいるが、帝都中心ではそう多くはない。

その決して客の多くない時間帯のあるカレー専門のレストランで、柊はある人物を待っていた。

理由は一時間ほど前に遡る。

「お前に頼みたいことってのは、『情報』を買ってきてくれ」

「『情報』って一体どんなものですか」

「これからの戦いに必要なものだ。長門が休んでいる間にとって来い。…おそらく、手書きの紙に書かれているはずだ」

「手書き？」

「アナログと思うかもしれないが、情報が発達した今、手書きほど機密を守れるものもない」

「なるほど…」

「いいか、この（地図を指しながら）カレー専門のレストランに十二時五十分までに行け。十二時五十五分以内に注文。内容は『カフェイン入りのカレー』」

「え、なんで…」

「なんでカフェイン入りかは、来た奴に聞け。とにかくそうすれば情報を渡す奴が現れる。それと交換でこの金を渡せ」

「……なんか凄い厚いんですけど。いくらなんですか」

「教えてやってもいいが、多分お前が人生で握ったことのない額だろうな」

「やっぱ、やめときます」

「いい判断だ」

先ほど、『カフェイン入りのカレー』と店員に頼み、五分が過ぎている。

渡される「情報」の中身がどんなものかは予想が全く出来なかったが、これからの戦いには必要になることは絶対だと言われていたことから、重要であることは確かだ。

失敗は万に一つ、許されない。

そう頭でわかっている不安だった。

これから人生ではじめて「情報屋」という、未知の職業の人物と出会うのだ。

不安にならない方がおかしい。

こんなに緊張して待つ時間は配属発表の日以来だった。

「あの…」

「はいっ」

おずおずとした感じの女性の声が耳に入った。

柊の声が自然と強くなる。

そして、声の主の顔を見た。

「えっ？」

「やっぱり、そっだ…」

その背は小さく、一見すると小学生だった。背中にはリュックサックを背負い顔は見覚えがあった。

その人物は

「朝あつた森北さんですよね」

朝に出会い、コーヒと一緒に飲んだ小間空和歌だった。

少しの間、二人は動けなかった。

「あ、あの……」

静寂を破ったのは和歌だった。

「座っていいですよね？」

「あ、はい、いいですよ、どうぞ」

「ごめんなさい」

和歌が座り再び、無言の時間が訪れた。

その間店員も来ず、柊は最初に出された水を全て飲み終えた。

残ったのは溶けて小さくなった氷の欠片だけだった。

数分後。

「えーと、和歌さんは」

「は、はい」

「『情報屋』の代理人ですよね……？」

「あ、はい、先生がそういう職業をしている関係で、こういう仕事を時々…」

「へえ、そうなんですか」

「え、えーと。森北は…偽名ですよ。本当の名前は…」

「木野柊です。すみません、嘘ついたりして」

「いえいえ、嘘は慣れっこですから」

「気まずい空気が流れる。」

その空気を打ち消すかのように柊がきはきした口調で本題を切り出した。

「それじゃあ、例の「情報」を」

「はい！それはもうしっかりと持ってきましたよ」

横に置いていたリュックサックから、茶色い大きな封筒を取り出し、「はい」と元気の良い言葉と共に柊の手に置いた。

「あと、柊さんがお金を出せば取引成立です」

「それじゃあ」

懐から札束の入った封筒を、小さな手に渡し「取引」は終わった。

柊は残っていた氷の欠片を全て口に含み、飲み込んだ。

潤った口で聞きたかったことを質問してみる。

「和歌さんは『情報屋』と一緒に仕事をしているんですね」

「そうです。先生の職業は危ないように見えるんですけど、私には危ない仕事は回さず、身の回りのことを手伝っているんです。先生が安全な仕事って言えば、今日見たい私が先生の代わりに『情報』を手渡したりするんです」

朝にインスタントコーヒーを買いに行かせたのはその「情報屋」だろう。

朝に感じた不安はどうやら杞憂だったようだ。

安心した一方で二人の関係が気になった。

「君とその先生の関係は…」

「命の恩人です！」

言葉を失った。

和歌の言葉は続く。

「…昔、捨てられていた私を先生が拾ってくれて…だから、私は先生のためなら、何でもしたいんです。いえ、何でもやりたいんです」

「…そうなんだ」

そうとしか言えなかった。

少なくとも柊は。

そして、彼は、

「他には？」

口元を歪めて聞いた。

それは先ほどまでと同一人物とは思えない低い声だった。

和歌はそれを確認すると、微笑み返しなら、

「だから、先生が「あなた」に伝えておきたいことがあるって事も
しっかり伝えます」

「……」

「『隠れるのも今のうち、さっさと目を覚ませ』と」

彼の瞳孔が鋭くなる。

その瞳は今にも斬りかかる獣のような、凶暴さが垣間見られた。

和歌はその様子に動じることなく、微笑んだままだった。

やがて、互いに背負うものを一瞬で二人は理解した。

二人の間の空気は、重さを得たかのように感じられた。

口元はそのまま、彼は続けた。

「じゃあ、こう伝えてくれ。『もうしばらく楽しむ』ってな」

「…わかりました」

先に立ち上がったのは「彼」で、何も言わず出口に歩いて行った。

和歌もしばらくしてから、同じように立ち上がり、そのレストランから出て行った。

こうしてお互い重苦しい空気のまま、何も言わずに別れた。

出会ったときは反対の空気だった。

西暦2025年1月31日午後三時

レストランを出た後、柊はまっすぐ帰らずに、遠回りして帰った。

念には念を入れてだ。

北上のアジトに戻った時、柊の足は棒のように疲れ果てていた。

「今、戻りましたよ」

「…苦労さん」

命人はソファーに寝転びながら、手を振った。

「傷、治ったんですか」

柊がほっとした声で言った。

命人は安心させるように笑った。

その手には携帯ゲームが当たり前のように握られていたことから、柊もだいたい回復したと思い安心した。

「じつとしていたからね。六甲から渡された薬のおかげかも」

命人が「感謝、感謝」と呟きながら、ゲームのボタンを連打し始めた。

どうやら、今のゲームの状況は佳境らしい。

柊は呆れながらも、彼女の回復を素直に喜んだ。

しかし、ここである人物がいないことに気が付いた。

「えっと、その北上さんは？」

「命令で日本を離れたよ」

「えっ」

聞き間違いだろうか。

だが実際、北上の姿はどこにも見えなかった。

「一体、どういう意味なんでしょうか」

疑問以上に不安が心に広がった。

北上の戦闘力は、今は外す訳には行かないと思っていたのだが。

「だから、命令で日本を離れたんだよ」

そんな不安を知ってかしらるか、命人の声はあっさりしている。

終はこの日、何度目かの質問をした。

我ながら昨日から今日にかけて、いや彼女と一緒にになって質問をしなかった日はないのではと思った。

「どうして？」

「そんな命令をした、と？」

「……はい」

命人はため息を一つ吐き出し訳を話し始めた。

ゲームを静止状態にするようにセットしてからだったが。

「まず、他の仲間を集めて欲しかったんだ。この事件がもし、失敗…ボクが負けてしまった場合、誰も笹林中将を止める奴はいなくな

る」

「だけど、だからって」

「上手くいけば、傷つくのはボク一人さ」

「それじゃあ、みんなを集めるってことは」

意味はないではないか、それでは。

「いざって時のため。何事もなく終われば、明後日には皆と宴会が出来る」

こんな状況に持っていく、彼女の思考がわからない。

まるで、自分をわざとピンチにしようとしているかのような

「けど、もし…」

「さて、君にも最後の任務を言おうか」

驚きの連続だったが、これは強烈だった。

「最後？」

信じられず聞き返した。

「そう、最後」

「そんな。自分は最後まで」

「残念だけど、君のできるのはここまでだ」

「ついでにいきたい」という言葉も言わせて貰えず、そしてはっきりと言われた。

信頼されていると、背中を預けてもらっていると北上から言われていただけにショックだった。

「ここから先は生きていける保証は全くないんだ。さっきの工場でわかったでしょう」

「……」

それはわかっているけど…。

「大丈夫だって。死にはしないよ」

相変わらずのあっさりした声で言う言葉に、柊は、

「その言葉も保障はないんですよ」

少し、意地悪を言い返してやった。

「……」

その言葉に命人の顔は固まった。

彼が怒るのは仕方ないということはわかっていたが。

それでもやはり彼を連れて行くことは出来ない。

いや、させないほうが良いと、もっと早く気づくべきだったのだ。

何か言おうと口を開いたが、

「わかってますよ。我俣は言いません。それでは、命令を」

柊も底まで子供ではなかったということだろうか。

その言葉は感情を抑えたようにも聞こえたが、このときの命人は少し安心した。

「…わかった。君は大元帥がいる病院に行つて、この状況を伝えるんだ。あの人ももう、わかっているかもしれないけど、念のために」

「了解しました。それじゃあ、今から向かいます」

「うん、じゃあ」

「終わったら、連絡くださいね」

「わかっているよ」

柊は思い出したように、封筒をテーブルの上に置いた。

「それじゃあ、これ、置いていきますね」

「ああ、うん」

別になんともしない、奇妙な別れ方だった。

それはこの日の夜まで命人の心に引っかかることになる。

二十一話 別れ（後書き）

今年最初の語りは…ちょっと置いて、裏話でも。

この話は連載当初から考えていたんですが…上手く書けなかった、というのが本音です。

もっと、パンチの効いた文章、展開にしようと考えていたものの、見事撃沈…。

自身の実力の低さが露呈する結果となってしまうて、本当に楽しんで読んでいらつしやる読者の方々には申し訳が立たないです。

そろそろ、物語も終盤戦、完結までの展開は出来てはいますがそれを上手く纏めることが出来るのか…こんな半人前の作者ですが、暖かい視線で見守ってくれば幸いです。

二十二話 先（前書き）

ちよつとスランプに入ってます。
なので今回は短めに…。

二十二話 先

結局のところ、俺は何も出来やしないのだ。

『人間』である俺に出来ることは、おとなしくしておくこと。

それで充分のはずなのに、なんでこんなに苦しいのか。

柊は病院に着くまでの間、ずっと考え込んでいた。

いつの間にか、病院に到着した時も柊は悩み続けていた。

そして、気づいた。

「大元帥に会って、どうすりゃいいんだよ」

今の自分は一軍人だ。

そう易々と会える人物ではない。昨夜会えたのは本当に偶然だ。

それに気づき、心の奥からのため息をついた。

時計を見ると四時過ぎだった。

「ああ、そういえば」

妹の椿がまだ入院していたはずだ。

お見舞いに行こうかと考えた。

仕事なんかあつてないようなものだし。

考えがまとまる前に柎の足は、椿の病室に向かっていた。

命人は考えていた。

自分に間違いはなかったか。

正確には彼がこの事件にもう関わることはないか。

六甲と二人きりで話し込み、これ以上この事件に彼を関わらせないと二人で決めた。

六甲に今はいない隊員を集めるように指示を出した。

六甲には自分は明日の朝まで動かないと言っていたが、最初からそんなつもりはなかった。

いや、柎が持ってきてくれた資料に目を通した瞬間に、命人は今日の夜にしか動くチャンスが無いと確信した。

この事件の黒幕と思われる、笹林中将。

彼が今日、演習場を貸しきると資料に書かれていた。

しかも、昨日の夜に無理やり割り込んだらしい。

明らかに罠だったが、罠とわかっていれば対策も出来る。

肉体もほとんど回復した。

迷う時間はもうなかった。

ただ不安なのは、自分の核。

この数十年、恐れていたことが今になって発生した。

身体と核の拒絶反応。

「大丈夫さ、陸奥」

命人は弟に語りかけた。

彼の核に語りかけた。

今は自分の核になっている、弟の核に。

「お姉ちゃんにもうちよつとだけ、生きる時間を頂戴」

命人は胸に手を置いた。

そこは核の真上の位置だった。

「人を守る時間をもうちよつとだけ、ほんのちよつとだけ頂戴ね」

「なんできたのよ、バカ兄」

「まあ、気分だよ」

妹の機嫌は相当悪かった。

なんとなく心当たりはあるが、それを言つとさらに機嫌を損ねるので難しいところではある。

「だいたい、仕事中じゃなかったの」

「今日は早く帰らせてもらつたんだよ」

「嘘つき。どうせ、振られたか、失敗したか、邪魔者扱いされたかのどれかでしょ」

当たりだ。

「まったく、私の兄ながら情けない」

「まったくだな」

「同意すんな」

「すまん」

「っていうか、ほんとに失敗したわけ」

「いや、失敗というか、……邪魔者、かな」

「まったく」

大げさな身振りのため息をついた椿は、呆れたように言った。

「あたしは軍人じゃないから、よくわからないけど……あの人の性格から、危険に晒したくなかったんじゃないの」

「えっ」

間拔けな声が柵から出た。

椿はイラだった様に怒った口調で怒鳴った。

「だから、あんたを守りたかったのよ。危険から」

「ああ、そういうことか」

どうやら自分は…動揺していたらしい。

「まったく、わかった？」

「ああ。ありがとな、椿」

「わかればよろしい」

命人が目を覚めると、外は暗くなっていた。

時間は十八時過ぎを指していた。

やや焦って、脈打った心臓が徐々に通常の速度に戻る。

まだ、大丈夫だ。

しかし、そろそろ行かなければ。

あの資料の情報を信用するなら、笹林が演習場を使うのは二十時。

まだ余裕はあったが、早めに出ようと思った。

肉体の損傷も、ほぼ治った。

相変わらずの人間離れした能力で、自分でも不気味に思ってしまうが、今回はその不気味さに感謝する。

着替えを終えて外に出ると、寒空の下に吹く風が身を切った。

それでも、その寒さに感謝する。

自分は生きていると、肉体が自分に語りかけているように聞こえるのだ。

列車を使って演習場の近くまでに着いた時には、すでに十九時半になっていた。

演習場に向かって歩き出そうとした時、いきなり肩を掴まれた。

命人の身体が硬直する。

「逃がしませんよ、隊長」

その声を聞いて、命人は瞳を閉じた。

ある意味安堵しながら、ある意味怒りながら聞いた。

「なんで、ここに？」

「資料を見たんですよ。途中で開けて、中身を全部メモに書きました。途中、封筒とノリを買って、隊長に渡したんですよ」

「まったく…」

「あの時、いわれた時はちょっと混乱していたんで冷静な判断は出来ませんでしたけど、今ならそれが出来ます。隊長、自分はあなたを死なせはしません」

命人は何故かはわからないが、死期を悟った。

本当にどうしてかわからないが、彼のその言葉を聞いて安心して眠れるような気がしたのだ。

だが、まだ死ぬわけにはいかない。

死んではいけない理由が出来た。

「そうだね、生きてみようか」

もうちょっとだけ、彼と一緒に生きていこう。

「はい」

もうちょっとだけ、彼の声を聴こう。

もう一度だけ、仲間と会おう。

もうちょっとだけ、歩こう。

もうちょっとだけ……

もうちょっとだけ……

もうちょっとだけ……

……神様。もう少しだけ、私を生かさせてください。

二十三話 歩み

演習場の近くは、夜ということもあるのだろうが、やけに静かだった。

演習場を使っている気配はない。

「隊長、やっぱり……」

「畏だろうね」

「…どうしますか」

「君ならどうする？」

「……」

柊の本心は、わざわざ危険に突っ込んでいくことも無いと思っていたが、『虎穴に入らずんば』とはよく言ったもので、それを承知で行かなければならない状況はきつと今なのだろう。

それに、おそらくこの向こうにはこの事件の黒幕がいるはずだ。

ここで逃がせば、この事件に終わりは来ないだろう。

「行きましょう！死んでも…いえ、生きて帰りましょう」

「それしかないよね。じゃあ、せいぜい死なない程度に…でも、死ぬ覚悟で行こうか」

「はいっ」

二人は同時に再び足を前に出した。

演習場がある基地の周りはフェンスに囲まれ、一般人は入ってこれないような仕組みになっていた。

さらに、フェンスの内側には木々が生い茂っており、中の施設は外からでは見えないようになっていた。

「なんだか、コロシウムみたいですね」

木々の間にある舗装された道路を歩きながら、柊は思ったことを口にした。

「コロシウム…か。まあ、そう見ることもできるね。けど、ボクはどちらかというと…」

命人が言葉の続きを言おうとした時に、基地に着いた。

基地の電灯は全て点いており明るかったが、奇妙なことに人気がなかった。

無駄な眩しさに、やや目を細めた柊だったが、それ以上に妙な事に気づいた。

「…なんかいますね」

獣の唸り声のようなものが耳に入った。

「『生物』でしょうか」

「かもね」

演習場に近づけば近づくほど、その唸る声は大きくなる一方だった。

そして、二人はその唸る『それ』を見た。

「う、わぁ」

「……」

『それ』は機械と『生物』を掛け合わせたようなモノだった。

一見すると巨大なトカゲだが、トカゲは目は三つもついてないし、毛も生やしていない。

口と思える場所から、涎とオイルのようなものが混ざっており地面を照らしていた。

身体の節々にはネジや鉄棒、果ては砲台のようなものまでが見えた。

とにかく、生理的に受け付けないような『生き物』だった。

「こ、これって」

柊は吐き気を抑えながら、考えをまとめようとしていたが、命人は答えを聞かずに動いた。

演習場のフェンスを飛び越え、怪物と戦うためのステージ降り立った。

「木野君はそこにいて」

「でも、」

「いいから。見守ってくれるだけでいい」

悔しかったが『人間』である自分に、この化け物を倒すことは出来ないと感じた。

命人はやや表情を緩めながら聞いた。

「あなたは昔の自分を覚えている？」

化け物は三つの目を全て向けて、じっと命人を見つめる。

「あなたは覚えてないかも知れないけれど」

そう言いながら、手を『爪』に変形させる。

それに気づいた獣は鎌首を上げた。

「私は覚えているよ」

パイプと牙がごっちゃに並んだ口で命人を噛み潰そうと、地面に

頭を振り落とした。

「今開放するから」

命人は高く跳んでおり、その言葉を締める。

「土佐」

柊の目の前で起こっている事は現実だった。

しかし、

現実のはずなのに何故だか、信じられなかった。

それほど凄まじい戦闘なのだ。

命人の動きはひとつも乱れがなく、美しいとさえ思えた。

怪物の肉体を確実に削りながら、相手にダメージを蓄積させている。

怪物のほうも身体の節々にある砲台やパイプから何かを発射している。

柊の近くに落ちたその『何か』は赤黒い液体だった。

鉄と燃料が混ざった嫌な臭いだった。

「こいつ、自分の『血』を打ち出しているのか？」

どちらにせよ、このままいけば命人の勝ちだ。

血にせよ燃料にせよ、吐き出し続ければ死ぬか倒れる。

だが、どうにも納得がいかない。

自滅して喜ぶなんて、敵の切り札にしてはおかしすぎる。

（何か…何かきつと裏がある）

柊は叫んだ。

「隊長！こいつには何かあります。早く倒さないといっ

柊の叫びは命人に届いていた。

答える余裕はなかったが、彼が感じた違和感を彼女も感じていたからだ。

しかし、本気で戦うことは出来なかった。

この化け物は土佐の成れの果てだということが分かったからだ。

初めて見た瞬間、自分の核が叫んだのだ。

この生物の奥に核があると。

その核は「自由」を求めていると。

それは自分達が望んではいけないものだったが、彼女はこんな姿になっても求めていたのだ。

ならば、叶えてあげなければ。

おそらく、上手いことを言わされて改造されたか、工場の爆破の時に回収され無理やり改造されたか……どちらにせよ彼女はまだ生きています。

生きているうちに助けなければいけない。

助けて、謝らなければならない。

そして、自由を与えてあげたい。

だから、

「だから、これで決める」

静かに宣言した。

腕を『爪』から、さらに変形させ、巨大な『キャノン』となった。

その砲口を、頭部に向ける。

威力は極力弱め、しかし最大限の効果を与えることを期待して……。

直後、その場に巨大な轟音が響いた。

柊の目の前で怪物の頭が爆発した。

昨夜も同じような光景を見たが、やはりこういうものは慣れない。

怪物の巨体がゆっくりとした動作で倒れ、地震のような振動を生む。

ほぼ同時に命人も倒れた。

「隊長！」

柊は必死の思いで、フェンスを乗り越え命人の近くまで走った。

「隊長、大丈夫ですか」

命人の顔を覗き込んだ。

その顔は眠っているかのように瞳を閉じていたが、口は動いた。

「聞こえてるから、もうちょっと静かにしてくれるかな……」

静かだがはつきりとした声が柊の耳に入った。

柊は安堵して、大きくため息をついた。

「よかった。無事で」

「まあね。けど、やっぱり年は取りたくないよ。昔に比べたら体力が無くなった」

乾いた声で笑ったが、それは無事を示す行動だった。

そして、命人の笑い顔がすぐにまじめな顔に戻った。

「木野君。彼女を…土佐を救ってくれないか」

「えっ、土佐？あの化け物が、ですか」

「気がつかないのも無理ないね。けど、間違いなく彼女だよ」

「けど、一体どこに…」

頭部は木っ端微塵に吹っ飛んでいる。

そこらにネジやら、脳の破片やらが飛び散っているが人間らしき姿は無い。

「多分、胴体だ。ボクはしばらく動けそうに無い」

柊は首が無くなった化け物の胴体部分を見た。

とても表現できたものではなかったが、あの中に土佐がいるとしたら引っ張り出さなければならぬ。

「わかりました」

やや渋々といった感じで柊は答えた。

胴体部分に歩み寄り、近くに行くほど嫌な臭いが増してくる。

嫌な味の唾を無理やり飲み込んで、動かない怪物の目の前までに着いた。

その身体からは明らかに死の臭いがする。

手袋をして吐き気を抑えながら、血塗れの肉を掻き分け始めた。

手に当たる感触は生暖かいものだけではなく、時々、金属的な硬さのものもあった。

それでも必死に人の足や手はないか、動くものはないか、探し続けた。

その苦勞が報われたのか、人の手のようなものに当たったような気がした。

それを掴んで一気に引き寄せた。

かなり重かったが、それでも頑張った。

柊は、最後は叫びながら引つ張り、ついに全身が抜けた。

「やっぱりね」

命人が血塗れ、オイルだらけの土佐を見て言った。

「生きてるんでしょうか」

息継ぎをしながら、柊は聞いた。

命人は土佐の首元を当てながら、静かに頷いた。

「じゃあ、これからどうしますか」

命人が口を開け、答えようとした時銃声が響いた。

命人には何もない。

ということは…

「木野君？」

その問いに誰も答えることなく——誰かの身体が倒れる音が彼女の耳に入った。

二十三話 歩み（後書き）

そろそろ、終盤戦です。

作者自身、ここまでこれるとは…感慨深いものです。

二十四話 途切

銃声の余韻が響く――。

「木野君！」

そんな、そんな馬鹿な。

どうして、なんで、なんで……

「！っ」

命人は胸を押さえた。

こんなときに……！

荒い息で呼吸を整えようとするが、一向に動悸は収まらない。

「くっそお」

地面にこぶしを思いつきり下ろす。

コンクリの地面が少しめり込んだが、手の痛みが加わっただけで胸の痛みは増すばかりだった。

「ご苦労だったよ、土佐。君はこれで自由だ」

胸の痛みにより神経が研ぎ澄まされていた命人の耳に入ってきたのはそんな声だった。

「笹林……中将……か」

すらりと背の高い軍人らしからぬ体形の男性が目に入った。

後ろには十数人の軍人が、完全武装しながら並んでいた。

全員がマガジンを構えながら、命人、土佐、柊を囲んでいる。

「久しぶりかな。長門」

「はじめまして、じゃないかな。笹林中将殿」

笹林は穏やかに笑いながら、手を上げた。

一斉に銃弾が発射される。

それを予期して、命人は柊の身体に覆いかぶさった。

それでも、柊の身体にいくつかの銃弾がめり込むのが見えた。

命人も銃弾が肉体を抉ったが、身体の痛みよりも、心の痛みの方が大きかった。

彼を守りきれなかった。

数分前までの時が嘘のようだった。

「さて、予想以上に進行しているようだね長門」

笹林の穏やか過ぎる言葉が耳に入った。

「何のことかな」

「とぼけるのはよしたまえ。君の核のことだよ。……それは君の弟、陸奥のものだな」

「……」

胸の痛みがひどくなった。

言葉を発する事も難しい。

「少し昔話をしようか」

笹林はそう言葉を切って、語り始めた。

「そこに倒れている土佐が反乱を起こした理由を君は知っているな。奴は何も考えず、ただ従順に、軍内部の過激派の言うことを聞いた。その結果、反乱は未遂に終わり、土佐も君に捕らえられ研究所送りにされた。そのすぐ後だったな。陸奥が暴走し、君が彼を殺したのは。自分の核をそのとき失い、彼の核を代わりに宿すようになったのは」

笹林はここで言葉を切り、笑った。

命人の表情を笑った。

命人の怒りの表情を見て笑った。

「土佐は兵器として、何も悪いことはしていない。むしろ、完璧な『兵器』だ。『生物』を圧倒する力を持ち、人間を超える再生能力を持つ…兵士としては完璧だ！」

「君が何を怒っているのかは分からないが、私は彼女を高く買っているのだよ。もちろん『兵器』として。大元帥は君たち、生き残っている『兵器』に人間らしい処遇を与えているが、私は認めない」

「ただ、君らのその再生能力は認めざるを得なかった。これをもっと実用化できないか、と考えていたのだよ。そのために」

「土佐を、実験体にして、研究、していた、か」

絞り出すような声で命人は言った。

叫んだつもりで口を動かしたが、擦れた声しか出なかった。

笹林は微笑んだ。

「そう、君が捕らえた土佐を解体し、研究を続けた。前任者は月に一度しか研究せず、しかもその研究内容は血液の採取だけだった。これでは研究ではない。私のやり方は、ひたすら内蔵を取り出し続け、人体と接合可能かを実験することだった」

「しかし、それにも限界が来た。土佐の肉体の再生能力がなくなつたのだ。奴は気づいてなかったらしいが…まあ、最後まで使うこと

が出来た、立派なモノだったよ」

命人は齒を食いしばる。

自分達は人から見れば、その程度にしか見られていないのか。

本当にただの喋るモノなのか。

柊を見た。

彼も自分をモノと見ていたのか。

彼の答えを聞いたかった。

正確には彼の生きている証をみたかったのだが。

「一方の陸奥は役立たずだった。心が弱すぎたのだ。性能は問題なかったのに。まあ、どちらにせよ奴は暴走し、君の殺された。最後の抵抗かは知らんが、君の本当の核を破壊してな。今の君の核が陸奥のものだということは分かっている。問題はその定着率だ。本来、兵器の肉体と核は本体でないと、拒絶反応を起こす」

「そこで、君だよ。長門。君の核は陸奥のものだったのに、何故拒絶反応がないのか。君は特殊な肉体なのではないのかと、考えられた。君を捕らえて研究することにした」

「ボクと、彼が、血の繋がった、双子だったから、じゃないですかね」

「かもしれない。そうじゃないかもしれない。0%じゃない限り我

々には研究する価値がある。まあ、それも長くはなさそうだ。今になって拒絶反応が出てきているようだし。陸奥に聞こうか。今お前は生きているか」

命人の胸が熱くなった。

心臓が燃えているかのような感覚で、咽こみ、悲鳴を上げた。

「私を認識することが出来るのか。肉体が死んでなお、生き続けるのはたいしたものだよ」

感心したように、笹林は呟いた。

弟——陸奥に関することは命人、長門にとって、最大の禁句だ。

笹林はそのことを知っているのだろう。

陸奥に関することを言うと、彼の核が叫ぶように響く。

笹林は長門の肉体との拒絶反応を発生させようとしている。

拒絶反応を起こした上で、動かなくなった自分を回収しようとしている。

防ぐ手立ては、全くなかった。

ただ、動かず笹林の声を聞くことしか出来ない。

「今から、君を解放するよ。いいな。肉体が動くのをもう許すなよ」

その言葉の後に命人の身体は動かなくなった。

金縛りなんて生易しいものじゃない。

完全な「静止」だ。

万事休す。

もはや、終わりだった。

みんなともう一度、会いたかった。

六甲と別れたのは失敗だったな。

いや、ここは正解ということにしておこう。

たとえ、自分が死んでも笹林の好き勝手にはもっさせないだろう。

倒すことは無理でも、一矢報いるはずだ。

そう考えると、気が楽になった。

木野君。

ごめん。

君を巻き込んで。

謝って済む問題じゃないよね。

けど、謝らせてよ。

ゴメン。

なんだか、どうしていいかわからない。

本当に……——

命人の意識はそこで途切れた。

二十五話 奇異

「…止まったか」

「おそらく…」

「まったく、面倒なことだ…竹田。長門以外の処理は任せる」

「はい。長門は？」

「船に乗せる。明日、お前は予定通り行動を起こせ」

「はい」

「抜かるなよ」

「わかっていますよ。それでは御武運を」

「ああ」

「……やれやれ、人使いの荒い人だ。おい、お前たち。長門だけは丁寧に扱え。他は多少乱暴に扱っても構わん」

「竹田隊長、死体の処理は」

「後で決める。とにかく、長門だけは丁寧に箱に詰めろ」

（ほんと、大丈夫なのかよ）

（知るかよ、俺だってこんなことだとは）

（だってよ、こんなこと隠しきれぬわけねえじゃんか）

（まったくだよ。これじゃ、まるで反乱じゃないか）

.....。

これは、

そう声だ。

しかし、何故、俺に声が聞こえるんだ。

ああ、そういうことね。

まったく、こんなに早く死ぬか、こいつは。

仕方ない。

これも約束だ。

まったく、俺は面倒はいやなのにな。

さて、動くとするか。

仕方ない。

やれやれ。

「えっ」

異変に最初に気づいたのは、長門の身体に触れようとした隊員だった。

「どうした」

同僚が声をかける。

「いや、今こいつ動いたような」

「冗談はよせよ。死んだような状態だろ。下のは奴は本当に死んでいるんだぜ」

げらげらと笑ったが、共感の笑いはこなかった。

もう一人の隊員は、怪訝そうに首をかしげながら言う。

「え、でも」

それが彼の最後の言葉だった。

彼は胸の心臓を文字通り、鷲掴みにされ死んでいた。

血のシャワーがあたり一面に降り注ぐ。

「は？」

笑っていた同僚も、気づいた時には腹を貫かれていた。

その先には――

「おい、最期の最期まで油断するなよ」

死んだはずの木野柊が、邪悪な笑顔で語りかけていた。

「ひっ」

それが彼の遺言になった。

小さな叫び声の後、血の塊を吐き出しまともな言葉が出なかったからだ。

二人の人間が倒れたことで、他の隊員も事態を把握したらしい。

銃を構え、撃つ。

長い銃声の後、そこには倒れた人間が一人いるはずだ。

しかし、

「おまえらさあ……人間用の弾じゃ俺は死なないぞ。対『生物』用の弾じゃないと」

柊は嘲る様に言った。

何事もなかったように歩き始める。

柊の身体に当たり、形状が歪んだ銃弾が、彼の身体からポロポロと落ちる音があたり一面に、静かに響く。

「お、おまえ、人間じゃ」

誰かが言った。

柊は丁寧に答える。

「残念ながら、普通の人間じゃないな、俺は」

首を軽く回す。

「まあ、正確に言うとアレだ」

そう言いながら一瞬で近くの隊員の近くまで移動し、彼の首を撥ねる。

「アレだよ、アレ。えーとなあ」

混乱して、銃を乱射する人間の顔面を殴り潰す。

「そうなんだよ、アレ」

アレという言葉を呟きながら、一方的な殺戮が始まった。

アレという静かな眩きと、

混乱し、狂乱し、恐怖により奏でられる銃声のBGMと、

絶叫による

悪趣味なショーだった。

やがて、銃声の音は少なくなり、悲鳴の数もなくなった。

そして、この劇の最終章は――

数十人いた人間の最後の一人、竹田隊長に語りかける。

「や、やめろ」

「アレ、俺ってさ。アレなんだよ。あれ、アレってなんだろうな。そうアレ」

竹田が狂ったように銃を構える。

太った頬は汗によって輝き、口からはだらしなく涎が垂れていた。

瞳には言わずもがな、恐怖の根源しか映っていない。

その行動を見て、柊は笑った。

「俺はさ」

銃声。

「こいつを乗っ取ってんの」

柁の皮を被った、『生物』は語る。

「どういふことが教えてやろうか」

竹田の胸から、彼は手刀を抜く。

一瞬、噴水のように彼の胸から血が吹き出たがそれもすぐに止まり、ただダラダラと流れるだけになった。

「隊長さん」

彼が振り返った先には、意識を取り戻した命人がいた。

疲れた表情だったが、その瞳には生氣と恐怖とそして、怒りがそこにあつた。

命人は問う。

血に塗れた『生物』、木野柁に。

「君は誰？」

「木野柁の皮を被った『生物』だよ」

「普段の彼は？」

「まだ生きてる。俺が生きてる限りな」

「どういうこと」

「あいつは一度死ぬことが出来るんだよ。あいつが生きている間、俺は死んでる」

「つまり」

「俺はあいつを生かしているが、あいつも俺を生かしてくれてる。詳しい事情は言えないがな」

少しの沈黙。

命人は考えるように俯き、

「彼は」

『生物』は柊の生死を聞いてるかと思い、答える。

「しばらくすれば出てくる。安心しろ、木野柊は死んでない」

命人は首を振った。

そのことを聞きたかったのではないらしい。

「君のことを知ってるの？」

その問いに、戸惑ったように『生物』は答える。

「ああ、知ってる。昨日、そいつからあんたを助けたのは俺だぜ。柊に頼まれてな」

倒れたままの土佐の方を顎で指しながら言った。

「その節はどうも。あと、拒絶反応を緩和してくれたことも感謝するよ」

陸奥の核が、肉体との拒絶を求めるよりも『生物』を殺したいという衝動が勝ったのだ。

おかげで、今の命人の状態は良好になっていた。

「それは偶然の産物だから、感謝されても困る」

「そう、けど」

周りの惨状、人の屍の大群を見る。

それを察したように『生物』はいった。

「結構、人を殺っちまった事か。安心しろ。大元帥がもみ消すさ」

「そんな簡単に……」

「ジ・エンドが動いている。これを聞けば安心だろ」

ジ・エンド。

大元帥直属の暗殺者。

正直って気持ちのいいものではないが、彼にとってはこんなことでも、容易にもみ消すことが可能なだろう。

「そう、彼が」

「そういうことだ。俺は直接コンタクトは取れなかったが、封筒の中に指令が入っていた」

「…そうなの？」

「あの六甲とかいうおっさんは、情報屋『盤上の駒』とつながっていてな。『盤上の駒』は大元帥の直接の部下でもある。情報屋から渡された情報は、大元帥の指令でもあるのさ」

「…そっか、六甲も柊君も、みんな全部知っていたのか。知らなかったのは」

自分だけだったのか。

その様子を見た『生物』は困ったように頭を掻きながら言った。

「こいつは嘘、というか隠すことが得意だからな。人間らしい振る舞いを演じることも難しくなかったんだよ。心の中でもな。まあ、そのことは直接謝らせるが」

長い沈黙が二人の間に流れた。

「…最後にひとつだけ」

「なんだ」

「君の名前は？」

『生物』は口元の端を歪めて、初めて名乗った。

「ストレッチ
…紀伊」

「覚えておくよ、紀伊」

二十六話 違いと裏

紀伊が名乗った直後、彼の身体は糸が切れた人形のように倒れた。

「紀伊？」

命人が叫んだが、考えてみれば彼が柁に身体を返したのではない
かと思い、暫く待ってみる。

思ったとおり、唸りながら柁が目を覚ました。

なにか、嫌な夢でも見ていたような顔で顔色は悪かった。

「隊長……」

「木野君だよな」

一応聞いてみる。

「ああ、はい」

気の抜けた返事が返ってきて、命人はやや脱力したがこういうと
きの定番の挨拶をした。

「おはよう」

「あ、おはようございます」

とりあえず、命人は一発殴っておいた。

柊を殴り飛ばした後、これまでの愚痴、それこそ部屋にはテレビがないことまで、とりあえずぶちまけることにした。

柊としても、断れることができない（断れない）理由があっただけに、逃れることの出来る可能性は皆無だった。

小一時間後。

「と、いう訳で色々と君に言いたい事があるわけだ、君には」

「ええ、それはもう覚悟しています」

「で、一体どうして君の中に『生物』がいたんだい」

核心を突く一言だった。

『生物』が人間の姿をとることは珍しいことではない。

実際、多くの『生物』はそうやって暮らしている。

しかし、彼らのように共存の道を選んだ『生物』も、ましてや人間も存在しないのだ。

彼ら、木野柊と紀伊以外は。

柊はやや躊躇いながらも、口を開いた。

「隊長は【事例一『生物』空輸密輸事件】を知ってますよね」

「昨日の夕方に話したことかい」

「あの事件の『生物』が紀伊なんですよ」

「……」

「どうしました」

「いや、純粹に驚いている。死んだと聞いていたしね。死体も回収したと聞いたけど」

「実はそのとき、自分もそこにいたんですよ。紀伊が落ちて、廃墟になった街の中に」

あ の とき、自分は父と母と暮らしていました。

妹は病気で、祖父のいる帝都に預けられていました。

それは幸いでした。

多分、一緒にいたら椿は死んでいたでしょう。

紀伊から聞いたんですが、彼はどうやら薬のせいでイカれていたらしいです。

正常な判断が出来ずところ構わず暴れて、気づいた時には地面に落ちていたと言っています。

地面に落ちたショックで、肉体が修復不能なまでに損傷したとも

言っていました。

そのとき、霊体になって辺りを一時的に彷徨っていたらしいんです。

そして、近くに自分は死ぬはずだった自分を見つけて声をかけました。

「生きたいか」

「うん」

「じゃあ、一緒に生きよう。俺も俺一人じゃ生きれないんだ」

「共存ってこと？」

「そう、俺と一緒に生きれるようになると、この世界でも生きていける、丈夫な身体を手に入れることも出来る。怪我の治りも早いぞ」

「いいよ。けど、他の皆は」

「そりゃ無理だ。お前一人だけだよ」

「じゃあ、約束してよ」

「何を？」

「誰も殺さないでよ」

「……お前、なんで」

「『生物』なんですよ。みんなを父さんを母さんを友だちを殺した
んでしょ。だったらさ、次に殺すときは僕がこいつを殺したい、と
思った時にしてよ。あと、僕が死んだ時はそのまま使って良いから
さ」

「…いや、例え、お前が死んでも俺が死なない限り、お前は死なな
いんだ。身体はお前のだし、変に長く使つてると拒絶反応がでてく
るし…おれもなあ、身体がないしこのままだと確実に死んじまうし
…よし、決めた。俺はお前の『相棒』になる」

「相棒？」

「そうさ。お前が誰かを救いたいと思った時に俺が出てきて、お前
の望みどおりする。その代わり、お前は俺と一緒にいることを否定
しないでくればいい。なあに、それなりに長く生きたし、ここで
『使われる生き方』も悪くねえよ」

「……わかったよ。ところで名前は」

「名前？そうだな。うんじゃ、お前が決めてくれ」

「わかった。じゃあ、ストレンジってどうかな」

「ストレンジ？それってどういう意味だ」

「奇妙って意味だよ」

「なるほど、それは俺にぴったりだな」

「でしょ」

「おう、オーケー、俺の名前はストレンジだ。そんじゃ、よろしく相棒」

「まあ、それでもアイツと喋らず、軍に発見されるまでの一人の時は苦しみましたが。今は前を向いて歩いてます」

「そうか、君は二人で一緒に生きていくことを決めたのか…ボクとは逆だね」

「えっ」

「ボクの核は、弟、陸奥のなんだよ。ボクは暴走した陸奥を殺したんだ。けど、そのとき自分の核も壊れた。代わりに弟の核を埋め込んで生きながらえてきたけど…」

もう限界かもしれない。

そう続けようとした命人の身体が何かに包まれ、それが柎の腕と気づいた時に命人の顔の色は明らかに赤くなった。

「ちょ、木野君」

それだけしか言えなかった。

後は何が何やら、頭が混乱して思考することが出来なかった。

「大丈夫ですよ。隊長は隊長です。これから、長い時間をかけて弟

さんと向き合えばいいんですよ。逃げて当たり前なんです。自分が変わってるんですよ。中に自分じゃない誰かがいて平然としてられるなんて。だから、負い目に感じる必要なんてない」

「そう、かな。そういうことにしておこうか。ところで…」

「はい？」

「暑いから、離れて」

「……」

「それであいつは軍に回収されてから、実験機関に回されたんだな」

「極秘にね。これは当時、將軍だった彼の祖父と大元帥が親友の間だから隠蔽できたことだ。だから、笹林中将も知らなかったんだよ。研究機関から出る条件に、彼は軍と密約を交わした」

「それが大元帥直々の命令には逆らわず、なおかつ軍に籍を置くこと」

「ああ。監視するって意味もあったんだろっね。まあ、それが零番隊にまわされた理由だろうけど。彼は気づかなかったんだろっかね」

「…多分、役に入り込んでいたんだろっな」

「なるほど。彼は『木野柊』という人間の役をずっと演じていたのか。頭の中や心まで。まったく、たいした役者だよ。ところで我が

親友、六甲。いいのかい」

「何がだ」

「彼らを呼び戻したことさ」

「いいだろう。久々に会っても損はない」

「まあ、今回の事件で一番の被害者は長門かもしれないね。注目を浴びてただけに大元帥も助けることは難しかったと言ってたよ」

「誰から聞いたんだ」

「ジ・エンドだよ」

「…あいつには初めて会ったが…暗殺者というのは本当に見かけに
よらん」

「君ほどのほまり役も、そういないがね」

「笹林中将ですか」

「誰だ…ああ君は大尉か。どうした」

「いえ、伝言を伝えるに」

「誰からのだ。君も分かっているだろう。明日は我々の天下の始まりだ——」

「『二度目は言わない。おとなしく、死ね』」

その言葉を認識しない内に、笹林の身体は倒れその首筋から血が溢れていた。

大尉——ジ・エンドと呼ばれる人物はその場から去り、そして——

その日の朝刊には軍の船が爆破されるという一面が踊った。

終章 睦月の終わり、如月の始まり（前書き）

何とかここまで来ることが出来ました。

終章 睦月の終わり、如月の始まり

「やっと、人心地がついたよ」

零番隊の部屋に戻ってきたときの命人の一声だ。

柊も一年ぶりに戻ってきたような気がする。

深く息を吸い込み、部屋の空気を取り込むことにする。

あの後、大元帥直々と名乗る部隊が到着し、土佐を回収した。

幸いなことに、土佐は長い時間をかければ意識を取り戻すのとことだ。

命人がそのときは、自分達の隊に来てくれるように説得してみると笑いながら語った。

「ところで、木野君」

「はい、なんでしょうか」

「君はまだ、別の隊に移動したい？」

意地悪い声で聞いてみた。

「冗談はよしてくださいよ」

その言葉は「そんな気、全然ありません」と言っていた。

「だよ。ボクにはさんざん借り、というか謝らなくちゃいけないもんね」

ニヤつとしながら、命人は面白がるように言った。

「勘弁してくださいよ」

柊、心の叫び。

しかし、上司は容赦しない。

「それじゃ、今日、零番隊の皆が集まるところから、そのときはよろしく！」

「えっ、それって全部自分の奢りってことですか。破産しますよ」

「大丈夫。椿ちゃんはボクが責任を持って預かるから、君はホームレスにでもなって暮らせばいいよ」

「いや、ほんと、そういうのだけは…あ、じゃあゲームで決めませんか」

「それもそうだね。けど、ボク、ゲーム機が」

「安心してください。オセロで勝負です！」

「また、アナログな」

「いいじゃないですか。もしかして逃げるつもりですか」

「はっ、まさか。いいよ。受けて立つ！」

「はい！」

こうして、睦月最後の物語は幕を閉じ、如月が幕を開ける。

彼らの行く道には壁か、それとも平坦な道か…。

壁を超えることが出来るのか、

道を転ばずに歩いていけるのか。

それは彼ら次第でもあり、

彼らが決めることだろう。

FIN

あとがき

と、いうわけで一年近く続いた「クロス×ライン」。

とりあえずの完結を迎えることが出来ました。

おいおい、とりあえずってなんだよって感じですが。

ここではクロス×ラインの裏話って程でもないことを書き連ねたいと思います。

まず、作品を書こうと思ったキツカケはある作品が完結すると聞いた時です。

正直言って、その作品はもう完結しないと思っていました。

自分はその作品が好きで、と同時に最後まで読むことが出来ませんでした。

それは永遠に終わることのないものだと思っていましたからです。

けど、終わりは来ました。

絶望視していた終わりが来たのです。

自分はこのとき、ある種の衝撃のようなものを受けました。

そして、ふと「自分でも書こう」と思ったのです。

まったく、自分でも意味不明ですが、とにかく書いてみようと思ったのです。

それ以前にも作品を書いていましたが、どれもちゃんとした「最後」を迎えることが出来ませんでした。

けれども、書こう、とりあえず、最後まで書いてみよう。

そう決めて書き始めました。

書き始めて小説を書くことの難しさ、作品作りの大変さを感じ、自分の未熟さを痛感しました。

諦めかけたこともありました。

だけど、諦めずに進み続けました。

そして、なんとか完結させることが出来ました。

書き終わって最初に思った感想は、これ例の（上記にある）作品とそっくりだあ！でした。

オリジナリティは皆無^{かも}です。

最後のほうは色々説明不足だったり、描写不足だったりするので、そついった指摘はどんどんしてください。

こんな未熟な作者ですが、読んでくださった皆様。

読んでくださるだけでなく感想を送ってくれた皆様。

こんな場所ですが感謝します。

ありがとうございました。

追記、次の作品は、ダークファンタジーか復讐劇かコメディにしようかと思っています。

補足1

苦しく、痛く、けど優しい内容のその作品の名前は言いませんが、調べれば分かると思います。

ので、興味のある方は調べてください。

この作品と酷似した内容ですが、その作品の方がはるかに完成度が高いです（当たり前）。

一度、読んでみてください。

補足2

後々、作品の裏話を書こうと思います。

興味ある方は時々、覗いてください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1999e/>

クロス×ライン

2010年10月14日19時21分発行